

第66回 全国造形教育研究大会 東京大会

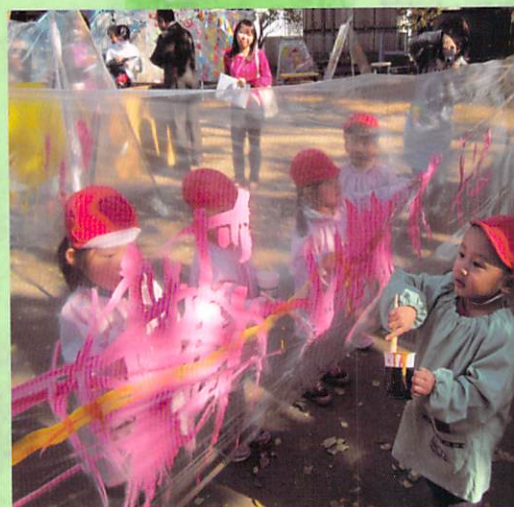
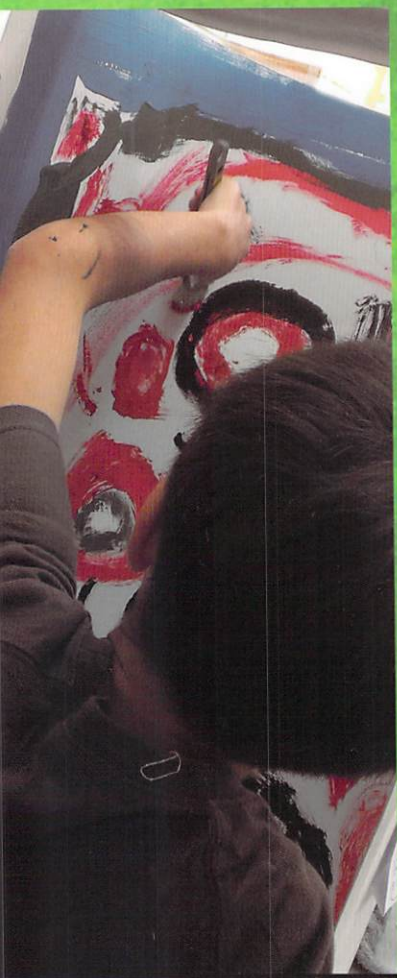
第52回 東京都図画工作研究大会 城東大会

第31回 東京都中学校美術 教育研究大会



造形美術教育のダイナミズム ー 成長と連携 ー

報告書



期日：2013年(平成25年)11月28日(木)，29日(金)

● 第1日目:全体会 11月28日(木)

会場:国立オリンピック記念青少年総合センター

● 第2日目:校種別分科会 11月29日(金)

会場:文京区立千駄木幼稚園・江東区立南砂小学校・墨田区立両国中学校



2013 TOKYO

造形美術教育のダイナミズム

— 成長と連携 —

第66回 全国造形教育研究大会 東京大会 報告書

第52回 東京都図画工作研究大会城東大会

第31回 東京都 中学校美術 教育研究大会

期日：2013年(平成25年)11月28日(木)，29日(金)

- 第1日目：全体会 11月28日(木)

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

- 第2日目：校種別分科会 11月29日(金)

会場：文京区立千駄木幼稚園・江東区立南砂小学校・墨田区立両国中学校

●主催：全国造形教育連盟 東京都造形教育協議会

●後援：文部科学省、東京都教育委員会、新宿区教育委員会、文京区教育委員会、墨田区教育委員会、江東区教育委員会、目黒区教育委員会、世田谷区教育委員会、渋谷区教育委員会、荒川区教育委員会、葛飾区教育委員会、江戸川区教育委員会、全国国公立幼稚園長会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国特別支援学校長会、全国公立学校教頭会、東京都国公立幼稚園長会、東京都公立小学校長会、東京都中学校長会、東京都公立高等学校長協会、東京都立特別支援学校長会、東京都公立小学校副校長会、東京都公立中学校副校長会、東京都立高等学校副校長会、公益社団法人日本PTA全国協議会、一般社団法人東京都小学校PTA協議会、東京都公立中学校PTA協議会、東京都公立高等学校PTA連合会

目次

3 あいさつ

永関和雄（全国造形教育連盟委員長）

菊田 寛（第66回全国造形教育研究大会 大会会長）

4 大会宣言

5 大会風景

8 大会授業と提言一覧

10 指導講師

ひがしら まさひと

東良 雅人（文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官）

岡田 京子（文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官）

12 パネルディスカッション

幼稚園	14
小学校	23
中学校	53
高等学校	77
特別支援学校	85
大学・美術館	89

93 研究の歩み・規約・名簿

センス・オブ・ジャパン ー造形美術教育が日本の感性を育てるー



全国造形教育連盟委員長
永関 和雄

「センス・オブ・ジャパンー造形美術教育が日本の感性を育てるー」。これは全造連本部より提案され、本大会の全国代議員会で採択されたメッセージです。「造形美術教育のダイナミズムー成長と連携ー」を全体テーマとして開催された大会は、全国からの参加者に加え台湾からの27名を迎えて大盛会でした。開催に向け、長い時間をかけて努力された方々、ご支援いただいた方々をはじめ、参加されたすべての皆様にお礼申し上げます。

本大会は、保、幼、小、中、高、大、特支、美術館とすべての部会が授業公開を基本に参加し、これまでの歴史にない意義深い大会となりました。校種を超えた造形美術の大切さが語られ、互いの授業実践を目の当たりにすることで、造形美術教育が人の成長にどのように関わり、そのための連携はどのようにしたらよいのかを考えることができた大会でした。

今年は富士山が世界遺産に登録されたり、7年後のオリンピックが東京で開催されることが決まるなど日本が注目されることの多い年でした。同じように、まだ世界の注目を集めるまでには至っていませんが、日本の造形美術教育も世界に誇れるものだと思います。現在、日本では義務教育の必修教科として全国民が図工や美術の授業を受けています。その制度を堅持しながら教育の質を高めることが造形美術教育に携わる者の使命でしょう。

本大会の成果を全国に広め、生活や文化、産業の基盤となる感性を高めるための学びとして、造形美術教育が極めて大切であることを全国に発信していきたいものです。「センス・オブ・ジャパンー造形美術教育が日本の感性を育てるー」を合言葉に全校種で声を上げましょう。

将来を担う造形美術教育



第66回全国造形教育研究大会
大会会長
菊田 寛

11月28日、29日の両日にわたり、大勢の参加者の基に「東京大会」を開催し、無事終了することができました。全国から参加いただいた関係の皆様にご礼を申し上げます。

今回は、八王子大会以来の10年ぶりの大会になりましたが、前回以上に各園校種の造形教育団体が一丸となって取り組むことができ、東京都にとっても歴史に残る充実した大会になりました。

本大会では、テーマを「造形美術教育のダイナミズムー成長と連携」と設定し、造形美術活動を壮大で幅広い活動と捉えて研究を進めて参りました。それぞれの校種連携が叫ばれる中であって、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学、美術館の研究団体すべてが参加する、文字通りの連携大会となりました。主題に向けて、2年間にわたり各校種の研究団体が議論を重ねたり、校種代表によって研究の方向性を確認したりできたことは、東京都の造形美術教育にとって大きな収穫であり、価値の高い取り組みになりました。そしてさらに、これからの造形美術教育の果たす役割や指導のあり方を見つめ直す大きな指標となりました。

若手教員の資質向上が課題となっている現在、大会では、次代の中心となるべく多くの若手美術教員の活躍がありました。美術科教員として、時代の変化や教育環境、社会のニーズに応える指導のあり方を深く考え浸透させることが、造形美術活動の重要性を広く社会に知らせる鍵になると考えます。この大会を通して、全国の美術教員に少しでも力を与えることができたのであれば大変嬉しく思います。

最後になりましたが、東京大会の開催に関わり、全国の関係の方々、助言者・指導講師の方々をはじめ多くの方々にご尽力をいただきました。ご支援ご協力をいただきましたすべての皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。

大会宣言

震災で今なお苦難を強いられている方々には心よりお見舞い申し上げ、一日も早い復興を祈念いたします。

今、日本は、大震災への対応や原発問題に大きく揺れています。近年、日本人の理性ある行動や逆境に負けない国民性が海外から高く評価されています。そして、2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催に向けて、今まさに、日本中が一つになる機会を与えられ、内外から新たな成長が期待されています。

そのような中で日本経済の方向性と共に学校教育においても大きな変革を迎えています。本年度の高等学校の「学習指導要領」改訂を最後に、幼稚園を含めたそれぞれの校種の教育内容が明らかにされ、次代に向けた教育が動き始めました。各校種では、基礎的・基本的な知識や技能を習得させ、その活用を図るための思考力、判断力、表現力の育成が求められています。そしてその先にある「生きる力」の育成が大きな目標として示されました。

「人はパンのみに生きるにあらず」というキリストの言葉から捉えられるように、生きる中で豊かな感性や美しいものを求め愛する心は、将来の幸せな生活や社会を営むためになくてはならないものです。そしてそれは次代においても変わるわたることのない普遍的な心情です。人の美的感性を育てる作用は、幼い頃、家族との関わりに始まります。大人が、美しいものを美しいと知らせ伝えることで子どもの感覚が研ぎ澄まされ、失うことのない力として成長と共に蓄えられていきます。

本大会では、テーマを「造形美術教育のダイナミズム～成長と連携～」とし、生涯における造形美術との関わりや、その生み出す価値は、成長と共に変化するという視点に立ち、造形活動を幅の広い人間形成のための壮大な活動と捉えました。造形美術教育を幼稚園から大学、そして生涯教育に結ぶ美術館等とつなぐことで、造形への感性や表現力が将来の豊かな生活を支える力となると考えました。

それぞれの校種では、時間削減により、大きな画用紙を広げてじっくりと対象と向き合う時間が生み出せない現状にあります。我々は、限られた時間や環境の中で、造形美術の楽しさや造形美術を愛好する心情を育てていくために、何をどう教え伝えるべきかを探る必要があります。本大会では、造形美術教育の原点を振り返ると共に、教師に、そして子どもたちに未来につなぐメッセージを伝えるという意味を込めて主題に迫りたいと考えます。

これからの美術教育の持つ価値を多くの方々と共に考え、各校種の指導実践を深めることが、子どもたちの豊かな感性を育み、将来に向けて新たな美術文化を築く力を育てることにつながると確信しています。東京から発信する本研究大会の思いが、災害の復興やオリンピックに向けた新たな日本を築く力として大きく広がることを期待し、東京大会、大会宣言といたします。

平成 25 年 11 月 28 日

第 66 回 全国造形教育研究大会 東京大会

写真で綴る大会風景

第1日目 全体会 11月28日(木) 会場:国立オリンピック記念青少年総合センター



国立オリンピック記念青少年総合センター



委員長の永関先生



全造連 全国代議員会議



大会全体会



大会旗を東京から次期大会山梨県へ引き渡し

第2日目 校種別部会 11月29日(金) 会場:文京区立本駒込幼稚園(幼稚園部会)



公開保育



実践発表と全体会



写真で綴る大会風景

第2日目 校種別部会 11月29日(金) 会場:江東区立南砂小学校(小学校部会)



会場校入口



南砂小学校と都図研大会テーマ



会場校装飾風景



子どもの"みる"分科会



子どもが"かかわる"分科会



子どもが"であう"分科会



子どもは"おもう"分科会



子どもの"うごく"分科会



都図研研究局分科会



全体会会場を埋め尽くす参加者



都図研大会旗を次期大会北多摩へ引き継ぐ

写真で綴る大会風景

第2日目 校種別部会 11月29日(金) 会場:墨田区立両国中学校(中学校部会)



会場校入口



受付風景



分科会8「思いを形に」



分科会9「他者への眼差し、外とのつながり」

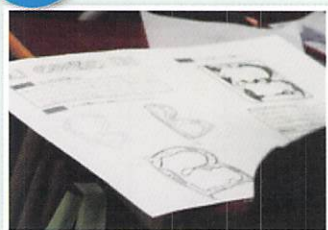


分科会10「形、色彩、イメージの視点を活かして」



分科会11「多様な経験から育む豊かな表現活動」

第2日目 校種別部会 (高等学校部会)



分科会12「社会へつなげる」



他道府県発表



パネルディスカッション



展示風景

第2日目 校種別部会 (大学・美術館部会)



分科会14 大学教育



分科会15 大学と美術館



グループディスカッション



大学・美術館シンポジウム

第2日目 校種別部会 (特別支援部会)



展示作品



分科会16 美術館

公開授業と分科会 …午前の部

● 幼稚園 「感じるままに のびのびと ー素材との出会いや感動体験を生かしてー」(会場④：文京区立千駄木幼稚園)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導講師	都道府県
1	幼稚園	1	矢澤 弘美 (文京区立千駄木幼稚園)	篠原 直子 (練馬区立光が丘さくら幼稚園)	横 英子 (淑徳大学)	千葉
		2	鈴木 直子 (文京区立千駄木幼稚園)	大澤 ちづる (東京学芸大学附属幼稚園)	小串 里子 (造形教育家)	神奈川

● 小学校 「感じる 広がる つくりだす ～ 子どもの力と子どもの育ち ～」(会場⑥：江東区立南砂小学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導講師	都道府県
2	子どもの “みる”	3	片山 知子 (江東区立毛利小学校)	近藤 麻里 (江東区立東雲小学校)	佐々木 達行 (前千葉大学)	宮城 東京
		4	岩崎 陽 (江東区立水神小学校)			
		5	小林 ちあき (江東区立第二亀戸小学校)			
3	子どもが “かかわる”	6	木澤 奈月 (江戸川区立下小岩小学校)	中村 和哉 (江戸川区立第三松江小学校)	水島 尚喜 (聖心女子大学)	北海道 福島
		7	衛藤 陽子 (江戸川区立下鎌田東小学校)			
		8	水谷 さくら (江戸川区立新堀小学校)			
4	子どもが “であう”	9	山川 知也 (葛飾区立青戸小学校)	朝重 久美子 (葛飾区立白鳥小学校)	立川 泰史 (東京学芸大学 附属小学校)	山梨 福岡
		10	渡邊 梨恵 (葛飾区立葛飾小学校)			
		11	奥山 美香 (葛飾区立金町小学校)			
5	子どもは “おもう”	12	桑島 有子 (荒川区立第二日暮里小学校)	山崎 雅愛 (荒川区立尾久西小学校)	西野 範夫 (元上越教育 大学院)	神奈川 兵庫
		13	川田 幸那 (荒川区立尾久宮前小学校)			
6	子どもの “うごく”	14	京嶋 一喜 (墨田区立言問小学校)	東郷 拓巳 (墨田区立第一寺島小学校)	辻 政博 (帝京大学)	長野 愛媛
		15	内田 康予 (墨田区立隅田小学校)			
7	子どもの遊びが 生きる図工	16	河原 賢一 (柏江市立和泉小学校)	雨宮 玄 (あきる野市立東秋留小学校)	山本 高之 (アーティスト)	沖縄
		17	杉山 聡 (板橋区立板橋第六小学校)			

● 中学校 「造形美術教育のダイナミズム」 (会場⑥：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導講師	都道府県
8	思いをかたちに	18	田邊 真由美 (渋谷区立松濤中学校)	鹿倉 美帆 (渋谷区立広尾中学校)	小澤 基弘 (埼玉大学)	沖縄 宮城
		19	花里 裕子 (中野区立第五中学校) 三浦 悦子 (足立区立青井中学校)	桶川 希三子 (世田谷区立千歳中学校)	大成 哲雄 (聖徳大学)	長野 岡山
9	他者への眼差し	20	榎原 純子 (目黒区立目黒中央中学校) 奥山 だみ恵 (目黒区立第八中学校)	河本 珠実 (目黒区立東山中学校)	渡辺 邦夫 (横浜国立大学)	山梨 岩手
		21	志手 伸圭 (足立区立洲江中学校)	高澤 健太郎 (世田谷区立弦巻中学校)	井坂 健一郎 (山梨大学)	北海道 京都
10	形・色彩・イメージ の視点を活かして	22	深見 響子 (世田谷区立上祖師谷中学校)	中村 奈穂子 (世田谷区立世田谷中学校)	大泉 義一 (横浜国立大学)	山梨 福井
11	多様な経験から育 む豊かな表現活動	23	神野 智彦 (新宿区立西早稲田中学校)	立川 英司 (新宿区立新宿中学校)	石賀 直之 (東京造形大学)	岐阜 熊本

● 高等学校 「社会へつなげる」 (会場⑥：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案	指導助言者	都道府県
12	社会へつなげる	24	奥田 陽子 (都立世田谷泉高等学校)	東京都高等学校 美術工芸教育研究会	鈴木 斉 (帝京科学大学) 西尾隆一 (熊本県熊 本市立藤園中学校)	秋田
		25	甲斐 健太 (都立浅草高等学校)			

● 特別支援学校 「造形美術教育のダイナミズム」 (会場⑥：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	東京都特別支援学校 美術教育研究会	実技演習とワークショップ 石丸良成 (東京都立府中けやきの森学園)
13	素材遊び・音遊びアート			

● 大学・美術館 「造形美術教育のダイナミズム」 (会場⑥：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	授業	公開授業	関連授業発表・分科会提案
14	大学教育	26	米徳 信一 (武蔵野美術大学)	シンポジウム「連携でつくりだす 美術の授業」
15	大学と美術館	27	原瀬 裕孝 (ルーヴル・DNP ミュージアムラボ)	
16	美術館	28	亀井 愛 (三井記念美術館) 熊谷香寿美 (東京都美術館)	

実践発表・各都道府県分科会ほか …午後の部

● 幼稚園 (会場④：文京区立千駄木幼稚園)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者
1	幼稚園	當銀 玲子(千葉県浦安市立美浜南幼稚園)	高村 弘志(中央区立泰明小学校)
		飯島 弘子(横須賀市立大楠幼稚園)	浅野 瑞枝(白百合学園中・高等学校)

● 小学校 (会場⑥：江東区立南砂小学校)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者
2	子どもの“みる”	山崎 睦子(宮城県仙台市立七北田小学校) 熊谷 英之(// 仙台市立木町通小学校) 堀江 美由紀(東京都台東区立蔵前小学校)	小川 直人(せんだいメディアテーク) 郷 泰典(東京都現代美術館)
3	子どもが“かかわる”	菊地 惟史(北海道札幌市立白楊小学校) 森口 律(福島県福島大学附属小学校)	天形 健(福島大学)
4	子どもが“であう”	臼井 恭子(山梨県甲府市立貢川小学校) 徳永 直大(福岡県福岡市立福重小学校)	遠藤 久(富士川町立増穂西小学校) 今林 功一(福岡市立石丸小学校)
5	子どもは“おもう”	伊藤 龍豪(神奈川県川崎市立南生田小学校) 藤井 有子(兵庫県神戸市立若草小学校)	川合 克彦(川崎市立玉川中学校) 鎌田 和見(神戸市立北山小学校)
6	子どもの“うごく”	下平 怜那(長野県茅野市立湖東小学校) 野村 晃靖(愛媛県松山市立道後小学校)	吉池 光則(東御市立田中小学校) 上迫 博幸(西条市立三芳小学校)
7	子どもの遊びが生きる園工	佐渡山 園美(沖縄県浦添市立内間小学校)	大城 悦子(沖縄県うるま市立高江洲小学校)

● 中学校 (会場⑥：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者
8	思いをかたちに	田中 浩美(沖縄県金武町立金武中学校) 高橋 清子(宮城県仙台市立館中学校) 高橋 伊智郎(長野県茅野市立東部中学校) 五味 一男(県助言・茅野市立茅野北部中学校) 松永 美紀子(岡山県倉敷市立水島中学校)	三品 良春(宮城県仙台市立南中山中学校) 稲庭 彩和子(東京都美術館)
9	他者への眼差し	鷹野 敦貴(山梨県甲府市立南中学校) 高橋 知志(岩手県岩手大学教育学部付属中学校) 則友 芽子(北海道札幌市立札苗北中学校) 湯口 みゆき(京都府京都市立蜂ヶ岡中学校) 小泉 繁雄(京都市総合教育センター)	小俣 博昭(富士・東部教育事務所) 小池 研二(横浜国立大学) 小泉 繁雄(京都市総合教育センター)
10	形、色彩、イメージの視点を活かして	新野 貴則(山梨大学) 吉田 千春(福井大学教育地域学部附属中学校)	松永 かおり(東京都教育庁指導部)
11	多様な経験から育む豊かな表現活動	佐々木和哉(岐阜県多治見市立多治見中学校) 林 徳和(// 岐阜市立境川中学校) 宮尾 有(熊本県熊本市立城北小学校)	石賀直之(東京造形大学)

● 高等学校 (会場⑥：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	都道府県の分科会	指導助言者	パネルディスカッション パネリスト	モデレーター・講師
12	社会へつなげる	黒木 健(秋田県立西目高等学校)	鈴木 斉(帝京科学大学)	西尾 隆一(熊本県熊本市立藤園中学校) 黒木 健(秋田県立西目高等学校) 小野征一郎(千代田区立九段中等教育学校)	大坪圭輔(武蔵野美術大学)

● 特別支援学校 (会場⑥：墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	東京都特別支援学校美術教育研究会	教材教具・作品展 授業実践の紹介
13	素材遊び・音遊びアート		

● 大学・美術館 (会場：⑥墨田区立両国中学校)

分科会	分科会・テーマ	シンポジウム パネリスト
14	大学教育	平谷 美華子(東京富士美術館) 米徳 信一(武蔵野美術大学), 三澤 一実(武蔵野美術大学)
15	大学と美術館	原瀬 裕孝(ルーヴル・DNP ミュージアムラボ), 亀井 愛(三井記念美術館), 熊谷香寿美(東京都美術館)
16	美術館	館) 伊藤 達矢(東京芸術大学)

指導講評



文部科学省初等中等教育局
教育課程課教科調査官

ひがし まさひと

東良 雅人先生

基調提案の冒頭にあるように、「成長と連携」をテーマにした大会を東京で開催することは意義深いことです。本日は連携について、この大会で、参加される皆さんの力でこういったものが生み出されて欲しいということをお話します。始めにみなさんと共通理解したいことは、子どもは豊かな存在なのということです。大人が豊かさを与えるのではなく、子どもが本来もっている豊かさを広げたり深めたりしていくのだということを前提に授業や発表を見ていただければと思います。

私は、連携で生み出されるものは「つながり」と「ひろがり」だと考えました。

「つながり」は各校種や美術館、各種色々な施設、教育に関わる人がつながり、一人の子どもの成長を切り分けて考えるのではなく、子どもの生き方とかかわりの中から、みんなで子どもたちの学びを考えていこうということです。子どもを一本の線だと考えた時、どこをつなげどこを変えていくかしっかりと考えていく必要があります。子どもが実感的に見えたり、感じ取れたり考えたりできることを大切にしていく必要があります。活動の表面的でなく、子どもの成長や学びを見極められるように我々指導者が成長していく必要があります。

もう1つの「ひろがり」というのは各校種や教育に関わる者が自身のすべきことを明確にするということです。一緒に何かする、連携することによって子どもの1本の線をつなげ、より豊かにしていくと共に、それぞれの発達段階ですべきことは何なのかということを明確化させていくという大きな働きがあります。

現行の学習指導要領では改訂に向けて、感性を働かせて思考判断し創意工夫しながら表現したり鑑賞したりするという一連のプロセスを育成するということ、子ども達の興味や関心の高まりを資質や能力の向上に活かすような指導の改善を図るということ、感じ取ったことを基に自分の思いや考えを大切にしながら、自分なりの意味を発見するなどの鑑賞の学習を充実することが課題としてあげられていました。この課題は、活動はあるけれど本当に子どもの学びというのは何なのかということを美術の外の世界からも問われている課題であると私は思います。題材は先生側にあるのではなく子ども達側にあり、全ての子どもが表したいものを見付けられ、鑑賞の活動の時に自分なりに、自分の中で新しい価値が生み出せる。子どもの生き方とかかわった題材設定や授業づくりが子どものつくりだす喜びにつながっていきます。

子どもは学んでいる存在であるということ、教育というのは子どもの学びと学びをつなげていくことだと私は思います。「つながり」と「ひろがり」このことが今回の大会に参加した全ての人でつくりだされて広がっていけばいいなと切に思っています。ぜひ一人一人の子ども達を見つめていく、そして成長と学びというものを見つめていくそういった二日間になることを期待します。

(文責：石田智春)

指導講評



文部科学省初等中等教育局
教育課程課 教科調査官

岡田 京子先生

第66回 全国造形教育研究大会の開催、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

造形美術教育に関わる各機関が相互に連携をして研究大会を開催するということは、子どもや先生にとってはもちろんのこと、社会全体にとっても意味のあることです。

図画工作科は子どもの資質や能力に信頼をおく教科です。図画工作科の目標は、児童に本来備わっている資質や能力を伸ばし、児童が自らつくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、生活や社会と主体的にかかわる態度を育て、豊かな情操を養う観点に立っています。今大会では、公開授業や研究発表などを通して協議を深め、子どもの成長と造形教育の連携を考えて頂きたいと思います。

成長と連携という点において、子どもの成長を見据えながらそれぞれの校種の私たちがそれぞれの場所で、目の前の子どもたちに何ができるのかを考えることが大切です。これは、図画工作や美術だけの課題ではなく他教科等も同じであり、教育全体の課題であるともいえます。子どもの姿を捉えながら、教育における継続性やつながりの意識などをもち、子どもたちの成長を考えることが大事ではないでしょうか。

それは、自ずと一人一人の子供を見ていくことになります。目の前のこの子が生きているということ、そしてどんなことを感じ考えながら生きているかを、教師や、周りにいる大人が繊細に受けとめていくこと。それが、子供の豊かな成長に繋がっていきます。そこに造形的活動、美術の活動がどのように関わっていくことができるのかを考えていくことが大切なのです。

例えば、図画工作科の表現には、A表現（1）造形遊びと（2）絵や立体、工作に表す活動がありますが、2つあるのは2つの側面から資質や能力を育成し、子どもの成長を支えることが必要なので設定しているのです。表現と鑑賞についても同様です。

これからも、子供の姿をもとに子どもの成長や連携することを、みなさんで考えていただけたらと思います。

（文責：池田仁美）

パネルディスカッション

コーディネーター 永関 和雄 (全造連委員長・町田市立町田第三中学校校長)

パネリスト 三澤 一実 (武蔵野美術大学教授)

長尾 菊絵 (西東京市立ひばり丘中学校主任教諭)

中西 一洋 (東京都立両国高等学校主任教諭)

山野井 誠 (狛江市立第五小学校教諭)

会場／オリンピック記念青少年センター

永関

(“Sense of Japan” 映像視聴) Sense of Japan (日本の感性) を支えるのは造形美術教育である。本大会はテーマ「造形美術教育のダイナミズム --- 成長と連携 ---」のもと、幼、小、中、高等学校、特別支援学校、大学、美術館が一堂に会した記念すべき大会。それぞれの発表から他校種とのつながりを見通す視点を見出したい。各校種で活躍する若い先生方にお話しいただく。

山野井

(映像提示) 低学年での新聞紙を使った実践を紹介する。能動的に材料の良さや特徴を体全体で捉える子どもの姿が見られる。粘土での造形遊び、屋外で布を使った中学年での授業…高学年、プラスチック素材を使った造形遊びを子ども自身が写真記録に撮ったもの。子どもが全身を使って能動的、主体的に材料とかかわるような材料の量や場の設定を工夫した。子どもの身体性を大切にしながらこれからも授業を進めていきたい。

長尾

(映像提示) 「おもいをかたちに…中学生の発達段階における美術とのかかわり」をテーマに研究を進めてきた。作業行程の決まった課題は得意でも、自分で考え自分で決める課題は苦手な中学生に、どんな授業をしたらいいか悩んでいた。勤務校がピサ型読解力をテーマに研究発表をすることから、言葉をきっかけに子どもの「おもい」を引き出そうとした。

〈中学1年〉名前の漢字を使ったデザイン。「おもい」を大切に、表現の良さの味わい。

〈中学2年〉東日本大震災に関連させた実践「復興の狼煙」。復興への願いを絵に表した。

〈中学3年〉内省の高まりとともに自分の思いや願いをまわりの人に理解してもらいたい時期。10年後の自分に向けた写真作品「手紙～拝啓・10年後の君へ～」。

「おもい」のこもった作品が与える感動。

中学校での3年間は価値観の破壊と再構築という難しい時期。子どもたちの瑞々しい感性を大切にしていきたい。

中西

「社会へつなげる」美術を心がけながら、鑑賞と表現の一体化を目指してきた。

(映像提示) モンドリアンの鑑賞の後デ・スタイルで自分の作品を制作する実践。アニメ「エヴァンゲリオン」の風景描写を鑑賞した後、風景を描く木版画を制作。その後、再び風景や浮世絵の鑑賞につなげた。

校内にたくさんの生徒作品を展示した。このことで生徒の制作への意欲が高まったり、来校者に見てもらって学校のイメージアップができたり、校内で他の先生方に美術教育の大切さを理解してもらうのに有効である。美術の専門家を育てるのではなく、一人でも多くの美術ファンを増やすことが目的である。

三澤

小・中学校と同様な実践を美大生も行っている。美術は人とのことやこと、人、地域など様々に結びつける接着剤としての機能が大きい。作品を介して対話が始まる。

(映像提示) 「旅するムサビ」の実践紹介。小、中、高校でワークショップを開催した。他大学ともコラボレーションした。学生が作品を制作する様子を子どもたちに公開したり、黒板ジャック(子どもが登校する前に黒板に絵を描いておく)など、学校の校舎を利用した取り組みもおこなった。夏休み中の小学校を美術館にする、中学生がファシリテーターになって学生の作品を紹介する。海外では言葉の壁を超えて作品鑑賞した。中2のドローイングに中1の生徒が詩をつける等。作品を通して様々な人と人がつながることのできる実践の数々を「旅・ムサ」を通して積み重ねてきた。

永関

各校種の先生方にこれからも大切にしていきたいことをひとつ挙げて欲しい。

山野井

子どもの身体性、五感を大切にこれからも向き合っていきたい。

長尾

「おもしろい」を具体化させる力を育てる。そのために設定や投げかけ方を工夫するのが教師の役割。子どもたちが将来、美術で幸せになれるようになって欲しい。

中西

生徒の(学力など)実態に合わせた取り組み。美術ファンを増やしたい。

三澤

身体感覚を通した言葉にこそ力がある。身体感覚を大切にしたい造形美術教育のためにこれからも連携していきましょう。



記録：麻佐知子（都図研広報局）

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

幼稚園

幼稚園分科会

[提案者]

東京都文京区立千駄木幼稚園 園長

田村 秀子

キーワード

感じるままにのびのびと

—素材との出会いや感動体験を生かして—

[講師]

淑徳大学 准教授 榎 英子先生

造形教育家 小串 里子先生

◆研究を通して◆

今回の研究会は、幼稚園から大学までの他校種及び美術館が連携をとり同時開催をするという画期的な試みがなされた。1日目の全体会では、「子どもの主体的な活動を大切にし、子どもがどのような学びをしているのかをよく見る」というお話があったが、このことは幼児教育でも重要なことである。今回の発表にあたり、公開保育の会場となった千駄木幼稚園は講師の先生方に何度もご来園いただきご指導をいただいた。様々な方に教えていただく機会を得たことで幼児の表現の幅が広まり、教師の教材研究や創意工夫する力に磨きがかかったと感じている。本研究会が、幼児の表現活動について深めていくきっかけになることを願っている。

(文京区立千駄木幼稚園長 田村

秀子)

◆協議会から◆

全造連では、毎年、全国大会を開催する都道府県の幼稚園に「幼稚園部会」として日頃実践されている造形活動の発表をお願いしている。各地で発表される内容からは、地域の特色を生かした教材や活動の工夫、子どもの心が開かれ可能性が引き出されるような指導の工夫がなされていることがわかる。

幼稚園で造形のある生活を目指すと保育が豊かになると考える。今後も、全国大会において各都道府県の幼稚園の取り組みを発表する場を作っていきたい。

(淑徳大学准教授 榎 英子)

今回の研究会は、幼稚園から大学までの美術教育を知ることができる貴重な機会となった。本日の実践発表や協議会で話題となった話は、幼稚園だけのことではなく、美術界全体の課題と感じた。

本日の発表にあたり事前に幼稚園を訪れた時に、泥粘土とフィンガーペインティングの活動場面を見たが、この二つは造形活動の中で重要なものである。泥粘土で遊ぶと、その中で子ども自身の気持ちや問題点が投影される。できるだけ二人以上が関わり合えるように十分な広さや量を用意し、体全体を使ってダイナミックに泥粘土で遊ぶようにしていくとよい。フィンガーペインティングでは塗たくりも大事だが、何を描くかという教師の意図的な言葉掛けがあることで、子どもたちの表現が広がっていく。

幼稚園だけではなく美術全般において、題材をどのように開発するか、ということが一番重要である。本日の発表や公開保育では、教材を開発し、試行錯誤する姿勢が見られて大変素晴らしい。幼稚園で行われている「動作をしながら頭を使う」「動きながら考える」は美術教育の基本である。何でも美術の題材にできる、ということを念頭において、造形活動のさらなる創意工夫を期待する。



(造形教育家 小串 里子)

公開保育1《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都文京区立千駄木幼稚園

矢澤 弘美

・造形遊び ・感触 ・色

「絵の具に触れることを楽しんで」

▶ 幼稚園 3歳児 表現

① 成果と課題

本日は段ボールとビニールに描いていたが、素材によって異なる動きが引き出されていた。段ボールは向こうが見えないので、自分と向き合うことができる。ビニールは開放感がある。また、登り棒にビニールを張ったことで、囲まれた空間ができて落ち着けたこともよかった。普段使っているクレヨン・クレパスとの質感の違いや、変化の面白さも体験できた。

3歳児では、色を変えて描く際に、一度使った筆は洗わず取り替える、絵の具のカップも取り替えるなどの細かい配慮が大切である。



② 助言者からの講評

絵の具を使った活動は子どもたちの心を解放する。色は光の源だから、色があるということは【生きる】ことと結びつく。絵の具に勝る画材はなかなかない。本日の活動では、絵の具を重ねて塗っていく中で、子どもたちがスクラッチを始めた。これは、ビニールに描いたからこそこの発見である。「『何で』描くか」には、ねらいにおける『何で（なぜ）』と材料の『何で（何を使って）』の二つの意味がある。子どもたちに何を促すのか、物の可能性を探っていくことが大切である。

分科会1 幼稚園 千駄木幼稚園会場

公開保育2《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都文京区立千駄木幼稚園

鈴木 直子

・造形遊び ・感触

「体全体で泥粘土に触れて」

▶ 幼稚園 4歳児 表現

① 成果と課題

広いホールで皆で泥粘土遊びをすることを伝え、喜んで身支度をする子が多かった。幼児が扱いやすい硬さにしてブロックにしておいた粘土を一人一人が運び、ベニヤ板の上に並べることで粘土の感触や重さを感じ、活動への期待が高まっていった。どんな風に並べるか子どもと教師で考えを出し合いながら進め、粘土のできた道の上を歩くのは楽しそうであった。

その後、思い思いに粘土にかかわって遊び始めた。固まりに指で穴をあけようとする子、裸足で粘土を踏んで足形ができることを面白がっている子、しゃがんで小さい団子や雪だるまを作り始める子、大きな塊を集めて伸ばしたりひねり出したりして恐竜やヘビに見立てて作る子など、一人一人が様々な動きをしていた。友達と関わりながら一緒に作ろうとする子、自分の世界で粘土とじっくりかかわる子などいろいろな姿が見られ、教師は全体の様子を見ながら一人一人のイメージを受け止め、共感し、一緒に裸足で粘土に触れたり、「もっとほしい」と言う子に粘土を届けたりした。

最後は「ここにみんなの粘土を集めよう」と声をかけて粘土を集め、山にしてその山に順番に登り、ダイナミックな動きを楽しんだ。また片付けでは粘土の固まりをたたきつけて四角くするという動きをし、自分たちで手足を洗い、雑巾がけをし、活動を最後までやり遂げていた。子どもたちが泥粘土の遊びを楽しみ、活動の見通しを持って取り組んでいることがわかった。粘土と関わる中で、自然に友達との関わりが生まれていた。



② 助言者からの講評

一人一人が思いのままに動き、最後には数人で粘土を集めて大きな山にしたり、作った物を組み合わせたりして楽しめた。もっと場を広く作るとそれぞれのしていることが見えてよい。また粘土の量も、もっと多いとよかったと思われる。

泥粘土でも絵画表現でもそうだが、集団で活動することが大切である。一人では広がりにくいイメージが、集団で行うと互いに刺激を受け合って、膨らんでいく。材料に年代は関係なく、何を経験させたいか、教師の意図がはっきりしていることが何より大事である。

公開保育2《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都文京区立千駄木幼稚園

・造形遊び ・感触 ・自然とのかかわり

野崎 美幸・野木村温子

「秋の自然に触れて」

木下えり子・吉田 広恵

▶ 幼稚園 4・5歳児 表現

1 成果と課題

樹木が多い会場園で、紅葉が一番美しい時期の公開保育であった。幼児たちは、自然物を使って作ったものを壁面に効果的に構成したり身に付けるものを作って遊んだりしてきた。公開保育当日も、自然物を自由に使って作ったり遊んだりできる環境が構成され、食べ物に見立てる姿、顔を作る姿など様々な姿が見られた。

参加者からは「自然環境があっても教師がアイディアを出さないと自然物を使って幼児が自ら遊び始めない」「子どもが自分で発見するって何だろう」などの課題が出された。



2 助言者からの講評

年齢が低くなるほど、子どもは自然に近い。どのような物であっても、子どもが選んで持ってきた時点で素材になる。造形遊びに使えるものは、人工的なものであっても、子どもにとっては全てが自然物といえる。子どもがアクセスしたものはすべて空間にしたい。空間を作り出すためには、子どもが考える時間・スパンがあることが必要である。また、物を作る原点として、子どもと教師が共感できていることが重要である。そのことをこれからも大切にしてほしい。

分科会1 幼稚園 千駄木幼稚園会場

発表内容

「出会い→味わい→満足する」
共に感じ、味わうことをめざして

[提案] 東京都練馬区立光が丘さくら幼稚園 篠原 直子

[司会] 藤方 洋子

[記録] 箕輪 恵美

① 提案者から

本園では平成21年度・22年度に「豊かに感じ表現する子供をはぐくむ」という主題で、子どもたちが伸び伸びと描くための手立てを研究した。その中で幼児が様々な素材と「出会い」「味わい」「満足する」という循環が大切である、ということを学んだ。

様々な実践を通して、幼児は身近な素材や画材に出会うときそのもののもつ特性を楽しむこと、教師が共に面白がって素材や画材との出会いを十分に楽しませることで幼児の表現が豊かになっていくことがわかった。

幼児が豊かに感じ表現するために、①素材そのものが変化し多様な特性をもつものとの「出会い」をつくること ②素材に触れることを十分に「味わう」ことができるような工夫 ③友達や教師と共に「満足する」体験を積み重ねることができるような工夫 の三点を大切に、これからも豊かな体験が展開できる保育を目指していきたい。



発表内容

素材「砂」を共に感じる

[提案] 千葉県浦安市立美浜南幼稚園 當銀 玲子

[司会] 藤方 洋子

[記録] 箕輪 恵美

① 提案者から

幼児は園庭に出ると、しゃがんで地面の砂に触れたり、指で砂に絵を描いたりすることを自然に行っている。このような姿をよりたのしい活動にできるのではないかと考え、カラーのベニヤ板に木枠を付けた「カラー板」という教材を開発した。戸外遊びの際に園庭にカラー板を設定し、子どもたちが自由に使う様子を観察した。

3歳児では砂が乗ったカラー板を動かすことで偶然にできる形を見て喜ぶ、4歳児ではカラー板を斜めに立てかけて滑り落ちる音を聞くことや砂を滑らせることによってできる形を見て楽しむ、5歳児ではカラー板の上で砂をいろいろな形に形作り園庭の自然物で飾り付け美しく仕上げることを楽しむ、という様子が見られた。

カラー板という新たな教材は、砂を使った多様な表現を生み出した。今後、その表現と幼児の発達の特性との関連を明らかにし、表現を豊かにする援助を行っていきたい。



分科会1 幼稚園

千駄木幼稚園会場

発表内容

本物との出会いが
イメージを豊かにする

[提案] 東京都東京学芸大学附属幼稚園 大澤 ちづる

[司会] 藤方 洋子

[記録] 箕輪 恵美

① 提案者から

幼児がイメージを豊かにし、遊びの中で表現を工夫していくためには、幼児の興味を広げるきっかけとして本物と出会う機会をつくること、教師の願いを込めた環境を用意することが大切である。

4歳児の10月下旬頃、遊びの中で人魚姫になりきっていた子どもたちが紙皿や牛乳パックで靴を作り、履いて遊んでいた。素材が固く直線的な靴しかできない様子を見て、教師はもう少し扱いやすい素材として包装紙を用意する。子どもたちは試行錯誤しながらも、足に合わせて靴を作ることを楽しみ始めた。そのような中、幼児の興味を深める体験として靴職人による靴づくりの実演を計画した。1枚の皮から靴が出来る様子、靴づくりに使う道具を見ることは子どもたちにとって大きな刺激となり、その後遊びの中で靴づくりに熱中し、11月下旬の子ども会で「こびととくつや」を演じるきっかけになった。

本物と出会う、という感動体験を子どもたちのイメージを豊かにしていくためにも大切にしていきたい。



発表内容

「幼稚園部会 これまでの取り組みと
新しい実践の紹介」

淑徳大学准教授 槇 英子

① 全国造形教育連携幼稚園部会の取り組み

全造連の全国大会の開催に合わせて、各都道府県の幼稚園が「幼稚園部会」として実践を発表している。近年の取り組みをいくつか紹介する。

① 2010年 福島大会

福島では「ころがし絵」「ぬたくり」の実践が紹介された。園庭の遊具に大きな白い布をかけ、子どもたちも白装束。絵の具の入った水鉄砲を使ったダイナミックな活動が展開された。

② 2011年 北海道大会

幼小の連携をテーマに、色水の作り方を伝え合う実践が紹介された。チョークをネットで削り色水を作り、できあがった色水を透明の袋に入れて園庭の一角に吊り下げると、その輝きは虹色であった。

③ 2012年 沖縄大会

広い園庭で伸び伸びと絵の具を使った遊び、花をふんだんに使ったごちそう作り、魚釣りや砂遊びなど、園の環境や地域の特色が生かされた活動が紹介された。

② 大学と連携した取り組みの紹介

荒川区立南千住第二幼稚園では東京藝術大学と連携をし、「アートの日」を年に5回程実施している。「アートの日」は藝大の教員がプログラムを立案し、当日は大学院生も大勢参加する。美術を専門とする人の話を聞くこと、一緒に動き考えることは、園児にとっても教員にとっても大きな刺激となり、表現する力を確実に身に付けている。

This image shows a full page of blank, lined paper. It features approximately 28 horizontal black lines spaced evenly across the page, typical of standard notebook paper. The lines are thin and extend from the left edge to the right edge. There are no margins, text, or other markings on the page.

小 学 校

感じる 広がる つくりだす ～子どもの力と子どもの育ち～

研究局長

東京都江東区立枝川小学校

谷田 直勝

◆子どもの力の高まりと子どもの育ちの実感◆

本研究で私たちは、子どもの力と子どもの育ちの関係が、授業の中でどのような子どもの姿として表れているのかを改めて捉え直すことにより、図画工作科で育まれる力を明確にし、授業の充実を図ることで、育ちゆく子どもに内在する力を引き出し、一層伸ばしていくことができるのではないかと考え2年間の研究を進めてきました。

子どもの“みる”分科会では、「表現の中の“みる”について」の可能性を探り、整理したことで、子どもの活動がより広がるようなアプローチができました。そして、子どもは【何を“みる”】のか、【どのように“みる”】のかを考えることで、教師の言葉かけ内容とタイミングの吟味につなげることができました。また、美術館と連携したことで、図工専科教員だけでは及ばない視点や考えをもつことができました。

子どもが“かかわる”分科会では、「友達との交流」と「自分の考えと向き合う」という視点を対極に置くことで、「友達とのかかわり」を意図した授業づくりの価値について考えることができました。また、授業のねらいに沿った形で「かかわり」の意味について考えることができ、かかわりを通して一人一人の表現がさらに豊かなものになると感じることができました。

子どもが“であう”分科会では、日常の授業に使える「考え方」と「手立て」を構築できました。授業をデザインするには、何を明確にし、どこに視点をおき、どのように考えていけばよいのかが分かりました。これを受けて、授業構図や指導計画表の考え方を生かして日々の授業を見直し、デザインできるようにしていきたいと思います。

子どもは“おもう”分科会では、子どもが心を動かされるような出会いが重要であると考え、導入の工夫をしたことで、「思い」を抱きやすくなり、主体的に活動する姿が見られました。また、より自分らしい表現を意識したり価値や意味を見出したりしている子どもの姿を、明確に捉えることができました。

子どもの“うごく”分科会では、題材やモノやコトとの出会いから、子どもの内面に起きることや、外へ向けてひらかれていく心や身体のうごきに徹底して注目したことで、子どもが表現へと向かっていく有り様が見えてきました。

本研究を通して、授業内容や要素、授業構成や方法が整理され、子ども一人一人の中で発揮されている力をより明確に捉えることができました。また、子どもの姿をしっかりと受け止め、教師の立ち位置を考えながら授業実践や授業改善を繰り返す行うことができました。私たちは、これからも各分科会のテーマをさらに深く掘り下げ、日々の授業をよりよくするために、さらなる発問の仕方や教師の立ち位置など、より具体的に各区で授業研究を重ねていきたいと考えています。

子どもの“みる”分科会

[提案者]

東京都江東区立東雲小学校

近藤 麻里

キーワード

表現と鑑賞の関連した働き合い

鑑賞・美術館との連携

[講師]

前千葉大学教授

佐々木達行

小学校

◆研究を通して◆

子どもはもともと無意識の内に“みる”行為と表現することを同時におこなっている。そのことが今次の学習指導要領に明文化された。“みる”ことから、鑑賞と表現の可能性について研究を進め、子どものよりよい成長につなげられるよう表現の中の鑑賞や、観賞の可能性について、また美術館と連携した学びについて考えてきた。研究を進めていくうち、“みる”ことから【何を“みる”】のか、【どのように“みる”】のか、視点とも言える方向性が見えてきた。



【何を“みる”】	【どのように“みる”】
● 材料を“みる” ● 色、形、材質などを“みる” ● 表し方を“みる” ● テーマを“みる” ● 自分の表現の過程や表現そのものを“みる” ● 人の表現の過程や表現そのものを“みる” ● まわり、環境、場を“みる” ● 人を“みる” ● 全体を“みる” ● 部分を“みる” ● 変化を“みる”	● 最初の出会いで“みる” ● 人、もの、こととかわる中で“みる” ● 表現しながら“みる” ● 意図されたタイミングで“みる” ● 視点をもって“みる” ● イメージしながら“みる” ● じっくりと“みる” ● さらりと“みる” ● 客観的に“みる” ● 視覚だけでなく、触るなどして諸感覚を使いながら“みる”

これらは未整理の状態のため、研究を続けていく中で整理をしていく必要がある。

また、若手教員が増えゆく中、これまでの研究の成果をいかに全体で共有し、図工の研究をさらに発展させていくかという課題も見えてきた。

今後も研究を進めていく中で、これらのみえてきたことを整理したり実践して検証したりし、図工の時間にかえしていくようにする。

◆協議会から◆

質問の中で「“みる”にあたり、“何がどのように”という投げかけをしていたが、“みる”技術的なことや“みる”姿勢（寝転がる、立ち上がるなど）、手法などの身体的なスタディはしているのか。」とあった。これはとても大事なことだと考えていて、この度の研究で最も大事にしたことの1つである。“教える”のではなく、子どもたちが感性を磨きながら、自ら「こうしたい!」や「こんなことしたらこうなったよ!」など、能動的に活動に取り組めるよう授業をつくるかが大事だと考えている。そのためには教師側があらゆる可能性を考え、活動を通してのねらいや子どもたちに感じてほしいことなどを整理し、環境をつくることや声かけを吟味していくことが重要だと考える。

この研究を通し、環境をつくったり声かけを吟味したりする視点の1つとして、【何を“みる”】、【どのように“みる”】という鍵がみえてきた。

分科会2 子どもの“みる” 南砂小学校会場

公開授業No.3 《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都江東区立毛利小学校

自分の感覚や活動を通して色・形などをとらえる

片山 知子

「ならべて つなげて あ～いいかんじ」

▶ 小学校 2年生 A表現(1)

① 成果と課題

導入での材料の提示の仕方を工夫した結果、子どもたちはプラスチック段ボールを並べたり貼っつけたりする行為を楽しみ、自ら「こうしたい」という思いから、活動を広げていくことができた。窓からの光も十分にあり、透ける感を味わうことができていた。頭上に張った紐の高さや明るさなどの小さな違いによって子どもの活動は変化することから、場の設定の重要性を再確認した。造形遊びにおける「みる」についてどのように設定するかは今後さらに深めていきたい。



いいなと思う感じの板をつくろう



どんなことができるかやってみよう



さらに並べてつなげていこう



自分のみつけた「いいな」をつたえよう

② 助言者からの講評

授業の中で何を“みる”か、どのように“みる”か、場をどのように設定するかが重要である。そして教師がどのような言葉がけが必要か、言葉がけをするにあたり、“みる”視点をあげて声かけをすることが大切である。つまり子どもの表現や気づきについて何がいいのかを具体的に伝えて、子どもの表現を意味づけや価値づけていくことが必要である。その子に合わせた「いい感じ」をフィードバックしていくことで、アイデンティティを培うことに繋がっていく。

→校種、領域、創造的技能、材料、共通事項など

「線のぼうけん」

▶ 小学校 3年生 A表現(2)

① 成果と課題

“ぼうけん”というキーワードをきっかけに線で表現し、“みる”行為から多様な表現の広がり期待した。“みる”視点を必要に応じて示したことで感じたことを互いに活発に伝え合うことができた。そして線や色を豊かに表現していくことができた。

今後の課題としては“みる”視点の整理をし、表現活動や鑑賞の中で子どもが感性を磨きながら自分の“こうしたい”という感じを表せるよう、投げかける言葉の吟味を重ねていくようにする。



② 助言者からの講評

“ぼうけん”から線に置き換える時に、子どもはお話を考えたり、擬音や動きをもとにしたりして線を表現していった。3年生だと、そのようなきっかけがあるとイメージを膨らませやすい。今回の題材では、純粹造形性によって発想を広げることができた。物語を思い浮かべると、具象的なモノに繋がりやすい。その題材を通し、何をねらいとして題材を組み立て、子どもたちの学びとするか、そこを整理していく必要がある。授業という限定した環境の中の活動で、約束を決めることも1つの手法である。

公開授業№5 《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都江東区立第二亀戸小学校

小林ちあき

「いろどりみどり」

ゲストティーチャー：

内海聖史（画家）、池尻豪介（MOT 学芸員）

▶ 小学校 6年生 B鑑賞（1）

① 成果と課題

本授業は、色作りの活動中は「自分」を、全員でつくった緑をつなげた空間の中では「ともだち」を、そして最後に「画家」の作品の鑑賞をという、3つの“みる”場面を設定した。



子どもたちは、色をつくる面白さ、手強さなど、色を「量」として味わいながら、活動にのめりこんでいた。「色がたくさんある」ということは高学年になると知識として知ってはいるものの、自分なりの色づくりを経た後、たくさんの“緑”でうめつくされた空間をみたことで、実体験として感じる事ができた。そして、色への感覚を刺激してから画家の作品を見たことで、こどもたちは色に敏感に気付いて、より深く鑑賞することができた。



画家と共に活動をし、その価値観にふれたことで、子どもたちの作品づくりの意識も変わったようだった。自分たちの活動の延長線上に、「図工を職業にしている」内海さんという画家につながったことで、制作へ自信がついたのだと思う。



今回は、美術館を介して画家を紹介していただいた。その際、何を子どもたちに感じて欲しいのか、思いや考えを授業者・画家・学芸員で話し合い、共通理解をしながら授業をつくることができた。美術館の活用やゲストティーチャーを呼ぶ場合、共に授業を組み立てることが必要である。また、単発でなく学年を越えて継続していくべきだろう。さまざまな連携の方法を探っていくことが今後の課題である。

発表内容

“撮る”で“見る”をみがく

[提案] 宮城県仙台市立七北田小学校 山崎 睦子
宮城県仙台市立木町通小学校 熊谷 英之
[助言] せんだいメディアテーク 小川 直人
[司会] 江東区立南陽小学校 長塚 祐輔
[記録] 江東区立有明小学校 平原 麻恵
江東区立第三砂町小学校 荻原 有子

① 提案者から

せんだいメディアテークは市民全般を対象とした作品をもたない施設であり、専門技術や映像、メディアについての深い知識の提供を連携の中で行っている。

成果としては、「撮る」ことを通し、ものを様々な角度からみることができるようになったり、思いを伝える手段として写真や映像を扱えるようになったりしたことである。

連携授業実施にあたり、新たな教材の開発とカリキュラムの位置づけが必要となるため、新たなプログラムを開発するための検討や準備などに取り組んでいくことが今後の課題としてあげられる。

② 指導助言

学芸員は子どものプロではないことを自覚し、教師と協力しながら授業を組み立てていく。また、出前授業を体験できるのは限られた子どもたちだけなので、教師向けの研修プログラム等も併行し、多くの学校に広げる工夫もする。映像表現は機材や技術を必要とするものだが、その進歩や上手下手を競うのではなく、カメラを通じて対象に注目することや友達の表現に興味を持つことこそが肝である。



発表内容

美術館との連携を通して

[提案] 東京都台東区立蔵前小学校 堀江美由紀
[助言] 東京都現代美術館 郷 泰典
[司会] 江東区立南陽小学校 長塚 祐輔
[記録] 江東区立有明小学校 平原 麻恵
江東区立第三砂町小学校 荻原 有子

① 提案者から

授業の“みる”と、美術館の“みる”では、場所と空間は違うが、どこにあってそこには子どもの眼差しがある。授業と美術館での“みる”の違いと、関連について東京都現代美術館で実践を行った。

成果としては、鑑賞しながら作品に飛び込んでいき、作品を自分に取り込んでいく様子がみられた。目でみる鑑賞だけでなく、体で感じたことを心でみるということができていた。

そして、子どもたちは何を学んだのか、一歩踏み込んで活動の意味を開いていくことが大切である。活動が、子どもにとってどんな意味があったのかを教師側が価値づけることが必要である。

② 指導助言

今回の企画は美術館のルールをゆるやかに解放し、子どもたちが、子どもらしくふるまえるというものである。「オバケとパンツとお星さま」という子どもたちの好きな要素を3つ集めることで、子どもの目線に立った展示空間をつくり、美術館は楽しい空間として鑑賞の新たな可能性を探ることができた。



子どもが“かかわる”分科会

[提案者]

東京都江戸川区立第三松江小学校

中村 和哉

[講師]

聖心女子大学教授

水島 尚喜

キーワード

「自分」「ひと」「友達」「教師」
「場所」「もの」「こと」

◆研究を通して◆

本研究の考え方に基づいた時間や場の設定の工夫によって、研究授業では、自分と向き合う姿、友達と話し合いながら新しい発想やイメージが広がる姿がより多く見られた。

私たちが常に念頭に置いておくべきことは、「かかわること」自体が授業のねらいではないということである。あくまでも「かかわり」は、今回提案した「低・中・高ごとの育てたい力」、及び「6年間を経てその先に目指す子どもの姿」に向かっていくための手段に過ぎない。子どもたちのよりよい成長のために、今回私たちが培った「かかわりという視点から子どもをより深くみる目」を大切にして、今後さらに一人一人の授業力を磨くことができる研究活動を進めていく。



◆協議会から◆（下記以外にも多くの意見が出された。今後の検討材料としていく。）

【グループ協議】（本区の分科会提案後に、協議会参加者には12のグループに分かれていただき、意見交換を行った。）

- 低学年では平面から立体へ、中学年では「もの」と「もの」をかかわらせることに気を向けさせられていた。高学年では内向きの空間は心の解放につながっていた。
- 「自分」の定義とは。「自分」はどこにあるのか。自我と自己の違いを知りたい。
- 子どもの実態を分析した上でかかわりが必要だったのか知りたい。
- 子どもたちが「何を感じたか」「何に心が動いたか」を大切にしたテーマ設定がよかったのではないかな。
- 低学年の、ミラーペーパーの素材はこの学年に適していたのか。



→〔授業者〕光を生かした授業を考えたため、材料を色紙からミラーペーパーに変更した。

【講師講評】 「かかわり」の射程 ～経験の総体としての人間～

「かかわり」の要素と造形行為：要素分析よりも子どもたちのリアルを「かかわりの視点」で捉え返す。

根源的能動性	メディウムスペシフィック、 サイトスペシフィック、造形遊び	社会構成主義的学習観
子どもがものの世界にかかわっていかうとする力。描き方、つくり方を教えるのではなく子どもが自ら世界にかかわる。	今、その場で目の前の子どもたちがどのような活動をしているか。	自分自身の経験を再構成する。レτζョエミリアシステム。「子どもは、自分自身の経験・知識の積極的な構成者」経験を再構成し、意味生成の位相、新しい価値の創出。

- ・過去、現在、未来…メンタリティー（間主観性）の連続性
- ・低学年（2年生）は「ならべる」活動の位置付け。（弄びの時期から意味付けへ）
- ・中学年（4年生）は、小割という材料のもつ造形的な言語が4年生にとってどうか。
三脚状の形態の提案がなかったらどのように展開があったか。
- ・高学年（6年生）では、支持体の形状と造形性は密接に関連する。（洞窟壁画、宗教儀式との近似）



1 成果と課題

本授業では、様々なかかわりによって子どもたちの活動が変わっていった。かかわりについての成果を3つに分けて分析する。

●女子A児は、はじめは平面的に並べたスカイツリーをつくった。その後男子の立体的な作品を見て、材料を曲げ立体的な展望台をつくった。その後も、男の子に立体的な星をつくってもらい、頂点に配置した。そこから、星⇒夜⇒サンタというように発想が広がり、ねこサンタをつくった。友達のやっていることに反応して新たな考えを思い付き、自分の表現が広がっていることがわかる。



●男子B児は、女子の平面的で大きな作品をみて、「女子には負けない」と立体で表すことにこだわり、自分らしさを大切につくっていた。「人と同じものはつくりたくない」ということも、かかわりによって生まれた反動の意欲といえる。このような「自分は どうしたい、どうしたくない」という選択を繰り返し経験していくことで、自分らしい表現の確立につながるのではないだろうか。



●男子C児は、つくりたいものがあるのにもかかわらず、どうやっていい方法がわからなかった。しかし、友達のアドバイスや教え合いにより、自分の表したいことを実現していた。友達同士の学び合いが個の表現を充実させていたと考える。子どもたちは、友達と一緒に活動したことにより、多くの発見や感動を共有し、表現のさらなる広がりや充実感を味わうことができていた。



今回は2年生という発達段階もあり、ミラーペーパーのみでの活動であった。今後は「かかわりによる個の表現のつながり」をさらに分析しながら、集団で活動するよさを一層感じることができ、そこから個の表現がさらに充実していけるような授業を継続して行っていく。

2 助言者からの講評

「ならべる」という行為は、低学年の子どもたちの気持ちと寄り添っている。本授業では、子どもが自ら物語を生み出しながら最後まで生き生きと活動していた。ここに子どもならではのリアルな姿がある。生き生きとした活動が最後まで続いていた。子どもは「もの」を介して世界とかかわっていく。「ひらかれた個」になるためには、他者とのやりとりが大切である。本当の自己に出会うきっかけを、授業の中でつくっていききたい。

自分・友達・夢中・発展

「グッドウッドスペース」

▶ 小学校 4年生 A表現(1)

1 成果と課題

自分との対話、友達との交流、両方が絶えず行われていた。

●男子A児は、普段は意見をなかなか言えず、自分の考えを譲ってしまいがちのことであった。開始後すぐ、窓際付近の友達と三脚を立てる。ドラゴンをつくろう⇒羽をつけよう⇒崩れる⇒船にしよう⇒タワーを立てて家のような形、と友達と相談しながら次々に形を変えていった。自分が試したいことはその場で個々に試し、具体的にイメージを共有することで、自分から友達に活動のイメージを提案するなど、一緒につくりながらも互いに自分の思いを生かして活動することができた。



●男子B児は、終始友達とつなげず、バランスに気を付けて積むことに夢中であった。自分が納得いく形を追求していたが、友達に話しかけたり、教室全体を見回したりして、木の間に木を差し込んで倒れないようにすることを思い付いていた。一人で活動しながらも、間接的なかわりによって周りから刺激を受け発想を広げることができた。



●女子C児は、活動開始10分は誰とも会話せず、形やバランスを見ながら、置いたり直したり小割を積んだりすることに夢中になっていた。「一緒にやろうよ」と自然に友達に誘われ、数人でつなげる活動に移行し輪のように並べていく。活動が変化し、発展する中でも小割を積むことにこだわり、活動が続いている姿が見られた。自分の活動にこだわりながらも、友達とのかかわりによる自己選択・自己決定の場面を繰り返すことで自分の活動をより深めることができた。



自分で考え、自発的に友達から学べる授業設定が重要だということがわかった。また、より特徴がある場所で活動すれば、さらに活動の選択肢や可能性が広がると感じた。

2 助言者からの講評

小割という材のもつ造形的な言語が4年生にとってどうか。精緻なものをつくるのに向く材料。三脚がなかったらどんな活動になったか。三脚があることで現代美術のような造形物になるが、4年生にとってどうか。「材料や場所」子どもの空間性と大人の空間性。小割という材がもつ言語性、名を奪われた材の意味、マテリアル、三角構造の是非。これらに問い返しが必要だったのではないか、背伸びした表現になってはいなかったか。子どもを見つめることを通じて、検証していきたい。

自分・選択・実現

「こころのまゆ」

▶ 小学校 6年生 A表現 (2)

① 成果と課題

第一次は白ボール紙で向き合うことのできる「まゆ」の空間をつくり、その中を見つめ、自分がどんな色や感じに包まれたいか……心を探ることから始まった。使いたい色や粘度を変える材料を選び取り、空間を見つめながら絵の具を調合してつくり、表していく。一つ一つの手順が心を探る手だてとなるよう導入で言葉を投げかけたところ、子どもたちは空間を自分の心に溶け込ませるように没頭して活動を進めていった。空間の中で線が躍り出すように刷毛を動かす子、具体的な風景をイメージしたり材質感を際立たせたりする子など、さまざまな表し方を試みる姿を見取ることができた。



本時の導入の鑑賞では、製作途中の友達の「こころのまゆ」に入り込んで見て、触って材質感を確かめるなどして、表現の面白さを感じ取らせた。鑑賞が子どもたちの中で表現の幅を広がるきっかけとなったのか、その後の個の製作では、活動が停滞していた子も自分の中で見通しを立てて取り組み、また、「もう完成した」と言っていた子も、新しい色を塗り重ねさらに表現を深めようと試みる姿が多数見られた。

男子A児は、第一次から空間の中に入り込んで迫りくる画面を間近に感じ、一つの色を懇々と塗り占めていた。本時では、友達の作品の絵の具部分に触れる、材料を指で



混ぜ絵の具を擦り付けるなど、触感で確かめる場面が多く見られ、色がかすれるような筆触を残していた。名札のコメントには「すべての色が見えるようにした」、後の作文では「他の人の落ち着く形や色がわかったし、自分の好きな色を見つめることができた」と書いている。

他者の表現を認めた上で、自分自身についても確かな存在であると気付くことができる。この造形体験の繰り返しが自己を築き始める高学年の子どもの豊かな育ちに有効であると考えられる。そうした造形体験の一部を本大会で子どもたちは実感できたのではないだろうか。

高学年の子どもが自分自身と向き合うことができるよう、どのように材料や場の設定を展開していくべきか。日頃の授業づくりにおいても吟味しながら研究を重ねていくことが今後の課題である。



② 助言者からの講評

身体と空間という二つのかかわりの視点から授業を捉えることで、心とまゆ型の形状が結びついていった。高学年の内面的世界を表す活動として、自己に向き合うことができていた。また、絵の具や材料の質感の違いから、質的な表現となっていた。本授業を通して、個が存在するには他者が必要であることに気付くとともに、「自分が何者であるか？」という自分自身への問いかけへとつながっていきだろう。

発表内容

「好き」が輝き響き合う造形活動

[提案] 北海道札幌市立白楊小学校 菊地 惟史
 [助言] 福島県福島大学 天形 健
 [司会] 江戸川区立臨海小学校 上手 佐希
 [記録] 江戸川区立下小岩第二小学校 石田 有希

① 提案者から

札幌市造形教育連盟では、子どもの「好き」が輝き、響き合い、最終的に個に返ってつくりだす造形活動を大切にして研究を進めている。美術館との連携授業「ハローミュージアム」では、5年生が野外美術館で鑑賞した。アートビンゴなどを用いてグループで友達とかかわり合いながら鑑賞し、自分なりの見方が広がり深まった。この体験を、今後の造形活動にどう生かしていくかが課題である。



② 指導助言

美術館での鑑賞活動のねらいは何か。発達段階に合わせた鑑賞の実践を行いたい。アートビンゴには様々な鑑賞の視点があったが、どの視点をねらっていたのか。

＜菊地：様々な視点でいくつもの作品を鑑賞することを通して、一つの作品を鑑賞するときの視点を豊かにさせたかった。＞

「好き」は「美しい」と似ている。鑑賞活動後、子どもの「好き」を分析していくと、子どものかわりがより明確になるのではないかな。

発表内容

子どものひと・もの・ことへのアプローチと感受

[提案] 福島県福島大学附属小学校 森口 律
 [助言] 福島県福島大学 天形 健
 [司会] 江戸川区立臨海小学校 上手 佐希
 [記録] 江戸川区立下小岩第二小学校 石田 有希

① 提案者から

子どもは、ひと、もの、ことなどと様々にかかわることで対象を意味付け、自分の価値観を多様にしたり、再認識したりしている。1年生で、洗濯ばさみを並べたりつないだりする造形遊びを行った。友達とかかわりながら想像していることを共有し、次々とつくり変えつくり続ける様子が見られた。また、同学年で、紙箱で動物をつくる実践を行った。相談コーナーを設置することで、友達とかかわりながら自分の表現を高めていく姿が見られた。子どもにとってより魅力的なテーマや材料、試行錯誤でできる実践を大切にしたい。



② 指導助言

洗濯ばさみの実践を見ると、立体的な組み立て方ではないことがわかる。これは1年生の発達段階の表現である。子ども同士がかかわったときや、教師が子どもに声をかけたときに、子どもの表現がどのように変化するか、もっと分析する必要がある。



子どもが“であい”分科会

[提案者]

東京都葛飾区立白鳥小学校

朝重久美子

キーワード

試行錯誤のきっかけとしての“であい”
“であい”の視点で、授業をデザインする

[講師]

東京学芸大学非常勤講師

附属学校教諭 立川 泰史

◆研究を通して◆

2年前、大会に向けて研究を始めるに当たって、図工部のみんなで確認したことは、①授業研究は、授業者だけでなく、みんなで実践・検討・情報交換をして進めていくこと ②授業をつくるときは、ねらいを明確にして論理的にデザインすること ③「造形的活動を通した人間教育としての図工」の視点をもつこと、だった。葛飾図工部には、教師としての経験年数が6年未満の者が半数以上いる。「経験が少ないからわからない」ではなく「経験が少ない人にもわかる研究にしなければ意味がない」と、それぞれがそれぞれなりに参加し、力を尽し、協力して進めてこられたと思う。

授業をデザインするために、授業構造図や指導計画表をつくれたことは大きな財産となった。以前は、「作品をつくることを目標としているのではない。子どもの力を育てることを目標としている」と言いながら、実際の授業では、教師がイメージする作品に子どもの活動を近付けるような指導をしている、というようなこともあった。しかし、これらを活用することで、その矛盾に気付くことができるようになった。それと同時に、研究協議会においても、授業のねらいから逸れることなく、授業検討をすることができるようになってきた。日常の授業や各校の行事にプラスしての研究ということで、大変なこともたくさんあったが、今後に繋がる実り多い研究となった。

◆協議会から◆

○なぜ“であい”を「線」としてとらえるのか。

授業の中には、たくさん“であい”がある。子どもは、いらない“であい”は外し、必要な“であい”と“であい”を選びながら繋いでいく。たくさんある“であい”の中から、なぜその子がそれを選んだのかが重要であり、教師がしっかりと考えなければならないポイントである。

○育てたい子どもの力

自己効力感とは、自己の存在を確かめるだけでなく、まだ見ぬ可能性の世界に踏み出そうとする力である。新しい自分をイメージして、手近な目標を企てることで、子どもは「きっとできる」という自信（自己効力感）をもち、新しいドアを開ける力（近い見通しのある試行錯誤の力）を得られる。

○感じるであい … 子どもは、材料や場所の特徴と“であい”、五感を通して事象を実感している。また、感じるだけでなく、次にくる形や色をイメージし、それを元に試行錯誤をしていく。

○広がるであい … ひとつのものをいろいろな角度から見ていくことから広がっていく。

○つくりだすであい … 図工では、ものづくりではなく、意味づくりをしている。その過程で、子どもは自分の変化を自覚し、実感のある学びが展開される。その結果、さらに“であい”が増えていく。

「色」と“であう”

「ステキいろイロイロ」

▶ 小学校 1年生 A表現(1)

① 成果と課題

色水と多量な透明の材料の組み合わせにより、自分なりに思い付いた活動を広げることができた。

場の設定として、白いシートを教室全体に敷きつめ、机やイス、透明な材料をいたるところに置いた。普段とは異なる環境の中で、子どもたちは意欲的に色水と関わるすることができた。一方で活動をあまり広げられず、終盤水遊びに留まってしまう子どももいた。

造形遊びを通して、子どもの活動を豊かにしていくために、言葉かけや材料、場の設定など、さらに吟味していく必要がある。



② 助言者からの講評

「様々な色の水」を介して、子どもたちは互いに付かず離れずの距離を行き来していた。隣り合う関係・向き合う関係といった「身の間」で、互いの発見を引用したり組み換えたりしつつ、新たな「戦術」を立てている。色として、水としての魅力を楽しむために「大人の配慮」とも言うべき学習環境があり、子どもたちは自分の目で形や色の変化を味わっていたのが印象的であり味わいというトピックを分かち合う姿は、造形に留まらない社会的な感性の底力を今一度教えてくれたような気がする。

公開授業No.10《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都葛飾区立葛飾小学校

渡邊 梨恵

「材料の可能性」と“であう” 「ひらめき★ペーパー」

▶ 小学校 4年生 A表現(2)

1 成果と課題

本研究を通じて私達は子供の姿から多くのことを学んだ。成果は次の2点である。1、「表現方法の共有」 個人の活動に入る前に十分に材料に触れ、意図的に表現方法を共有する時間を設定することで、子供自らが材料の特徴やよさと出会うことができた。2、「過去の知識や経験を生かした材料選び」 そのことによって、豊かな表現力を引き出すことができた。今後の課題は、「実態や個に応じた活動の展開」である。子供の意欲や意識の変化を敏感に感じ取り、実態や個に応じた授業を、展開していきたいと考えている。

○材料とのであい

いつもの紙と違うね？

重なっているところは色がちがうね！



○新たな表現方法を 試し見付ける



○表現方法を共有

⇒表現方法によって
仲間分けした黒ボード



○材料の特徴や可能性とであい、

試行錯誤

自分の知識や経験と繋げる

つくりたいものをつくる「主題」



折った紙は
波に見えるよ！



○自分や友達作品のよさとであう



紙のシワシワ
が海のうねり
に見える。

この海には、大きな魚
が住んでいるんだ！！
ほらほらここに…

自分の活動を意味付け・自分のつくりたいものを価値付ける

2 助言者からの講評

子供はつくりたいもの、やりたいことをするために、試行錯誤を繰り返していた。また活動中、表現方法を仲間分けした黒ボードからヒントを得ることができ、材料の特徴やよさを知ること、多くの表現が作品に表れていた。さらに「主題」に迫るために、授業の終末で活動や作品について語り合う場を設定すると効果的である。つくり上げた作品について、語り合うことで今後の活動の幅を広げることができるだろう。

「友達との違い」と“であう”

「みずから 見つけた みずものガタリ」

▶ 小学校 5年生 A表現(1)

① 成果と課題

<成果>

①クラス全員で1つのことを考えて話す。それにより、思いが広がっている子供が他の子供の考えを引き上げて広げることができた。また、友達の考え方を聞くことで、どのように思いを広げたり考えたりすればよいのか見通しを立てることができ、活動への理解が深まった。

②まとめの語りの場においてクラス全体で活動を共有したので、自分の活動や話に友達が反応してくれて、考えが認められたと感じることができた。そして、それが自己効力感へとつながった。

③友達との違いを知ったことで、自分の考えや作品につなげることができた。

<課題>

語りの場を取り入れた題材は、表現と鑑賞の両方を横断しているので評価のあり方について、今後考えていく必要がある。

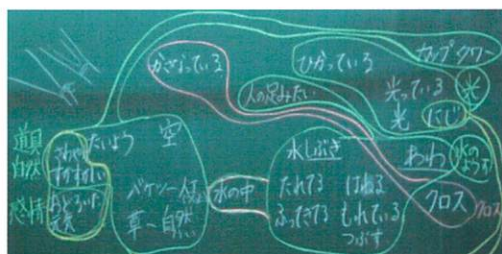


◀導入時にクラス全体で考える。

▼友達と関わりながら活動する。



▲互いの活動を見て、感じたことを言葉にする。



▲自分たちの言葉を自分たちでカテゴライズする

② 助言者からの講評

多様な「であい」を「線」で結んでいくという見方は、「トライ＆エラー」を楽しむ子どもの思考をトレースしたものには他ならない。「感覚—認識—操作」という、誰もが当たり前のように繰り返す営みに、造形する「身体と言葉」があるからだ。子どもたちは、互いの感じ方の違いやよさに宿る意味を「声」にして交え、その言葉を可視化した板書を自らカテゴライズする試みがあった。それは、談話を通して「ものづくり」に始まった語りが互いの「意味づくり」へ進化する、まさしく自他の感性が「であう」場面だったように思う。

発表内容

「トントンから生まれた形」 ～“であい”をつなげる～

[提案] 山梨県甲府市立貢川小学校 臼井 恭子
 [助言] 山梨県富士川町立増穂西小学校 遠藤 久
 [司会] 東京都葛飾区立東金町小学校 丹羽貴美恵
 [記録] 東京都葛飾区立半田小学校 本郷麻菜美

① 提案者から

3年生のくぎ打ちの授業では、新しい材料・道具（くぎ・金づち）とのであいから、つくりたいもののイメージを広げ、いろいろ試しながら自分らしい表現を探り、作品をつくることができた。地域のアートフェスタに展示したことにより、子どもたちは友だちの作品のよさと新たな自分の可能性に気づき、次の表現への意欲が湧き上がってきた。

② 指導助言

山梨県で開発した4観点のカードを活用した指導は、子どもたちにとって「今日がんばること」が明確になり、教師にとっても指導のポイントがはっきりし、一人ひとりの豊かな表現に結びつく指導の充実化が図れる。3年生の子どもたちは、つくりながら段々と作品を完成させるものなので、多分に「造形遊びの要素」を取り入れ、友だちの発想を手がかりに試行錯誤させていきたい。



発表内容

「私たちの町南当仁～版にあらわす～」 ～友人の表現・考えと“であう”～

[提案] 福岡県福岡市立福重小学校 徳永 直大
 [助言] 福岡県福岡市立石丸小学校 今林 功一
 [司会] 東京都葛飾区立東金町小学校 丹羽貴美恵
 [記録] 東京都葛飾区立柴又小学校 中山美由紀

① 提案者から

6年生の版画の題材として、地域の風景をドライポイントで表現し、作品を鑑賞する実践である。ドライポイントという新しい表現方法とのであいから、子どもたち同士でアドバイスをし合って表現し、できた作品を作者と交流しながら鑑賞することで、友だちの考えともであうことができた。鑑賞カードを用いることで、鑑賞の進め方も学習できた。子どもたちが進んで鑑賞したくなる、魅力ある題材や鑑賞活動の工夫が今後の課題である。

② 指導助言

歴史のある建物や近代的な建物などの地域の魅力に触れ、見たものから子どもたちが表したことをみつけ、題材に用いることは大切である。鑑賞活動については、鑑賞カードを活用し、見方の視点をしっかりもつことができた。ただし、もっと柔軟な鑑賞学習ができるよう、さらなる指導・助言や授業展開の工夫が必要である。



子どもは“おもう”分科会

[提案者]

東京都荒川区立尾久西小学校

山崎 雅愛

[講師]

元上越教育大学大学院教授

西野 範夫

キーワード

自分の思いを表すための想像力
“おもう”の広がりや変容

◆研究を通して◆

今大会の2本の公開授業では、低学年でサテン生地を、高学年ではアルミ線を主の材料にして授業を行った。低学年では「想像したことを素直に表現すること」、高学年では「今までの経験を生かして表現すること」を目指した。それぞれ子どもの発達段階やよさを生かせるような題材を考え、それを実現できるように、様々な材料とその出会わせ方の工夫を繰り返してきた。その中で、どのような「思い」をもつことができるのか、また、どのように「思い」を広げたいと感じさせることができるのか。一つ一つの授業の中で、子どもの“おもう”を拾い上げ、検証することを繰り返した。

その成果として、導入時の工夫により「思い」を抱きやすくし、主体的に活動する児童の姿が見られた。また、自分らしい表現を意識したり、価値や意味を見出したりしていた。しかし、研究を重ねる中で、行為やつぶやきなどから、どのような「思い」をもってふくらませようとしているのかを正確に見取る事が難しいことも挙げられた。子どもの「思い」に寄り添い、子どもの世界を教師がいかに共有し、受け止めるのが今後の課題と考える。

公開授業 No.12 2年生
「わたしのイロイロいす」



公開授業 No.13 5年生
「アルミンワールド」



◆協議会から◆

協議会では、各授業の抽出児童の見取りを発表した。子どものつぶやきや行動をつぶさに見取り、子どもの「思い」をくみ取ろうとした。材料や空間、友達とのかかわり、教師の声かけなど、何が子どもの表現のきっかけとなるのか。見取る側の教師のあり方を講師の先生に教えて頂いた。

『この研究を通して、教師は悩みながらも少しずつ子どもに近づくことができた。子ども達の「思い」に寄り添いながら、子ども達の姿を注意深く見ることができたことが成果であろう。「となりのトトロ」ややなせたかしさんの話から、子どもの頃の純真な気持ちを思い起こし、そこに立ち帰れば子どもが今、何を感じているのかがわかる。子どもと教師の間に生まれる関係が大事である。』とご指導頂いた。

◇「となりのトトロ」と子どもの世界

子どものころの経験から、子どもとの距離や子どもの世界への通路をつなげている。子どもは夢と現実を一緒にした世界で生きている。そのファンタジーの世界へ教師が近づくことが大切である。

◇やなせたかしと子ども

やなせさんは子ども達を、同じ〈いのち〉を生きるものとして敬愛をもって接していた。想像の世界を決して失うことなく、想像の世界と現実の世界をまるごと生きたやなせさんは〈人間・子ども〉。大人から子どもに帰ることができた人。子どもと心を通じ合わせる事ができていた。

公開授業No.12《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都荒川区立第二日暮里小学校

桑島 有子

素材・手・感じて“おもう”“ひろがる” 「わたしの イロイロいす」

▶ 小学校 2年生 A表現(2)

1 成果と課題

子どもたちは色とりどりで様々な形のサテン生地を手にとり、色や質感を味わいながら発想を広げていた。自分のいすを「とっておき」のいすにしていき、それぞれのいすの物語が生まれた。

お話を考えるのが好きなA児は、描くように色を組み合わせ布をいすに置いていった。活動途中に紹介する場面では、「“まどのいす”です。近くに窓があって景色が見えます。」と発表した。その後、お客さんをつくり、気持ちよく座れるように工夫していた。見立てを楽しみながらつくっていた。鑑賞では、友だちといすを並べて、できあがった世界を喜び、お互いの面白さやよさをじっくりと味わっていた。



布を何度も置き換え、どんな形がいいか考えていたB児。後半に登場した小さな布でリボンや花をつけ始め、具体的な形から思いが触発されていた。

「かわいく、おしゃれないすにしたい」と色の組み合わせを工夫していた。



お花や星をつけてみよう

○成果

子どもの活動時間を十分確保し、いろいろ試し表現できる場にしたことである。また導入場面や材料の大きさ、色、形を検討し、子どもたちの実態に合うよう工夫することができた。

○課題

子どもの「思い」をふくらませ、それを実現するための実態に合った材料、題材設定の大切さを学んだ。

また、教師の声のかけ方やタイミングが重要であることを改めて実感した。今後も子どもに寄り添い、共感しながら、子どもとともに図工の時間をつくっていききたい。



2 講評

手はその子自身を表している。中でもC児の手が気になった。これからこの子はこの手をどう動かすのか。〈C児が手を動かし、活動していく様子を写真で紹介〉C児が授業の中を生き続けた。当たり前の事だが、とてもすごいことである。夢と現実を一緒にした中で生きているこどもたちが、表現したものが今日の“いす”である。今日の授業の中で、子どもたちは現実を夢の世界に変えてくれた。思い=子どもたち存在そのものを大事にしていくこと。大人は自分の都合で見てしまっていないか振り返ることが必要である。

難しいテーマだったが、悩んで悩んで、子どもに近づけた事が成果ではないか。

「アルミンワールド」

▶ 小学校 5年生 A表現(2)

① 成果と課題

◆子ども達の「おもう」

アルミ缶のかけらから生まれた宇宙を旅する生き物「アルミン」。「アルミン」が見つけたお気に入りの世界をつくろう！と始まった授業研究では子ども達のつぶやきや行為から、どう思いをもちふくらませているのか、見取りをおこなった。



アルミンが3人で遊んだりできる場所にしたい！

様々な形の「アルミン」を3体作ったA児。針金を流木に巻いたり穴に通したりしながらダイナミックにアルミンの遊ぶ「ワールド」をつくった。最後にはアルミンをいろいろな方向から乗せたり、逆立ちさせたりして、にこにこの笑顔で「できた！」と完成させた。

とても丁寧に細かくアルミンをつくったB児。木片に針金を通してアルミンの「乗り物」のような作品をつくった。最後にペンでアルミンと同じ色を塗ったり、模様を描いたりしていた。終始集中して、自分が目指す形にむかって取り組んでいた。アルミンを乗せながら、一番乗り心地のよい形を探していた。



ここにアルミンが乗るかな？アルミンの好きな色をぬってみよう。

◆授業を終えて見えてきたもの

今回の成果は二つある。一つ目はアルミンやアルミプロフィールカードをつくるなど手立てを工夫することで、思いをふくらませることができた。二つ目は針金と補助材料の教材研究ができた。針金は物を繋げる印象が強く、針金が空間造形の主役になるためには、どんな補助材料が適するのか。材料の活用性と共に提示するタイミングなども吟味した。

今後の課題は、子ども達の「おもう」を教師がどう見取っていくかである。「名札」や「カード」など文章にして書かせることで一人一人の「おもい」を知ることができるが、文章に書けない子や言葉に表せられない子などにはどのような手立てがあるのかを考えておく必要がある。



友達がつくった「アルミンワールド」をみる子ども達

② 講評

「おもう」という難しい分科会テーマについて悩みながら研究授業を重ねてきたことが成果である。子ども達は＜想像の世界＝現実＞を生きている。大人の都合で思い込んで見ていないか振り返ることが必要である。教師も子どもと同じ目線で楽しみ、話ができる開かれた感性をもって授業に臨んで欲しい。子供たちと先生との間に生まれる関係が大事である。

発表内容

実践発表

「みかたを変えて!? おもしろさ発見!!」

[提案] 神奈川県川崎市立南生田小学校 伊藤 龍豪
[助言] 神奈川県川崎市立玉川中学校 川合 克彦
[司会] 東京都荒川区立第二瑞光小学校 粕谷 泰寛
[記録] 東京都荒川区立赤土小学校 後藤真理子

① 提案者から

実践5年「みかたを変えて!? おもしろさ発見!!」を紹介。個人で写真を取り、その後作品を持ち寄ってグループで共有、ストーリーをつくりながら鑑賞する題材である。その中で子どもが身の周りの場所やものを見つめ直し、自分なりに意味や価値を見出すことや、自分と友達との見方や思いの違いに気づき、共有、共感していくことをねらいとしている。授業では、自分の思いを大事にしながら友達とかかわっていく姿が見られた。

② 指導助言

視点を変えるということは角度を変えたり、接写したりするなどの方法論だけである。しかし、この題材では、見方、感じ方を共有し合うことへとつなげている。見立てる活動からその先の子ども達の成長が感じられる。

子どもは常に意味のある行動をしている。友達との価値観を共有、発展していくが、したたかさも見せる存在である。全てを受け入れながら思いを共有することに意味があると感じさせる題材であった。



発表内容

兵庫県神戸市の研究・実践発表

「自分のおもいをもってどんどん描き続けることも」

[提案] 兵庫県神戸市立若草小学校 藤井 有子
[助言] 兵庫県神戸市立北山小学校 鍛田 和見
[司会] 東京都荒川区立第二瑞光小学校 粕谷 泰寛
[記録] 東京都荒川区立赤土小学校 後藤真理子

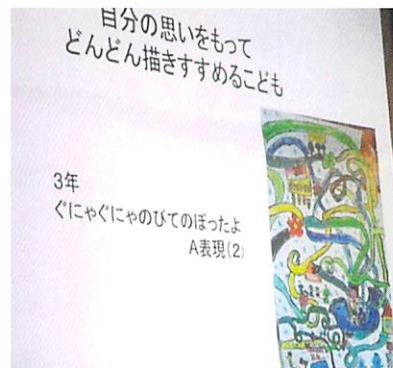
① 提案者から

神戸市研究テーマに沿った実践紹介。3年「ぐにゃぐにゃのびてのぼったよ」は、ジャックと豆の木のお話を聞き、自分が見つけた草花に魔法がかかったのびたらどんなふしぎなことが…と導入した想像画である。特に授業の中での“色や形、イメージにつながることばかけ”“指導と評価の一体化”について検証、研究をすすめている。形や色に自ら豊かにかかわりながら、自分のおもいをつくりだそうとする子どもの姿をめざして、教師の造形的なかかわりを考えながら、授業をつくるのが大切である。

② 指導助言

授業や事例を通して、子ども達の豊かな感性を引き出す、深めることがとても大事なのだと感じた。一人一人に学びを保証するために、教師は“つなぐ”仕事をしている。(造形素材と子供、子供達同士、自分自身と自分・・・など)

子どもの思いと素材や友達をつなげ、意味や価値を見だし、また子ども自身へと返すような学びの保証をしていくことが大事である。



子どもの“うごく”分科会

キーワード

子ども 身体性 みる

[提案者]

東京都墨田区立第一寺島小学校

東郷 拓巳

[講師]

帝京大学講師

辻 政博

◆研究を通して◆

図工の時間に、いつも発言や体の動きが止まないような子どもが、ふと集中して無心に素材を触ったり、たたいたり、かき混ぜたりしている。表面上は、ただ、遊んでいる様子に見えなくもないが、実は、子どもの内は、「こうしてみよう!」「いい感じ!」「あれ?こんな風に見える!」「あの子、あんなふうになっている!自分はこうしてみよう!」「できた!みてみて!」「あっ!やっぱり…」と、いつも見せている様子と変わらず動き続け、諸感覚を通してそのものを味わっている。普段から、どの子どもも、その内の動きを活発にしながら図工の時間では様々な力を働かせているはずだ。表現や活動から、その様子を捉えられることができる。このようなそれぞれのよさを捉えるに至るには、本分科会の研究の過程は、とても貴重なものであった。



子どもの“うごく”分科会では、実際の子どもの様子を授業中リアルタイムに教師が記録したことと、後に授業情景の動画を見ながら振り返って教師同士が交わした子どもの様子から、“もの”や環境、発問などが、子どもにどう影響していたかを、より密接に捉えていくことができた。このことは、普段から授業で使うような“もの”の研究と、その“もの”をどう手渡すかということ、さらにはその“もの”を使う活動に当たって、どのような言葉がけや支援をしたらよいかということ、より子どもと関連付けることにつながった。

この研究が、子どもそれぞれのよさを改めて浮き彫りにし、よさが発揮できる授業を組み立てることが重要であると明らかにした。よさや面白さは必ずそれぞれの子どもの中に存在している。本研究の最大の成果は、もともと持っている、子ども自身が発揮する力を、教師が捉え直し、実際に生かしていく有り様を浮き彫りにできたことだといえる。本研究は必ず教師の子どもの見る目を変える。そして、日常の授業のあり方を変え、子どもを後押しし、その力と育ちをより保証するのではないかと考える。

◆協議会から◆

提案と授業者自評を受けての質疑応答の時間では、その子どものよさや発見などを見つけていくような発言が出ていた。子どもが発揮する力やよさを受け止めることにはじまり、授業のあり方を考え、見直すことができる協議会となった。講師の辻政博先生から、本大会で見せた授業の授業構成や、材料の手渡し方は、子どもの可能性を十分に開くものであったが、大会の単発の授業であるが故、系統性が見えにくいという欠点を御指摘いただいた。つまり、これから普段の授業でこの研究をどう活かしていくかが、どれほど重要であるかを再認識させるものであった。

“土粘土”～さわって感じて、見て感じて～ 「さわって かわって…」

▶ 小学校 1年生 A表現(1)

1 成果と課題

子どもたちは元気いっぱい、やる気満々で体育館にやってきた。土粘土との出会いから、身体全体をつかった試み、友達とのかかわりなど、子どもたちの「やりたい!」という想いが溢れた90分だった。土粘土の柔らかさは丁度良く、自分なりのアプローチを繰り返すことで、たくさんの発見や心が弾むような驚き、喜びを見出していた。みんなですきなことを見てもみようという時間では課題が残る。授業のねらいと子どものうごきをもとに、もっとより良くしていけると感じた

『土粘土との出会い』



『足で踏んづけた感触や、残った跡、形の面白さを楽しんでいた。』

『身体全体で土粘土とかわる姿。』



『友達と協力する姿。』

『友達のやっている面白さを共有する。』



2 助言者からの講評

これまで行ってきた事前授業の子どもたちの姿から、課題を見つけて、一つ一つを改善してきた成果が今日の授業に表れていた。土粘土の具合は完璧。素材との出会わせ方も工夫がなされていた。

一時期、教師が面白い題材を考えることが大事という風潮もあった。そうではなく、素朴な子どもの表現の場所を提供してあげればいい。子どもが表現の主人公で、子どもが素材とどう向き合うかが一番大事なところ。そんな原点をふり返るような授業だった。

分科会6 子どもの“うごく” 南砂小学校会場

公開授業No. 15 《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都墨田区立隅田小学校

内田 康予

→ “光” ～ さわる、みる、感じる、形と色 ～

「♥フルルン カラフルルン♪」

▶ 小学校 3年生 A表現(1)

1 成果と課題

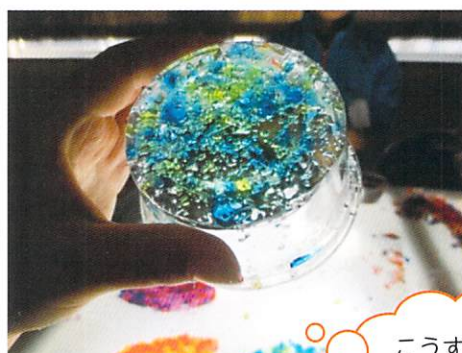
目では確認できない水に放たれたフルルン（吸水ポリマー）を掴むことから本授業は始まった。子どもたちも期待感をもち、驚きと感動をもっただろう。その触感とライトテーブルの光に透過された視覚的な美しさに心を突き動かされ、素材とじっくり向き合い、やってみたいことをいろいろ試していた。自分たちで撮った写真を見ながら変化していくフルルンの様子を友達同士で見合い、自分や友達の活動や表現のよさや面白さを見つけていた。今後は、どの題材でも活動中に自然と鑑賞につながるような授業展開を工夫していきたい。



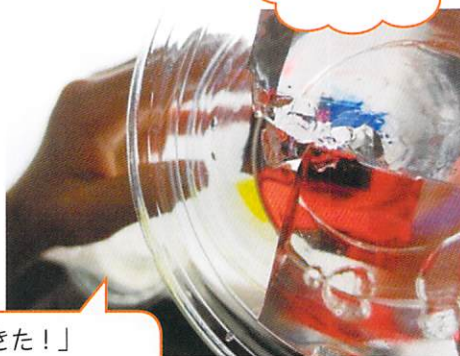
「いいこと考えた！」
「今度はこの色で作ってみよう！」



子どもは色の組み合わせや、きれいだと感じるところを考えながらつくっている。



こうすると
どう見えるの
かな・・・



「できた！」
「わあ！
きれいだなあ…」

2 助言者からの講評

助言者である辻先生からは、導入時の素材の手渡し方の工夫が大変素晴らしかったとご講評をいただいた。子どもがフルルンという素材にじっくりと向き合う時間が良かった。子どもは素材そのものの特性を身体で捉え、意味づけていく。そして素材は表現の材料となっていくのである。本時は、子どもが素材とじっくり関わる時間がもてた。子どもの素朴な表現の場所を提供することが教師の役目。子どもが表現の主人公となるような授業を組み立てていくことが大切である。

発表内容

心の中の美術館

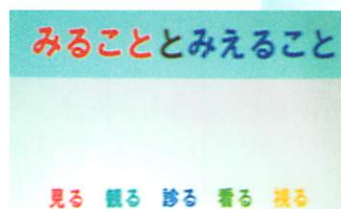
〔提案〕長野県茅野市立湖東小学校 下平 怜那
 〔助言〕長野県東御市立田中小学校 吉池 光則
 〔司会〕東京都墨田区立業平小学校 南 育子
 〔記録〕東京都墨田区立中和小学校 田中 武史

① 提案者から

子どもたちは、美術館の作品から感じた感情や雰囲気を感じ、自分の表したい感じにあう描画材や表現方法を工夫し、表したい感じに近づけるよう、試行錯誤しながら描いていった。友だちや教師とかかわることで自信を持ち、更に表現を広げていった。美術館とかかわり、作品の見方・感じ方を広げ、それを自分の表現へとつなげていった。その後、表現に迷いがある子どもへの支援や、美術館・地域芸術家とかかわりを更に深めるために、校内での公開授業や研修を重ねている。

② 指導助言

芸術作品にふれ自分の創作物を作る過程で、作品からの感じ、造形の要素を使って、子どもが今まで習ったモダンテクニックやいろんな事を試し、考え、表し、話していく学習に価値があった。さらに、美術館に作り出した絵を飾ることで、親が美術館に行ったことは新しい始まりである。美術館との連携には課題も多く存在する。チャイムのある学校と、束縛されない美術館を繋ぐ難しさがある。



発表内容

そめて、そめて、そめ色ワールド

〔提案〕愛媛県松山市立道後小学校 野村 晃靖
 〔助言〕愛媛県西条市立三芳小学校 上迫 博幸
 〔司会〕東京都墨田区立業平小学校 南 育子
 〔記録〕東京都墨田区立中和小学校 田中 武史

① 提案者から

多くのことを試しながら、染めたそめ色紙を使い、わくわく広場をカラフルに変身させるイメージを発表し、作りたい飾りを計画し、友達と見合い、かかわりあい、飾る活動をくり返すことで、色や模様の世界にどっぷりつかり、楽しく作ることができた。子どもたちに授業の中でどんなかわりあいを持たせるかを計画し、活動の環境作りや、活動のねらい、見取りの視点、支援の方法を検討し、子どもの思いに対応できる力を身につけることが必要であると造形遊びでは感じている。

② 指導助言

題材にわくわく感があり、楽しく、発見があり、資質や能力が育つものであった。心や体を動かし、無から有を生み出す活動を大切にしたい。発達段階に合わせて、自分の思いを語らせ、そのよさを価値付けてやるのが大事である。図工の面白さ、つくりだす喜びを味わわせ、自分の思いや感じ方に自信をもって表現し、生き抜いていく子どもを育てていきたい。



都図研研究局分科会

〔提案者〕

東京都あきる野市立東秋留小学校

雨宮 玄

〔講師〕

アーティスト

山本 高之

キーワード

子どもの遊び

◆研究を通して◆

―遊びという視点をもつということ―

今年度、都図研研究局では研究テーマを「子どもの遊びが生きる図工」とし、研究を進めてきた。

授業の中で「ここに遊びはあるのか？」という視点で子どもを見ていくと、今まで気にならなくて、見過ごしてしまいそうな動きも気になりだし、行為の裏側にある子どもを動かしているものを、じっと見てみたくなった。そして、その視点は、普段の授業で常に起こっている子どもの行為（それは決して授業のねらいに沿ったものだとは限らない！）の意味を、私たち教師が問い直し、次の題材をつくりだしていくことへとつながった。

―大会の二つの授業から―

都図研研究局では今年度、二つの研究授業を展開した。一つは1年生で行った「いったりきたりの1年生」（授業者：狛江市立和泉小、河原賢一）もう一つは3年生で行った「のぞいてみたら」（授業者：板橋区立板橋第六小、杉山聡）である。



「いったりきたりの1年生」は、卵パックがもつ形と透明な素材の魅力、とろとろ絵の具の色彩と心地よさから、子どもたちが自分がやりたいことを見つけていく活動である。

「のぞいてみたら」は、「穴」をくぐって教室に入り、見慣れた場の変容を肌で感じながら、場への出会いから子どもが自分の描きたい世界を深めていく活動である。

子どもにとって、色で遊んだり、絵を描いたりすることはごく自然で素朴な行為である。もしかしたら、ほっといても子どもたちは色で遊び、絵を描くかもしれない。なぜならそれは、子どもの遊びそのものだからだ。今回の二つの授業では、「ここに子どもの遊びは生きているのか？」と教師が自問自答し、場や材料、道具、言葉を設定することで、造形活動への入り方をより自然に、そして、その後の行為の必然性を高めていくことで、子どもの主体的な活動を引き出していた。

◆協議会から◆

協議会ではアーティストの山本高之さんから、「遊びを図工の中で生かすということは重要な視点であり、学校の中に図工という教科は絶対に必要である。」という心強い言葉をいただいた。また「そのことを言い続けて、証明できるように、これからも研究し続けてほしい」という励ましの言葉もいただいた。

公開授業No. 16 《連携・つながりのポイント》

「遊び」「イノセント」「ピュア」
「いったりきたりの1年生」

▶ 小学校 1年生 A表現(1)

[授業者]

東京都狛江市立和泉小学校

河原 賢一

小学校

① 成果と課題

指導者がものの意味を手渡すのではなく、意味とは子どもが自らの経験から徐々に紡いでいくものである。今回の授業では絵の具の様々な経験することにより子どもたちの中で記憶の編集が行われ、絵の具に対する感覚的な文脈がつけられた。その文脈が子どもの楽しむレンジを広げ、次の行為の探求心に繋るのでは。

普段の授業の中でも、指導者が子どもの行為に純粹に寄り添い、子どもを実感し、行為の意味をひもといていく必要性を感じる。



② 助言者からの講評

子どもたちの主体的な姿を尊重した授業であった。自分で作った絵の具で、絵をかく子どもの姿がとても素敵であった。教師が子どもたちに活動を委ねていた事実が印象的であった。

子どもの動きはある程度予想される動きであった。導入の提示、場の設定、声かけなどを変えると、もっと子どもが身体的に絵の具と身体的に関われたのではないだろうか。



公開授業No.17 《連携・つながりのポイント》

[授業者]

東京都板橋区立板橋第六小学校

杉山 聡

活動の中で、子どもがイメージを広げ、表現したいことを試し、
考えたり選択したりしながら、自ら選び表現していく関係性

「のぞいてみたら」

▶ 小学校 3年生 A表現(2)

1 成果と課題

活動をシンプルにし、身近な場や材料をいつもとは少し違うように手渡せたことにより、描くという行為に無理なくいざなえたと考える。また絵を描く中で子どもたち一人一人が自分の時間を感じ、素朴な行為の中から学びを獲得する姿も随所で見られたのではないだろうか。しかし、子どもの思いを表現につなげていく言葉かけや子どもの日常に寄り添ったテーマの渡し方など課題も多々残った。子どもたちの中から生まれている僅かな事象を指導者がしっかりと受け止め、子どもたちと寄り添いながら今後も授業を考え実践していきたい。



小さな入口を通して
教室へ入ります。



2 助言者からの講評

入口をくぐって絵を描くという行為は楽しいが、せっかく盛り上がった導入の後に冷静にもどる時間があった。子どもたちにかかった魔法は入口をくぐった後までは持続しないものだ。「自分が行ってみたい場所を描こう」という投げかけでも良いが、「この部屋の外にいる人に行ってみたい場所を絵で伝えよう」のような提案をして目的を持たせても良いのではないかと感じた。



発表内容

実践発表《連携・つながりのポイント》

材料の特徴を感じるイメージを膨らませる・学びあい

〔提案〕 沖縄県浦添市立内間小学校	佐渡山園美
〔助言〕 沖縄県うるま市立高江州小学校	大城 悦子
〔司会〕 台東区立金竜小学校	中島 綾子
〔記録〕 世田谷区立花見堂小学校	黒澤 償

① 提案者から

材料や道具の特徴を感じ、イメージを膨らますことのできる子、友達の作品のよさに気づける子を目指し、材料の特徴を生かした絵で表す活動の指導を行った。活動の中で子どもが何を感じ、どのように表現しているかを、つぶやきや活動から見とることを大切にし、子どもの気持ち、立場になって見ることをできるようにした。また、友達とよさを伝え合う言語活動は、表現活動を広げていくために有効であるということも確認できた。

② 指導助言

「遊び」で子どもは、無意識に没頭する中で経験を積んでいく。様々な経験が学びの基本であるといえる。もし、子どもに経験が足りないと思われる場合には、経験の場をつくる必要がある。今回の実践では、そうした子どもの実態から考えられていた。子どもたちは、材料に触れることでイメージが広がり、伝え合うという言語活動の充実で表現活動が広がっていた。発達の段階を踏まえた指導の充実が大切である。



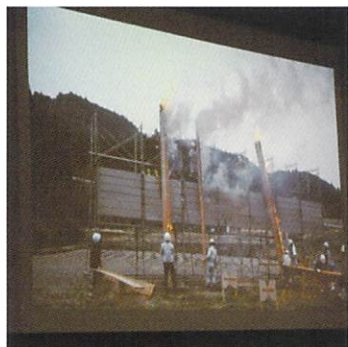
第52回東京都図画工作研究大会城東大会 記念講演

建築家 建築史家 工学院大学教授 東京大学名誉教授 工学博士 藤森 照信氏

建築家、建築史家、工学院大学教授、東京大学名誉教授、工学博士としてご活躍されている藤森先生より、自然素材を生かし、その土地の環境に調和する、建築と自然のよい関係について、たくさんの実例を写真でご紹介いただきながらお話をうかがいました。



講演の冒頭では、ポルトガル、マリ共和国、日本に在る、宗教も時代も異なる三つの建築を例に、自然または自然素材と建築、またそこに生きる人間の関係性のおもしろさに触れることができました。そして、かつての日本人が抱いていた、自然に対する畏敬の念のようなものこそ、現代の言葉に言い換えればそれこそ“美”ではないだろうかという、私たちにとって示唆に富むお話が、随所に盛り込まれていました。



さらに、藤森先生が実際に設計、建築された『神長官守矢資料館』をはじめ、『秋野不矩美術館』、『焼杉ハウス』、『熊本県立農業高等学校』、『ザ・フォーラム』、『不東庵工房』、『チョコレートハウス』、『ねむの木美術館』、『一本松ハウス』、『ツバキ城』、『ニラハウス』、『ルーフハウス』、『高過庵』、『ビートルズハウス』、『入川亭』、『空飛ぶ泥船』、『Vegetable City』など、数多くの作品を、建築中のエピソードも交えながら拝聴しました。



建築家としてだけでなく、長らく歴史研究に携わってこられた藤森先生ならではの、割板や焼杉といった日本古来の製材法のお話、さらに、木材のほかにも、土や藁、竹、銅板など、先生独特の自然素材からなる建材を用いた建築のお話は、興味が尽きることなく、大変有意義な時間となりました。

(文責：荒川区立第七峡田小学校 山崎 ゆき)

中学校

「造形美術教育のダイナミズム」 から、4 分科会テーマへ

西東京市立田無第一中学校

濱脇みどり

今年是全造連大会テーマを受けての研究となり、しかもそのテーマは幼稚園から大学、美術館までの横のつながりと人生の時間的な、縦の連なりに焦点を当てたものである。各校種をはじめとした諸機関との連携の必要性が高いことから、今年度都中美大会担当の2ブロック、都中美教科研究部、そして全造連研究局の連携によって研究を進めた。

分科会テーマの設定に当たっては、1日目に示された基調提案の内容に基づき、実践の現場から見てきた課題を、子どもたちに与える学習内容と指導の手立ての2方向から整理した。学習内容についての課題は、造形活動の主体としての生徒一人一人の見方・感じ方を大切にし、そこに働きかけることを重視すること。指導の手立てについては、その手立てが育成する資質や能力に対して有効な働きかけとなるのかを問うこと。このような視点をもとに4つの分科会6つの公開授業の構成で研究を進めることにした。以下に各分科会テーマの趣旨を簡単に述べる。

●分科会8：「思いをかたちに」

一人一人が主題を生み出し、構想を深めることができるための手立てを主眼に置いた授業研究。なお、本大会では鑑賞活動に特化した分科会は設定していないが、この9分科会に、豊かな発想構想を促す鑑賞活動への手立てに向けての研究を盛り込んだ。

●分科会9：「他者への眼差し、外とのつながり」

身の回りの物や空間などを造形的な要素に照らして味わい、そこからより良いありようの実現に向けて生徒自身が働きかけを行うことを促す実践に向けての研究。

●分科会10：「形・色彩・イメージの視点を生かして」

各題材を子どもたちに与える際の視点として共通事項を軸にし、子どもたちの思考や活動を活性化・深化させる授業研究。

●分科会11：「多彩な経験から育む豊かな表現活動」

小学校での学習活動との連続性の視点から、造形遊びの活動内容や目的への視点を生かして進める中学校における授業の研究。

研究に当たっては、各分科会に関連授業者や大学からの指導講師を立て、チームとして授業を練り上げた。関連授業者は事前に関連する授業を行い、当日の協議会で実践発表を行った。

去る11月9日の事前授業日には、すべての公開授業について事前授業が行われたが、そこには授業者、関連授業者の数を超えた多数の方々の姿があり、文字通りチームで研究が進められてきたことをうかがうことができた。また、協議会における指導講師による助言からは、中学校の関係者だけでは得られない視点や洞察が示され、今後の研究に向けて大学との連携の有効性を感じることができた。

思いをかたちに分科会

[提案者]
東京都澁谷区立鉢山中学校

森 秀二

キーワード

技法を手立てに・鑑賞を手立てに

◆研究を通して◆

今回の研究では、発想を引き出す手立てとして、「技法」「鑑賞」に着目してみました。

まず、制作に必要な技法の基礎的な内容を学ばせます。そして、この基礎的な表現技法を使って繰り返し遊び（練習）をさせます。その繰り返し遊び（練習）の中で自己表現のための試行錯誤が始まり、各自のテーマが段々と、あるいはひらめき様に浮き彫りになって来ることを期待します。はじめに課題及び各自のテーマがあり、そのテーマをどんな形や色で表すかを発想し構想するのではなく、形や色の表現（＝技法の基礎的な学習）及び練習作品の発表会において他者の作品を鑑賞するなかで、各自のテーマ（＝表したい内容＝日頃からの思い）が、自己を表現したいという欲求から自然発生的に生まれてくることを促していきます。さらにテーマがより理想的な表現となるよう、表したい内容をより明確にし（＝構想を練る＝自己の探求と技法との合体）充実させるための取り組みを行なっていきます。

今回の技法や鑑賞を手立てに制作者の内なる力の活性化を目指す授業の研究を踏まえて、今後の授業計画に生かしていきたいと思います。



両国中で実施された研究授業の様子

◆協議会から◆

協議会では、まず生徒に付けたい力は何であるか？という質問から始まり、指導要領の項目を使った説明や、技法に関する事柄や、美術の役割（存在理由）についてなど様々な角度から横断的に意見や情報が出されました。技法面では、材料についての検証や器具や使用ソフトについてなどの情報も出いただき、機器関係で二の足を踏んでいた人も、敷居が低くなり一歩前進できるのではと感じました。また、パラパラマンガの採点で、横の動き、前後の動きなど視点の動きがポイントになるといった意見も出していただきました。指導講師の小澤基弘先生（埼玉大学）から頂いたお話の中で、特に印象深かったのは、「観察」の重要性でした。制作過程における探求には観察が欠かせないというもので、美術の中で最も重要な部分の1つでありました。パラパラマンガでは、表したい事柄を形にしていく時に実際の動きがどうなっているのか確かめたいという欲求が湧いてくることは必然で、授業でも重要な取り組みとして位置付けるべきとのことでした。また、美術の果たしている役割については、「自己理解」に行きつくというもので、自己理解が深まることから他者理解も進み、そこからコミュニケーション能力の高まりに繋がる、との事でした。自己探求・自己実現を主とする美術科にとって大変ありがたい励ましのお話をいただきました。

思いをかたちに分科会

[提案者]

東京都世田谷区立千歳中学校

桶川希三子

キーワード

鑑賞と表現のつながり

◆研究を通して◆

鑑賞によって表現活動が充実し、表現活動から鑑賞が深まることをねらいとした。そして、鑑賞と表現との一体化、相互の高まりを期待し「鑑賞は色やタッチから感じ取ろう」という授業を行った。

まず、作家の絵を鑑賞し、全体のイメージを豊かな言葉で表現させる。次に、グループやクラス全体に発表することで自分の価値に気づく。

イメージした言葉を絵にする活動では、形容詞（暑い、かゆい、重い、キモい、エロいなど）をあげさせ、どんな色やタッチで表現するのか考えさせた。自分のイメージを意識する場面が制作の中で何度もある（色や筆選び、混色するかしないか、どんなタッチにするか、仕上がりを見極めるなど）が、描き進めるうちにイメージが途中から変化していくことや、色の組み合わせでイメージができていることを制作しながら学んでいた。また、作品の中でイメージしてできているところを切り取るが、作品のイメージが凝縮していてよかった。

最後にタイトルを考えさせ、イメージを意識させた。イメージしたことが伝わるように、具体的なタイトルを考えさせた。

自分で作品を制作してみて、初めて作家のすごさに気づき、作品や作家が身近なものとなり、また制作意欲が高まり、また制作したいと考える生徒が多かった。課題としては、提示する作品を、抽象の絵にしたらまた違った表現になったのではないかと。また、発想の段階のアプローチの仕方は今後の研究である。



◆協議会から◆

- ・作者の言葉を書かせることは大切。自分の思いを書かせ、作品にしていることは素晴らしい。
友達の言葉を聞き、自分もやって見ようという気持ちになるし、人と違うことに気づき、違うことのおもしろさに気づくことになる。
- ・表現と鑑賞が繋がっているということが、わかりやすい内容だった。
- ・ただ鑑賞するだけでは、作家はすごいで終わってしまうが、自分で実際に表現してみて作家のすごさが実感できる。
- ・人の良さを知り、人に優しくなれる。そして、人からほめられるようになる。

分科会8 思いをかたちに 墨田区立両国中学校会場

公開授業《連携・つながりのポイント》

発達段階を意識した、作り出す喜びを味わう 「アニメーションで表現」

[授業者]

東京都渋谷区立松濤中学校

田邊真由美

[助言者]

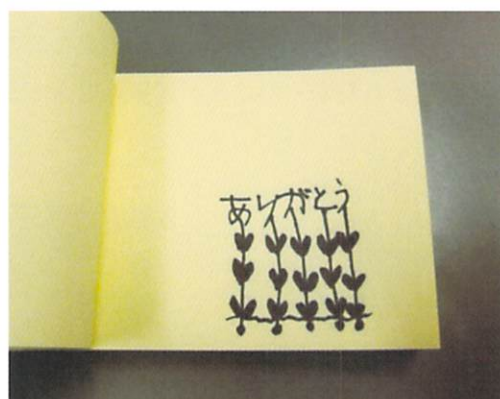
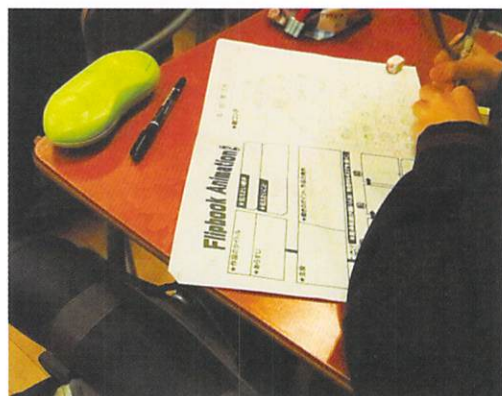
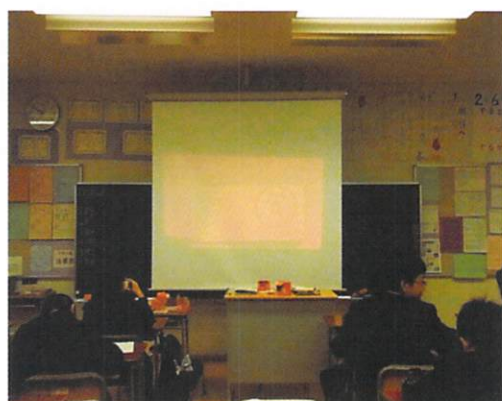
埼玉大学教授 小澤 基弘

▶ 中学校 2年生 A表現(1)

中
学
校

① 成果と課題

2時間という短時間の中でも、生徒たちは非常に良く取り組み、積極的にアニメーションの楽しさを感じ、表現しようとする事ができたと感じた。しかし、最初にアニメーションに取り組みながら、アニメーションに意味を持たせる（思いを伝える）ことまで要求するには短いものであった。余裕のある時数を授けることや、スケッチの仕方などの指導を増やすことで、基礎的ながらも発展的な課題になりえると思う。



② 助言者からの講評

「思いをかたちに」という分科会のテーマがあるからだと思うが、純粹に、アニメーションの面白さを味わい、体験する課題であったほうが良かったのではないかと。アニメーションを主に行わせたいのか、思いを伝えることを主に取り組ませたいのかが、あいまいになってしまったと思う。提示する参考作品について、推敲することができたのではないかと。他にも、生徒の制作に良い影響を与える参考作品がある。

分科会8 思いをかたちに 両国中学校会場

公開授業No.19 《「見かたが変わる、見え方が変わる」新しい美術館との連携》

中学校 タブレット端末を利用した鑑賞と表現 感じる風景「思いの空」

〔授業者〕

東京都中野区立第五学校

花里 裕子

足立区立青井中学校

三浦 悦子

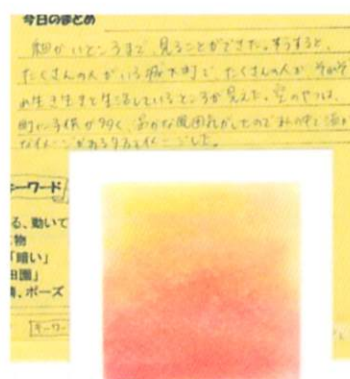
▶ 中学校 3年生 A表現(1)・B鑑賞(1)

1 成果と課題

事前授業の様子から、全体的に美術館に行った経験が少なく、深く作品を鑑賞する習慣がないことがわかった。グループでの鑑賞活動は、タブレットのものの珍しさや、搭載された機能に振り回されず、主体的に作品世界を探索し、表現方法の工夫を味わい、他者の見方も意識できたようだった。作品のなかに自らの主題「思いの空」を見出し、実際の作品づくりの色やかたちの発想構想につなげることもできたが、最後のまとめの時間を十分にとれなかったことが反省点である。

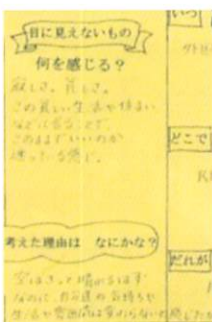


導入で、電子黒板の光琳と教科書の宗達を比較した。



「洛中洛外図」を鑑賞した生徒

自分で描いた作品に「迷いの空」というタイトルをつけた生徒の鑑賞メモ



「オランダの家の奥部屋で

野菜の下ごしらえをする女性」を鑑賞

2 助言者からの講評

鑑賞と表現が連動した興味深い授業内容だった。特に今回は、タブレットや電子黒板を使った新しい鑑賞教育の提案になった。また、美術館や企業との連携は美術教育のさらなる広がりを予感させる内容であった。鑑賞後の絵画表現は、短い時間ながらも思い思いに表現が出来ていた。表現をさせるための鑑賞ではなく、鑑賞と表現が一体化した授業展開になっていた。また、ワークシートを使うことで、発見、感じたこと等が整理され、有効に活用されていた。

－大成哲雄（聖徳大学）

分科会8 思いをかたちに 両国中学校会場

発表内容

「ティッシュにアートしよう!!」

〔提案〕東京都渋谷区立広尾中学校 鹿倉 美帆

〔助言〕埼玉大学 小澤 基弘

〔司会〕代々木中 近藤 幸司

〔記録〕鉢山中 森 秀二

① 提案者から

色や形から刺激を受け、発想構想を膨らませ深めることができる題材を発表した。材料は、生徒にとって身近であるティッシュペーパーや油性ペンを使う。制作過程はティッシュを折りたたみ、ティッシュにインクをしみこませることにより、線対称の形をつくる。その線対象の形で模様を描く。偶然にできる形や色の組み合わせに美しさや面白さを感じ、自分のイメージを直感的に見出し、表現していく。直感的に感性を働かせ、生徒は意欲的に取り組んだ。3年生の短時間題材として研究をしたが、新たな展開を模索したい。

② 指導助言

おもしろい題材であると思うが3年生で取り組むべき題材であるか？1年生などの学年で取り組むことも可能でありさらなる展開を考えると3年生でわざわざ取り組む点に課題があるように感じた。



発表内容

「見かたが変わる。見えかたが変わる。」 新しい美術館との連携 感じる風景「想いの空」

〔提案〕世田谷区立千歳中学校 桶川希三子

〔助言〕聖徳大学 大成 哲雄

〔司会〕中野中 松尾 美恵

〔記録〕文京三中 石井恵美子

① 提案者から

鑑賞は絵から受けるイメージを上手に言葉で表現し、それが絵の良さをより深く味わうことでもある。また生徒同士の作品を上手にほめ合えることにもつながった。1年生で4月に行った授業。絵画への苦手意識を持つ生徒がいる中、言葉のイメージを絵にするという活動は技能を気にせず、楽しく制作に没頭できる題材であった。その表現の活動を通すことで、最初に鑑賞した絵のすごさや美しさがよくわかるようになったと感動が伝わってきた。鑑賞が表現に表現が鑑賞につながり相互に高まり合う活動になった。

② 指導助言

生徒たちの振り返りから、作品に対する作者の気持ちや考えがわかってよかったという意見があった。鑑賞の「言葉で表現する」活動が始まって、表現活動を通し、最後は自分の制作の思いを言葉で表現できたことが言語活動につながり、鑑賞と表現をつないでいたと思う。また、生徒の楽しそうな活動の様子が感想からも伝わってきたという感想をいただいた。



発表内容 《受け継ぐ・広げる・創造する》

～美術文化の継承と創造を学習しよう～かりゆしプロジェクト
「ていーだパワーを感じて」

▶ 2年生 A表現(2)・B鑑賞

[提案] 沖縄県金武町立金武中学校

[助言] 宮城県仙台市立南中山中学校

[司会] 狛江市立狛江第四中学校

[記録] 墨田区立墨田中学校

田仲 浩美

三品 良春

安島 典子

伊藤 範彦

発表内容 《つなげる》

イメージの力

～空想の世界を表すために～

▶ 3年生 絵画A表現(1)

[提案] 宮城県仙台市立館中学校

[助言] 宮城県仙台市立南中山中学校

[司会] 狛江市立狛江第四中学校

[記録] 墨田区立墨田中学校

高橋 清子

三品 良春

安島 典子

伊藤 範彦

① 提案者から

沖縄独自の美術文化に着目し、「かりゆしプロジェクト」と題して、現代の「私たちの沖縄」に視点を置きながら、「受け継ぐ」「広げる」「創造する」をキーワードに、①「鑑賞」琉球探索、②島ぞうりのデザインと制作、③かりゆしウェアのデザイン、④沖縄工芸体験レポート、⑤信仰から発展した美術へと、授業を連携させる。生徒たちは、沖縄パワーを身近に感じながら、郷土への親しみをもち、心の豊かさを育んでいく。

② 指導助言

外の世界（郷土・歴史文化）との出会いを軸とし、鑑賞を効果的に関連づけながら、発想力・構想力へ結びつける授業実践であった。田仲教諭の実践では、地元では、身近にありながら当たり前すぎて、意外と感じ取ることが困難な「郷土の良さ」を改めて知ることの重要性を示唆している。さらに他の文化（京都など）との比較という視点を織り交ぜていくことで、「郷土の良さの再確認・誇り」に繋がると思われる。



① 提案者から

「点描による空想の世界」の制作を通して、生徒たちは主体的に自分の世界観を表現しながら、発想力やイメージを広げようとする力を伸ばしていく。導入としての「発想ミニテスト」の実施や、マグリットやダリの鑑賞を織り交ぜながら、生徒たちは、モノトーンの美しさとの出会い、点の密度の変化によって様々な立体感や質感を容易に表現できることに驚きと発見を積み重ねながら、主体的に自分の主題を見つけていくことができている。

② 指導助言

自己の内面との出会いを軸とし、鑑賞を効果的に関連づけながら、発想力・構想力へ結びつける授業実践であった。高橋教諭の実践では、導入での「発想ミニテスト」と「鑑賞」を繰り返す中で、自分の思いを主体的に表現に昇華していく力を養うことをねらいとしている。これは「造形言語」能力を養うことであり、特に鑑賞の時の「教員の言葉かけ」が重要になる。教員のメッセージによって、生徒の作品への興味に、視点が生まれる。



分科会8 思いをかたちに 両国中学校会場

発表内容

「平成 DOKI 土器」

[提案] 長野県茅野市立東部中学校 高橋伊智郎
 [助言] 長野県茅野市立北部中学校 五味 一男
 東京都美術館 稲庭彩和子 学芸員
 [司会] 豊島区立西池袋中学校 倉科 幸雄
 [記録] 墨田区立桜堤中学校 奥井 伸

① 提案者から

長野県茅野市には尖石遺跡など縄文時代の遺跡がある。今回の授業は平成を生きる生徒たちが縄文式土器の造形美を感じながら新しい感覚で現代の土器を創り出すことに主題を置いた。また、茅野市尖石縄文考古館、大王製紙との連携をすることで原材料にもこだわり、自然豊かな風土から草木染めの技法を利用し、染めた風糸を巻きつけることで様々な縄目模様のイメージの実現に至った。

② 指導助言

地域と学校と考古学館、パルプ企業の連携という要素がたくさんあることの良さ。仕込みの手間と予算をかけていることへの驚き。染色の理料的要素、自然への奥深い反応、先祖への思いが素晴らしい仕上がりの土器を生んだ。そのままの土器ではなく、生徒のこだわりが作品に如実にでている。考古館との連携においてはお互いのイメージを協調させることが授業の成功に繋がった。



発表内容

「はじめまして遙邨さん」

[提案] 岡山県倉敷市立水島中学校 松永美紀子
 [助言] 東京都美術館 稲庭彩和子 学芸員
 [司会] 豊島区立西池袋中学校 倉科 幸雄
 [記録] 墨田区立桜堤中学校 奥井 伸

① 提案者から

倉敷市立美術館との連携による対話型鑑賞の授業。地元出身の池田遙邨氏の作品に触れることで郷土に対する愛着を育むことがねらい。プレ授業として教科書内の作品から対話型鑑賞を行った。当日は学芸員を招き、実物に近い作品のレプリカを準備。作家の人となりや画業について学びながら対話型鑑賞を行った。また、美術館の所蔵作品を使用したアートカードの共同開発も行っている。

② 指導助言

美術館には行かずに鑑賞授業の充実を図ったことの意義。対話型、アートカードによる鑑賞の実践。地元の作家を取り上げることにより、郷土愛を育んでいる。アートカードを連携で創り上げたことへの驚き。取り組みを継続させるために、行政との連携も視野に入れ、点の活動が面となる広がりをもつことが重要である。全体協議では対話型鑑賞の実践例の共有を行った。



公開授業No. 20 《連携・つながりのポイント》

「遊びのデザイン」

[授業者]

東京都目黒区立目黒中央中学校

榎原 純子

目黒区立第八中学校

奥山たみ恵

▶ 中学校 2年生 A表現 (2) (3) ウ

① 成果と課題

「遊び」をコミュニケーションツールとしてとらえ、遊び方から遊具の作成までを今回の課題としました。最初から班での取り組みとしましたが、それも「つながり」が感じられてよかったのではないかと思います。当日は、生徒から「与えられたゲームなどではなく、自分たちが考えた遊びが人に楽しんでもらえるのはうれしい」という発言もできました。グループでの活動をどう評価するかという面では、はっきりとした回答がでていないのでこれからの課題とさせていただければと思います。



② 助言者からの講評

美術とは個に照らされた教科の特性があるため、グループ作業の評価は難しい。班でリーダーシップの発揮・自分の分担への取り組み・遊びの場と時間の提供等の観点で評価が可能となる。東京芸術大学の小池岩太郎先生の「デザインに必要なものは“真・善・美”」という言葉がある。“今できる最高の物・相手に対して善い物・美しいもの”だが、限られた時間でこれらの観点で生徒の活動を見取ることが教員に求められていると考える。

公開授業No. 21 《身近な生活環境とつながる》

[授業者]

東京都足立区立洲江中学校

志手 伸圭

「心地よい生活環境をつくろう」

▶ 中学校 3年生 A表現(2)・B鑑賞(1)

① 成果と課題

本活動では、他者の立場に立って造形要素の働きを考えることや、考えたことを言語化することが課題であった。生徒は少ない活動時間の中でも、生活環境の中の造形要素の改善策について考え、「おばあさんが楽に休めるように、木製のベンチを作って置くと良い」などと、他者の立場に立ちながら、明快な言葉で意見を述べる事ができていた。

また、本授業は身近な生活環境の造形要素に関心をもたせることを目的としていた。授業の最後に書いてもらった生徒の感想には、「環境に目を向けることができて良かった」、「改善がたくさんあることを知ることができた」といったコメントがたくさんあり、環境の中の造形要素の働きに関心をもつことができていたと思われる。

ただし、他者の視点になるための人物設定には生徒にとってイメージしにくいものも含まれており課題が残る。また、今回の活動はグループで行うものであり、個人の能力を向上させることができたかどうかは判断できない。これらのことについては今後検討が必要である。



② 助言者からの講評

本授業には教師の細やかな配慮がいくつかあったが、気になる点を挙げておく。本授業では、他者の視点に立って環境の中の造形要素について考えさせた。しかし、果たして他者の立場に立たせることが本当にできるのかは疑問である。他者の視点として、6人の人物が設定されていた。その内の「小学生」であれば経験があるため、その視点に立って考えられただろう。しかし「おばあさん」や「会社員」などの経験の無い人物像は、生徒にとってリアリティが無いだろう。事前授業を振り返ると、夢中になって活動する生徒の姿が見られたが、夢中になればなるほど、他者ではなく中学3年生の視点で見ていたように思われる。

また、心地よい環境の視点を示すために、フンデルトヴァッサーの作品を引用したが、教師本人の感じる心地よい環境や改善策を語っても良かったのではないだろうか。「美術とはこういうものである」と教えるよりも、身近なものを見つめる心情を育むことが、生涯にわたって美術を愛好する心情につながると思われる。

発表内容

「～思いやりを届ける～
友達が喜ぶマグカップのデザイン」

[提案] 東京都目黒区立東山中学校 河本 珠実

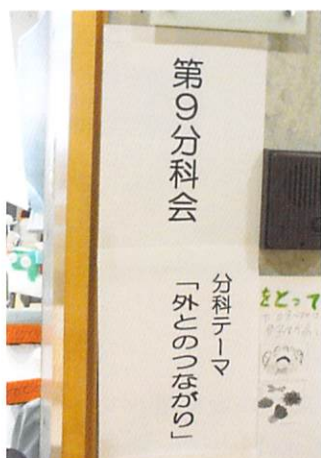
[助言] 横浜国立大学教授 渡辺 邦夫

[司会] 目黒区立第七中学校 羽塚美和子

[記録] 目黒区立第九中学校 早崎 希子



① 提案者から

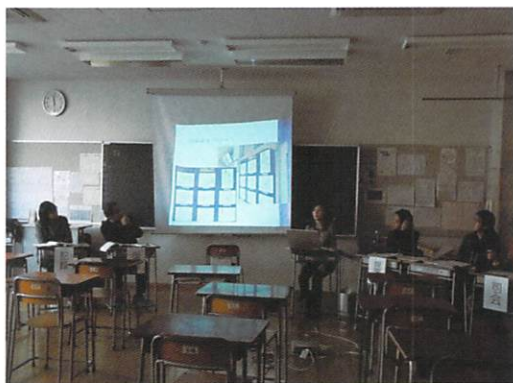


まずは、日頃の美術の授業や学校における美術との関わりについて発表させていただきました。その上で、今回のテーマとの関連の授業を発表しました。題材は、1年生を対象としたもので、二人でペアをつくり、互いの好みの色や形、イメージをリサーチして「相手が喜ぶマグカップのデザイン画」を制作するというものです。そして出来上がった作品やお礼のお手紙を交換します。1年生の目標にある「身近な友達に眼差しを向ける」というテーマにそっての授業を発表しました。

まずは、日頃の美術の授業や学校における美術との関わりについて発表させていただきました。その上で、今回のテーマとの関連の授業を発表しました。題材は、1年生を対象としたもので、二人でペアをつくり、互いの好みの色や形、イメージをリサーチして「相手が喜ぶマグカップのデザイン画」を制作するというものです。そして出来上がった作品やお礼のお手紙を交換します。1年生の目標にある「身近な友達に眼差しを向ける」というテーマにそっての授業を発表しました。

② 指導助言

真摯に取り組んでおられる様子が伺えました。デッサンなどの様々な作品の基礎が出来ているからこそ「マグカップのデザイン」にも活かされていると感じました。色や好みなどを相手に聞いて繊細に仕上げていたので、実物が欲しいと思う生徒の気持ちがわかります。ただ、形まで自由に制作するのは、イメージの色彩にならなかったりすることが予測され、大変であると思いました。



発表内容

公園のパブリックアート

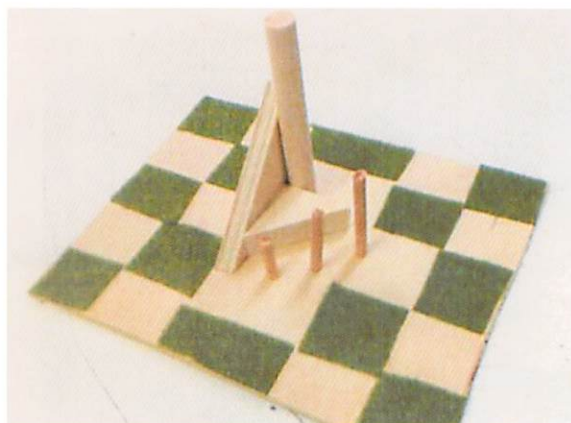
〔提案〕 東京都世田谷区立鶴巻中学校 高澤健太郎
 〔助言〕 山梨大学准教授 井坂健一郎
 〔司会〕 東京都八王子市立梶田中学校 畠山 真理
 〔記録〕 東京都大田区立貝塚中学校 松尾 英治

① 提案者から

社会や環境に目を向け、安らぎや共生、生活の改善などを視点に、外とのつながりや外に働きかける事を意識した表現として、公園にパブリックアートをつくるというテーマで模型の制作を試みた。設置される空間の環境的特性や地域との関係において空間の魅力を高める役割を担うパブリックアートの制作を通して、美術を身近に感じるきっかけにするとともに、社会や環境に向けて自らを表現する面白さに気付かせたい。また、制作において、木を「切る 貼る 磨く」という単純な作業を組み合わせるという課題を設定することにより、素材の質感をわかりやすく楽しめるように工夫した。

② 指導助言

木に焦点をあてて制作を始めたが、単一の素材では作品が似通ってしまい生徒の個性が生かされなかった。素材を木以外に金属や紙などを使用したり、着彩による加工も取り入れていくと表現の視野が広がり、生徒の主体的な創作活動に結び付けることができた。



発表内容

こんな場所にしてみよう!

～楽しい標識のデザイン～

[提案] 山梨県甲府立南中学校

[助言] 富士東部教育事務所指導主事

[司会] 武蔵野市立第六中学校

[記録] 墨田区立立花中学校

鷹野 敦貴

小俣 博昭

中村みどり

大村志保子

① 提案者から

生徒に付けたい力・評価の観点を生徒にわかりやすい言葉で提示し、生徒が制作活動に取り組むにあたって意識する点を明確にさせた。またデザインを完成させるために検討会議をひらき、言語活動の充実やコミュニケーション能力を向上させる。4つの観点をわかりやすく表示することで生徒の発言に変化があらわれた。また、標識を校内に掲示することで生徒達の行動にも良い変化があった。

② 指導助言

4観点を平易な言葉で示し、授業のねらいは何か、生徒がどういう姿勢で授業を受けることがよいのか、明確に生徒に伝わることに大切な意味をもっている。また、言語活動を充実させるためにグループでの検討会議を取り入れているが、このように活動の根拠を明確にすることが重要である。



発表内容

アートで自己紹介

[提案] 岩手大学教育学部附属中学校

[助言] 富士東部教育事務所指導主事

[司会] 武蔵野市立第六中学校

[記録] 墨田区立立花中学校

高橋 知志

小俣 博昭

中村みどり

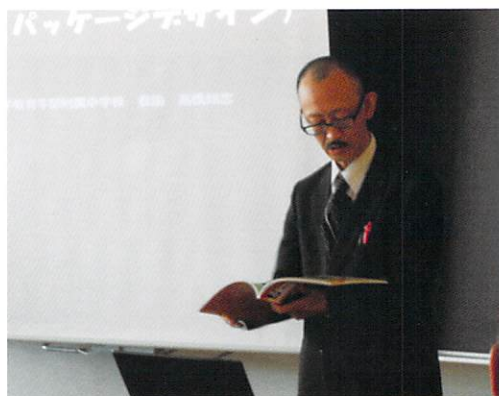
大村志保子

① 提案者から

「わかることが楽しい」から「わからないことが楽しい」へ。分かりやすく教えるのではなく、どうしたらよいのかを問い、自分で「どうすればよいのか」を考えさせる。考えを出し合って自分たちでたどり着くことが重要である。「自分はこのものをつくりたい」という思いや造形のイメージをもつことが、同時にそれが自他の作品を見る観点になり、鑑賞と表現の授業が相互作用で深めることができる。

② 指導助言

3年間の学習の系統性を考え、授業自体を改善する試みは良い。表現と技術の両輪をそろえることが大切であり、一つの授業でどちらも獲得させるのは難しく、我々が考えていくべき課題である。また、子どもの投げかけを拾いあげられるような日頃からの生徒との関係づくりが大切である。



発表内容

—そばにいる仲間を知り、
ともに学ぶこと—

[提案] 札幌市札幌北中学校 則友 冴子
 [助言] 横浜国立大学 小池 研二
 [司会] 中野区立南中野中学校 内田 善人
 [記録] 江東区立深川第四中学校 高崎美也子

① 提案者から

札幌北中学校は全校生徒630名の大規模校である。私はこの学校に勤務して四年目になる。美術科教師として大切にしていることは、生徒たちの感動、達成感、所属感の3点である。

今回の発表題材である「木彫小箱」はその3点を生かすことを意識して題材を考えた。それは「線」による表現であるが、友人の描いた「線」を生かすことによって、生徒たちのつながり、所属意識、思いやりなどを育てることができると考えた。また、単純な線の表現の中から、線の持つ美しさや、勢いなどを感じさせ表現させることができた。

② 指導助言

則友先生は、「線の表し方」を生かしながら、生徒たちの声や視点を大切にしている。生徒同士が仲間を知ることで、コミュニケーションを深め、言語能力を高めていくことができる。また、そのことによって、美術の力も高まっていく。美術とはコネクトする力だと考えられる。



発表内容

—身の回りを見つめ直してみる。
連携で深める美術の時間—

[提案] 京都府京都市立蜂ヶ岡中学校 湯口みゆき
 [助言] 京都市指導主事 小泉 繁雄
 [司会] 中野区立南中野中学校 内田 善人
 [記録] 江東区立深川第四中学校 高崎美也子

① 提案者から

本校では「生徒一人一人を大切にしよう。環境を守ろう。」を学校目標にしている。美術科でも、自分の周りを取り巻く環境に、目を凝らせ、体感し、理解を深めることで、生きる力を持つことが大切だと考える。そこで、自分の身の回りのものの中から「私のこころ色」と名付けた色を見つけ出し、その色にまつわるエピソードをつけて展示した。またそれらの色を「絵の具」として商品化し、販売するなどした。また、京都には様々な伝統工芸や芸能の文化があり、それらの技能集団と連携をとり、授業を展開することが可能である。その体験のなかから、生徒たちが伝統文化の良さを知り、ものづくりの喜びを知ることができる。

② 指導助言

湯口先生は京都の地域性を生かした授業を展開している。それは、生徒たちのアイデンティティを確立し、自己肯定感を高めるものである。京都だからこそできる、様々な連携授業を中学生が体験することで、地域の活性化、伝統文化の理解と継承に繋がると考えられる。



形、色彩、イメージの 視点を活かして分科会

[提案者]

東京都世田谷区立上祖師谷中学校

深見 響子

キーワード

共通事項を通じて

◆研究を通して◆

見えないものを視覚化する、今回の授業を通して生徒は色画用紙を用いて実現してくれた。勤務校の生徒と合わせ200名ほどの生徒の発想に触れることができたことは大いなる感動と喜び以外の何物でもない。短時間で制作した彼らの作品には、各園・各校種における彼らのこれまでの経験の積み重ねで習得してきた色や形のイメージが発現されていた。これまで、小中連携として研修会などを経験してきたが、今回ほどこの重要性を実感したことはない。そして、これを念頭に中学校3年間の指導計画及び題材の開発を、発達段階に適した内容として設定する必要性を改めて感じた。

今回の題材は元々詩を絵本として描き起こすという具象表現として長時間で扱っていた。これを共通事項の視点で見直すことにより、色画用紙を素材に技術面のハードルを大いに下げ、詩のイメージを抽象的に視覚化するという発想面重視の短時間題材として改良した。同じ作品は1つとしてなく、生徒は画用紙の可塑性を味わい楽しみ、制作に没入していく姿がこちらから見てとれた。授業展開の工夫としてワークシートへのアイデア記入は極力省き、数十色から選び取った色画用紙を手にとらせ、すぐに加工しながら考えさせた。作業内容が発想から技能へ、そしてまた発想へとつながるスパイラルとなっており、この状態は造形遊びとして小学生が経験する試行錯誤の繰り返しであると講師から指摘があった。「造形遊び」＝「試行錯誤の繰り返し」として認識した途端、図画工作と中学校美術の差異と本質がクリアに感じ取ることができた。昨今、学校区分の見直しが行われているが、中学校へのスムーズな移行を促すには、この視点が非常に有効であり、前述した通り、年間指導計画の中にこの内容を取り入れた題材を組み込まなければならないと感じた。中学校1年生の感想にも、「中学生になって久々にこのような作業を体験して楽しかった」とあった。

一方、中学校としてこの題材を扱うにあたり、評価についても非常に考えさせられた。技術面での差異が出ない設定の中で、発想をどのようにして明快に評価していくかである。これに関しては、機会があれば図画工作の評価方法を学びたいと考えている。そこにはヒントがあると考えており、大いに参考としたいところである。本題材で設定した発想構想の能力の評価規準は、「作品から感じ取った詩の主人公の心情を、色と形（配色と構成）に置き換えて考えることができています。」である。図らずも授



業後にここにある「構成」という言葉の重要性に司会者の方から気付かされた。色も形も、単独で存在するものではなく、全ては統合され表現に結びつく。色も単色と複数組み合わせられた状態では、印象が異なってくる。これを限られた時間の中でどのように指導していくか、現在の私の授業ではこの点に関して生徒に頼る部分がまだ大きい状態である。今後の課題として取り組んでいきたい。

また、戦争を題材として扱うことについて何の躊躇いもなかった。むしろ今後の日本を考えるには、過去の戦争を避けては通れないと考えているからである。戦争を通じて民間人が何を見てどのような体験をしたのか、少なくとも1つのきっかけにはなったはずである。そう思って題材を開発した。しかし、協議会でも指摘があったが、授業後に生徒が感じる後味を思うと、全員が心地よく負われる題材ではなかった。実際にそのような感想もあった。この点についても今後の改善すべき課題としていきたい。

◆協議会から◆

「感情を抽象形態で表す題材」の画材選択についての質問に対し、色画用紙を使用したのは作業が短時間で済むからで、かつては絵の具を使用したこともあり、詩の鑑賞のあと紙に直接絵の具を使って絵本にするという指導を以前に行っている。今回は色画用紙を用いて台紙に貼る作業で抽象表現に変化させてみた。詩から感じ取ったイメージを色画用紙を用いて、その可塑性を利用して画面構成する技法は小学校の図画工作（造形遊び）での学習が活かされてくるはずだ。また、講師からも小学校の教科書には「抽象」という言葉は使われてはいないが、心情表現の題材があり、これらの技法は経験しているはずであるとの助言をいただいた。したがって小・中学校の共通事項の表現・鑑賞に通じてくる内容でもある。さらに戦争をテーマにする場合、特別に教師の投げかけが無くとも、心に残った場面からこれからの自分の生き方につながり、希望や夢の創造になることもある。むしろ作品に幅を持たせるには生徒それぞれのアプローチでいいのでは、という意見も出された。



分科会10 形、色彩、イメージの視点を活かして 両国中学校会場

公開授業No. 22 《連携・つながりのポイント》

「つながる思い」

▶ 中学校 2年生 A表現(1) ア・イ、(3) ア、B鑑賞(1) ア
「思いを形や色で」

[授業者]

東京都世田谷区立上祖師谷中学校

深見 響子

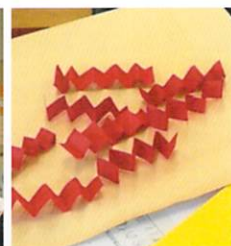
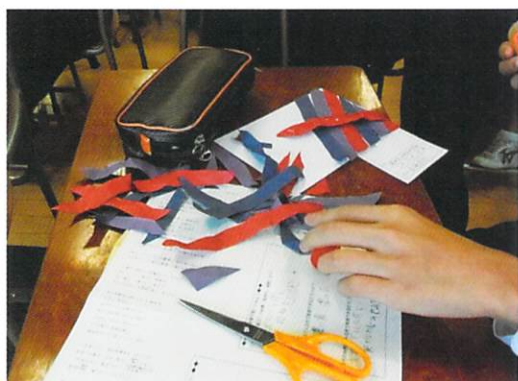
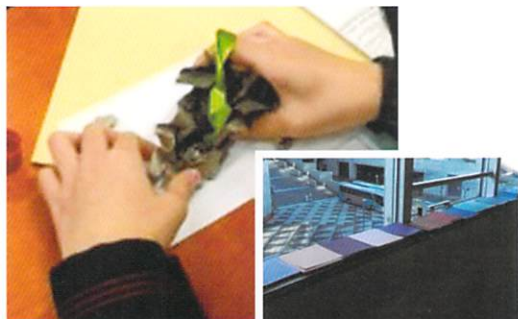
[助言者]

横浜国立大学准教授

大泉 義一

① 成果と課題

短時間の中で生徒達が発揮した発想力に大いに驚かされ感動した。完成した作品鑑賞を通して、生徒が個々にイメージを感じ取ることができていた。課題としては、色と形は切っても切り離せない要素として、具象でも抽象でも構成力の下に活かされてくることに改めて気づかされた。色も単色と、組み合わせられた色合いでは、感情効果などの印象が大きく異なってくる。3年間の美術教育の中でのことを題材の中でどうやって生徒に学習させるかを熟考していきたい。



② 助言者からの講評

地域に根差した題材であった。実際にこどもの実態や能力にあった題材を選定するのはあるが、テーマの設定に当たって豊かな情操を育てることを目的にするのであれば、夢や希望につながる活動が望ましい。戦争や自画像（関連授業テーマ）は難しい題材ではあるがその重要性を感じた。心に残った場面や、もう一つの自分の発見に出会えば、これからの生き方や希望につながることになる。また、小学校での造形遊びでの経験が生かされ心情表現の学習として成立していた。

発表内容

形、色彩、イメージの視点を活かして

[提案] 世田谷区立世田谷中学校 中村奈穂子

[助言] 横浜国立大学 大泉 義一

[司会] 世田谷区立砧中学校 小川 永佑

[記録] 世田谷区立駒留中学校 大西 均

① 提案者から

小学校図工専科経験から、「小学校図工学習に取り組んできた、中学生へのアプローチはどうあるべきか。」というつながりを大切にして授業を行っている。色についての学習は単なる暗記や作業的な学習のみにならないように配慮している。配色カードを用いることで、様々な色についての捉え方があり、学習経験や体験によって捉えの違いが生まれることを言語での確認だけではなく、視覚で確認し合えるよう設定した。

② 指導助言

生徒自身が創り出すきっかけが大切である。きっかけの1つとして、教師からの投げかけの必要性が挙げられる。小学校での学びを喚起させることで学び蓄えた力がいかされていくと意欲につながる。

〈学びを活かしての制作きっかけを得る〉

(小学校での学び)

- ・好きな色・明るい色、暗い色など



(中学校での学び)

- ・補色の関係を意識しての制作
- ・同系色の関係を意識しての制作など

〈違いをおもいきり楽しめる生徒の育成〉



発表内容

中学校美術新任教師へのフォローアップ
題材開発、授業評価

〔提案〕山梨県山梨大学 新野 貴則
 〔助言〕東京都教育庁指導部 松永かおり
 〔司会〕杉並区立井草中学校 猪口 正和
 〔記録〕町田市立金井中学校 福島 淳子

① 提案者から

大学で教員養成に携わる立場から、中学校と大学の連携の必要性、教員養成の授業の改善点について確認・検討されたことが発表された。

大学を卒業したばかりの新任教師が即戦力になるために、配属された中学校での授業について大学が引き続き具体的なアドバイスをを行った。



生徒の興味関心を高めるために、育む資質や能力の明確化、目標に基づいたシンプルな授業づくりが大切であるということである。また、山梨県ではカードを掲示することで生徒と教師が学習目標を共有し成果を上げている。

これからも小・中・高・大と、美術の学びが広がっていくよう取り組みを継続していきたい。

② 指導助言

大学において、各授業で育成する資質や能力を明確にして御指導されていることは、とてもありがたい。東京都教育委員会と大学の連携で教員養成の現場に出向き強く感じたことは、指導案



の書き方や題材への指導が徹底されている一方、授業中の子供への対応を指導する必要があるということだ。

さらに、実態に応じて、年間指導計画や評価計画を立てられることが大切。今後の教員養成に期待している。

発表内容

文字の形 イメージとのつながり

〔提案〕福井県福井大学 吉田 千春
 教育地域科学部附属中学校 松永かおり
 〔助言〕東京都教育庁指導部 松永かおり
 〔司会〕杉並区立井草中学校 猪口 正和
 〔記録〕町田市立金井中学校 福島 淳子

① 提案者から

「みること」「つくること」をつなげるとりくみを表現に生かすことを意識して、イメージを表現できる書体のすばらしさをレタリングの学習から学ぶ授業のようすが発表された。

自分が描いた野菜のスケッチ作品をアピールするには、どんな文字の形や配置にしたらいいのか考え、平面構成する授業に、書体の鑑賞活動を2段階で取り入れている。「受け手」としてどう感じるか、「送り手」として思いを伝えるためにどの書体を選ぶかという視点で活動することで、生徒の書体に対する関心や理解が深まり、その後の創作活動で表現の幅が広がった。他者とのかかわりの中で自分の考えを高めていくことができた。



自分のイメージと造形要素とを往還して「見る力」「つくる力」が育まれるのである。

② 指導助言

書体とイメージをつなぐ大切さを改めて感じた。レタリングの授業は、必要性があって使ってみないと、子供に定着していかない。発表授業ではA表現(2)イ 他者の立場に立って…に対しての意識をきちんと考えているところがすばらしい。今回の発表のエッセンスを活かして参加者の皆さんがそれぞれの現場でアレンジして、文字の学習や表現の題材としてねらいを焦点化して授業を実践してほしい。

公開授業No. 23 《連携・つながりのポイント》

「空間を造形する」

[授業者]

東京都新宿区立西早稲田中学校

神野 智彦

▶ 中学校 2年生 A表現(1)

中
学
校

① 成果と課題

ねらいとしては、「空間を意識した造形」としたが、授業の中で、空間が変化することの面白さを通じて、子どもに「感動体験」を与えることができた点は成果であった。

課題は、よりねらいを明確化することであり、時間を増やし、話し合い等発想・構想の過程を言語的にアウトプットしたり、空間を広げ、複数の空間で班に分かれて制作することによって、より「空間を意識した造形」という面で深めていくことができると思われる。



② 助言者からの講評

これからの時代には、未知のものに取り組む力、他者と協働する力が求められる。造形遊びの「材料体験」や「他者と協働する」という要素は、予めあるねらいだけでなく、子どもが体験から新たに発見をしていく力を身につけさせるうえで、可能性を持っている。最後の撮影の場面でブラインドを上げた瞬間の、光が差して、非常に美しい場面があり、非常によかった。

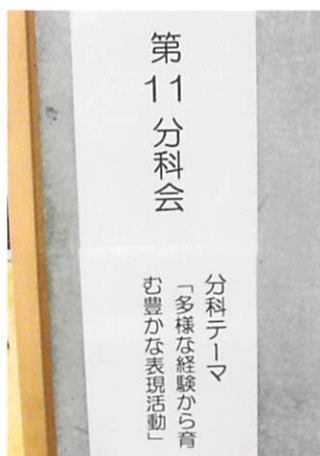
発表内容

多様な経験から育む豊かな表現活動

〔提案〕東京都新宿区立新宿中学校 立川 英司
 〔助言〕東京造形大学 石賀 直之 先生
 〔司会〕新宿区立牛込第三中学校 深谷 玲子
 〔記録〕新宿区立落合第二中学校 菊池 美聡



① 提案者から



分科会のテーマから、「小学校での造形遊びの多様な素材体験や、身体感覚に働きかける活動などを生かした、中学校での題材提案」を考えた。その研究過程について、①小学校訪問 ②事前ワークショップ ③両国中でのプレ授業

の様子を映像を交えて説明した。まとめとしては、中学校でも造形遊び的な体験は発展的に有意義であるとし、今後の課題も示して発表を終えた。



② 指導助言

「未来に生きる子供たちに、今、美術として何ができるのか」を常に考えていく必要がある。学び続ける力・人と関わっていく力・問題を解決していく力をどう美術教育で育むかが重要である。

「空間・素材」に関わっていく同じ題材に取り組んでも、違う年齢でやったら意味性やあり様が違ってくる。今日の授業の空間は、三次元+時間の流れで、風景が変化していく美意識に注目させると興味深くなるなど助言をいただきました。



発表内容

幼稚園・保育園・小学校からの粘土造形の学習経験を生かした題材の工夫

[提案] 岐阜県多治見市立多治見中学校 佐々木和哉
岐阜県岐阜市立境川中学校 林 徳和
[助言] 東京造形大学准教授 石賀 直之
[司会] 西東京市立ひばりヶ丘中学校 長尾 菊絵
[記録] 世田谷区立桜丘中学校 川田 保子

① 提案者から

多治見市は古くから焼き物の町として知られ、子どもたちは粘土と触れ合って成長する。幼稚園・保育園の遊びの経験の上に、小学校では毎年彫塑学習指導計画による指導が行われている。

中学校では、1年で「見る力」「量をとらえる」学習として靴の模刻、2年で染め付けの「幸せどんぶり」の制作、3年では5kgの粘土を使い、集大成として「私の器」をデザインし、制作した。

② 指導助言

20年後、今の子どもたちの50%は、今ない職業に就いているだろう。逆に、半分は今の文化を継ぐ。多治見市の過去～現在～未来を丁寧に見据えた取り組みは素晴らしい。それぞれの地域で何ができるか考えていくことが大切である。

粘土は、不安定な人間の心を、それに触ることで安定させ、自己を発見させる素材である。粘土には今の考えや心情が表れるのである。

美術の意味は技術の向上ではなく、その時その時の自己を発見していく歴史である。結果的に成長や技術の向上につながり、文化、伝統が継承



される。「自分の願いが出せたか」と問うことで、さらに深みのある指導計画になるであろう。

発表内容

小中学生の交流、共同作業を通して、コミュニケーション能力、思いやりのことを高めたい。

[提案] 熊本県熊本市立城北小学校 宮尾 有
[助言] 東京造形大学准教授 石賀 直之
[司会] 西東京市立ひばりヶ丘中学校 長尾 菊絵
[記録] 世田谷区立桜丘中学校 川田 保子

① 提案者から

特別支援学級では「美術」でなく「生活単元学習」。美術を通して自己有用感を味わわせたい。

地域で親しみ、大切にしている八景水谷公園を題材に、段ボールにローラーを使って色を塗り、切り取って貼り付け、壁画を作った。水について学び、小中学生が共同制作する中で心も育つ。

地域の水の資料館に展示してもらい、自己肯定感も高めることができた。

② 指導助言

美大生が幼児の絵を見て「線に迷いがない」と評した。造形表現は国も年齢も超える。これが、他教科にはない美術の可能性を示している。

保育園と小学校の交流をしようとした時に、活動時間帯が合わず苦労した経験がある。交流は大切だがさまざまな障壁がある。

今後、ハイパー高齢化社会となった時、美術や美術科の教員に求められるものとは何かを考える必要がある。異年齢間の、または地域との「コラボレーション」が、どんなふうにできるのだろうか。その答えが本発表にあるように思う。



他の国にまで提供できる、美術の可能性と未来……そのような実践をされていると思う。

子供たちが形や色で 生み出すつながり

文部科学省初等中等教育局
教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所
教育課程調査官

東良 雅人 先生

これからの学校教育における美術教育を考える

◆中学校における美術教育◆

私たちが教育として行っている「美術」という教科は、子供たちが自分の生きることの関わりの中で見つめたり、描いたり、つくったりすることを通して学びです。そのため題材というものは発達段階に応じて一人一人の子供の生き方と大きく関わっていくべきであり、その活動の中で子供たちが人とつながったり、ものやものごととつながったりしていくのであるということを意識しなければなりません。

また、発達段階に応じて学習内容は変わっても育成する資質や能力の観点は小中高で一貫していることを意識し、その中で中学校美術科として何をすべきなのかということを考えることが大切になってきます。

これらのことを考え、育成すべき資質や能力を明確にした上で題材を設定するということが、また、作品をつくることや活動を手段として捉え、活動を通して身に付けさせるべき資質や能力の育成を念頭に置き、子供の学びを起点とした授業づくりをすることが大切です。

それらを踏まえた上で、中学校三年間を見通して、表現と鑑賞の関連や、他校種との連携を考えた図的、系統的な年間指導計画の作成などにより、子供一人一人が確かな資質や能力を身に付け、創造活動の喜びを味わうことができる授業となるのです。

◆感性の育成と〔共通事項〕◆

感性というのは、様々な対象や事象からよさや美しさを感じ取る力であり、小・中・高を通して大切にしています。この感性というものは、能動的な活動の中で働くものであることから、子供たちが題材を自分のものとして捉え、主体的に関われるような、授業づくりが必要です。また、感性の育成には、感覚を働かせることも重要になります。中学生という段階では、徐々に頭の中で主題を生み出したり、構想を練ったりする力も身に付けていきますが、見たり感じたりなどの感覚を働かす活動も大切にし、〔共通事項〕と関連させながら創造活動に関わらせていくことが必要です。

その際、形式的に〔共通事項〕を位置付けて授業をつくるのではなく、子供たちと形や色彩、材料、光、イメージなどどのように関わらせていくのかを十分配慮して考えることが大切です。

◆よりよい授業づくりのために◆

中学校美術科の学習指導要領は、豊かな情操を養うことを総括的な目標としています。豊かな情操を養うということを3年間の美術の目指す子供像として、全ての子供たちが創造活動の喜びを味わうことのできるような授業づくりをお願いしたいと思います。

子供たちの学びと成長に寄り添い、一人一人の子供が新しい自分に出会えるような美術の授業を目指してください。これからも美術教育の一層の充実をどうぞよろしくお願いいたします。

高等学校

社会へつなげる分科会

[提案者]

東京都美術・工芸研究会研究部
千代田区立九段中等教育学校

落合 良美

キーワード

自然に表出する自分

◆研究を通して◆「テーマに沿った授業をみんなでつくろう」

授業を作ろうと研究部で決めたのはもう1年半前である。テーマについて話し合いまとめるだけでなく、研究授業を行い、様々な視点で御意見をいただくことで研究を深めることができるのではないかと考えたからだ。研究部で自主的に集まり、話し合ったのは1年半で20回ほどになる。自分たちの実践を持ち寄り発表したり、そこから発想し行った実験的な授業について皆で話し合ったりざっくばらんに語り合うことのできる時間は大変貴重であった。

また、研究会で模擬授業を行い、意見をもらった。厳しいご意見もいただきながら、授業を改善し、3月には、「文字」を使った表現の授業と鑑賞の授業を完成させた。(高校にて研究授業を実施)

また、本大会で中学生を対象とする研究授業を行う機会を得た。これは、我々、高等学校の教員が中学校の美術や中学生を理解するうえで、またとない機会になると考えた。しかし、そのためには協力してくれる両国中学校の生徒達に真剣に向き合い真摯に取り組まなければならない。そこで、3月までにできあがった授業をもとに中学生のための「文字」の授業を新しく作りたいと考えた。提案された授業は2つの中等教育学校で実践し、検討を行った。

一人で授業作りを行うことの多い美術科の教員にとって、このように研究部の皆で真剣に1つのテーマから授業を作り出す過程を経験できたことは、今後の教員生活において重要な経験であったと考える。

◆協議会から◆「学ばせたいこと」と「学びたいこと」

本大会で実施した研究授業は、我々教師が生徒に「学ばせたいこと」を詰め込んだ授業であった。この授業は、生徒の「学びたいこと」を引き出すことができる授業であったのか？という厳しいご意見を助言者の鈴木先生(帝京科学大学)からいただいた。この点は、今回研究授業をご覧いただいた先生方も共通に抱いた感想であったかもしれない。授業を作っている段階で、我々もそれをまったく考えていなかったわけではない。「文字」を使うがデザインの授業ではないという誤解を生みやすい課題にあえて取り組んでいたからである。また、文字の表現の中に自然に表出する自分を見出そうという課題は、中学生には難しい課題であったかもしれないからだ。しかし、あえてそのような視点を中学生にもってもらえたらという考えもあった。その授業に、中学生がもっと自分の発想や思いを近づけることのできる「何か」を加えることができればよかったと考える。しかし、「文字」のもつ魅力を改めて認識した部分も大きい。中学生はレタリングや絵文字といった授業に夢中になった。身近にあり、いつも使っている文字には親しみやすく、きれいに書きたいという欲求もあるのだろう。単にレタリングするというだけでなく「文字」を使った授業にも広がりや可能性を感じることができた。

また、参加されていた国語科の先生から鑑賞の授業での生徒の言葉を引き出すための教員の言葉かけについてや国語科との連携などの提案をいただき、様々な広がりを感じることのできる協議会であった。

「文字でつながる」

▶ 中学校 3年生 A表現(1)(2)(3)、共通B鑑賞(1)ア

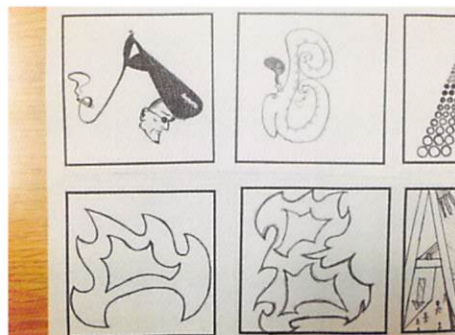
① 成果と課題

今回の授業での最大のねらいは、文字という造形の表現と鑑賞の活動を通して、新しい角度で自己や他者を発見し、理解することであった。授業の1時間目では、まず、オリジナルの「A」という文字をつくる。生徒ははじめこそ戸惑いを見せたが、自由に表現しても良いということがわかると、楽しみながら発想を広げ、個性的な「A」をたくさん生み出した。2時間目にはその「A」をクラス内でシャッフルし、自分に割り当てられた「A」の仲間の「B」を制作する。自分のつくった「A」とはまるで違ったアイデアで制作された作品に興味をもち、それぞれがよく作品を観察して、仲間の「B」を作り出した。授業の最後にはお互いの作品を見せ合う、鑑賞の時間を設けたが、2時間の中でも最も盛り上がる生き生きとした時間となった。

今回の授業の成果として「新しい視点での自己、他者理解」は果たせたと考える。普段、自分の作品については良く見たり、考えたりしても、他者の作品についてじっくりと観察したり、考えたりすることは少ない。感想の中では「Aの工夫を活かそうと考えることで、作品をより良く見ることができた」「自分の作品の特徴がこんな風にとらえられているんだ」と自己や他者についての発見を感じさせる記述が見られた。最後の鑑賞の活動では、予想通りの形に喜ぶ生徒、意外な結果に驚く生徒など、反応は様々であったが、お互いのアイデアや感性を交流する、貴重な機会になったと感じている。

今回の授業で文字を扱った理由は、文字というシンプルな造形の太さやカーブのラインなどに宿る「自分でも気付いていない無意識の美意識(こ

だわり)」について発見してほしいというねらいがあったためだ。しかし、実際の授業で注目されたのは文字を作るときアイデアや発想の個人による違いがメインであり、生徒の想いはその造形へのこだわりまでに至らなかったと感じている。



② 助言者からの講評

助言者の鈴木斉先生(帝京科学大学)からは、厳しく、的確な講評をいただいた。「指導案のねらいを読んで、生徒が楽しめる授業になるのか、不安であった。これは、生徒が「やりたい」授業ではなく、指導者が「やらせたい」授業ではないかと。しかし、実際の授業では、生徒が授業を自分たちの「やりたい」方向に導いた。それが、この授業の救いであった。」今回の授業で私たち研究部は、文字をなるべく「絵文字」にさせず、繊細なカーブや太さにこだわった造形としての「文字」にしてほしかった。その方が、アイデア勝負でなく、それぞれが美しいと感じる造形の個性について注目できると考えたためである。しかし、生徒はそのことよりも、人とは違った自分だけの発想を表出したがっており、そのパワーは私たちが予想した以上のものであった。研究授業を通し、中学生の生徒観、授業をつくる際の姿勢など、多くのことを学び、多くの課題を改めて発見した。

「文字の表情を読み解く」

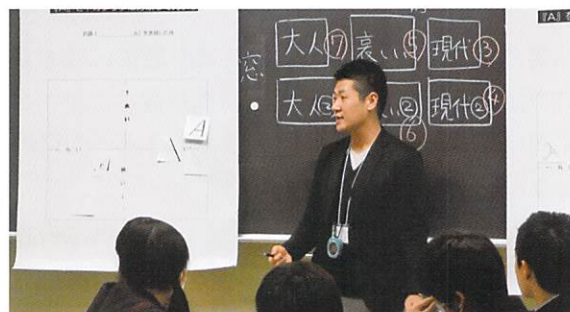
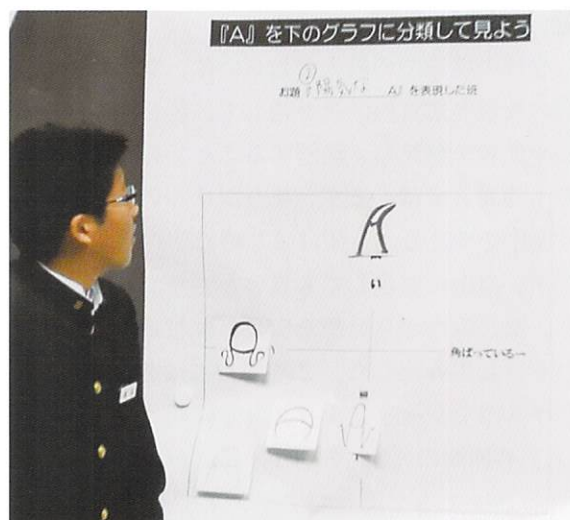
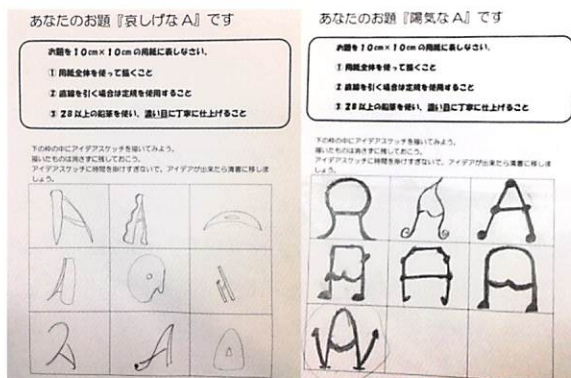
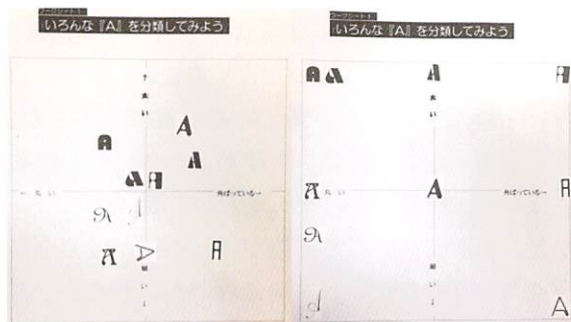
甲斐 健太

▶ 中学校 3年生 A表現(1)(2)(3)、共通B鑑賞(1)ア

1 成果と課題

成果 「A」に表情をつけ、表現と鑑賞をおこなった。与えられたテーマ毎の「A」に対し、具象化に頼ることなく線や比率、角度等にこだわりをもって制作をすることが出来た。鑑賞では、個々のこだわった点や差異を再認識することが出来た。

課題 テーマ毎に、同一の共通点が多くみられる班もあり、他者との差異や多様性が体感しづらいところがあった。生徒自身の形を創造し語ることが本目標であるのに、一般的な形について共通認識をもっただけで終わっただけの生徒がいた。



2 助言者からの講評

普段見慣れた「A」の文字に表情をつける本題材は、生徒の授業への関心を高め、とりつきを良くしている。半面で、鑑賞の授業は、班活動の導入や評価の方法について課題の多い部分もある。

各生徒が、制作した作品の表情を読み解くことを目標に、分類・話し合いを通して気付かせることが重要である。生徒が、何に気付くことが出来るのかを明確になると良い。班活動をさらに充実したものにし、豊かな発想や構想が出来るようにテーマや時間を設定する必要がある。

発表内容

「62の美術の授業実践」

[提案] 秋田県立西目高等学校

黒木 健

[助言] 帝京科学大学

鈴木 斉

[司会] 東京都立桐ヶ丘高等学校

若松由希子

[記録] 東京都立葛飾野高等学校

村上 奈月

① 提案者から

「何」を「どのように」教えること、考えることは美術教師の大切な仕事であり醍醐味である。

そんな授業題材を作るとき、教師のやりたいことを優先してしまうことで様々な問題が生じることがある。「生徒」を出発点にした授業題材の創造を身にしみて感じている。

4月の始め、生徒を知るためアンケートをおこなっている。いくつかの要素で構成されており、統計することでその年の生徒の全体像が見えてくる。その結果を活かして年間カリキュラムを作っている。

また、授業を作るとき、7つの要素を意識する。

- | | |
|------------|------------|
| 1. ユーモア・驚き | 5. 現代美術 |
| 2. オリジナル | 6. 映像視聴能力 |
| 3. コンセプト | 7. 批判的解釈能力 |
| 4. 生活密着 | |

美術を専門としない生徒にも将来必要となるであろう知識や能力を身に付けさせること、それを身近な「もの」や「こと」で行うことを意識している。美術の授業の必要性を語るとき、[考える・調べる・試す] → [作り出す] → [伝える]の流れを大切にしたい。鑑賞においては「科学的な鑑賞」と「自由な鑑賞」と二つに区別して考えている。

その他にも他教科との連携や授業の公開を積極的に行い、教員展では自分の授業題材とその成果を展示している。今まで作った実践授業はインターネットで公開しているので是非見ていただけたらと思っている。



② 指導助言

小学校から中学、高校と上がるに連れ、なぜか美術嫌いを増やしてしまっている現状があることは否めない。教員主導になりがちな美術の題材を、生徒を主役に置いた土俵で、どう考え直すかが問われている。黒木先生の授業は、新たな題材の考え方やこれからの美術の目指すべき形を示している。美術を選択してくれた生徒全員に、美術本来の「楽しさ」と「達成感」を感じさせ、創作エネルギーを喚起させる授業なのである。



パネルディスカッション「創造的な生活者を育てる造形美術教育」

【モデレーター】大坪 圭輔（武蔵野美術大学）

【パネリスト】西尾 隆一（熊本市立藤園中学校） 小野征一郎（千代田区立九段中等教育学校）
黒木 健（秋田県立西目高等学校）

【編集】長島 春美（東京都立田柄高等学校）

大坪：午前中の二つの研究授業を踏まえ、都高美工研の研究をベースに、これから先の高校教育のあり方を探る、それは小学校中学校の教育のあり方も探るということ。パネリストの話聞いた上で、参加者全体で考えていきたい。「社会へつなげる」という大きな分科会テーマを受けた上での「創造的な生活者を育てる造形美術教育」について考えを伺いたい。

小野：中高一貫校で中高両方の生徒を見ている立場で話す。生徒自身が自分のやっていることを肯定的にみられるような体験や、人との関わりを大切に思えるような活動を増やしたい。多種の素材を使う、制作した作品のプレゼンをさせる、制作したら必ず鑑賞させる、人に贈る作品をつくり相手から贈った作品の感想を聞かせる、家庭科で制作した物に加飾するなど他教科とつなげる、近隣の幼児と造形遊びをする等地域とのつながり、全員の作品を廊下に展示し中学生に将来の見通しを持たせ、高校生に中学生の作品に助言させ、中高生徒間の情報交換を図る等々の工夫をしている。その中で、子ども達は認められたいのだということを強く感じる。自信をもって表現するために人に認められる場所が必要。普通校に一人で自分の考えだけで授業をしていた時に比べ、九段では、TTで協力して授業を改善していける。研究会でも今回のように協力して授業を創れる。子ども達にも積極的に他人と関れるようになってほしい。

西尾：クマモンというデザインがどうして日本全国を暖かい気持ちにしていけるのかは重要な視点。子ども達が美術室に行くのが楽しいという先生になりたい。例えば、熊本空港で飛行機が太陽と正対している写真、天皇陛下の前で踊るクマモンの写真、クマモンのデザインの有効性など自分の発見やアニメの話など、色々な分野で子ども達と情報交換している。熊本の中学校では熊本城で写生大会があり熊本城に親しみ、それが市民運動とつながっている。熊本城での「水明かり」という催しは市民全体がボランティアなどで参加する。みんなで美しいものを作っていこうという心がある。こういうのが大切なのではないか。

黒木：畳屋職人の息子だということが自分の創造性、物づくり経験のベースにある。家の新築では最後に畳を入れて完成するので、手伝いにいくと施主が喜ぶ顔を幾度となく見てきた。自分の経験で一番長く続けてきたのは小学校から始めた音楽（ホルン）。指揮は小澤征爾に手ほどきを受けた。生徒対象の観点別評価の対象を逆転させて自分に課しているのは「生徒や授業実践への関心、意欲、態度があるか？美術の授業の創造活動を喜び、味わい、生徒や美術文化に関心を持ち、題材設定における発想や構想や能力があるか？実際の授業における創造的な技能があるか？生徒や授業実践への看取の能力があるか？」の4観点。これができていれば授業力も上がっていくと思う。「創造」をキーワードに売れ筋の本を集めたら美術の話はほとんどなく、世間では美術の創造性は眼中にない事が衝撃だった。しかし、世間では「創造」の意味が「考え、調べ、試す」中心であるのに対し、美術では「作り出し、伝える」までを含むと考える。多くの仕事が分化されている社会で、「全て」を体験できる最後の砦として美術の価値をみる。美術の創造活動には「造形遊び的な、いろいろ試しながら獲得する」と「一直線に（論理的に）目標に向かう」という二つがある。これは研究や論文などのアプローチにも当てはまり、それらを図工美術で体験できるのは利点だと考えている。

大坪：午前中の研究授業の協議会で、「社会につなげる」には「自信を持たせること」が大切で、その為に「自己理解」が必要と分析して取り組んだと報告された。それに関連して、小学校にはあまりなく、中学校で急増するのが「自画像」の実践。題材論の始めに「自画像」の実践について聞きたい。

小野：中学生は恥ずかしがるのでやらず、高校生最後（1年生）の作品として、自分を見つめ、今の気持ちを表現する課題として、中学から学習した表現技法、素材、から自分で選ばせて行なう。すると表現の幅がものすごく広がる。一生懸命取り組み楽しそうにやっている。

西尾：一番心の動きを言葉で表現することができる中学3年生で取り組む。生徒作品1万人分のデータベースが載っているwebこども美術館を導入に使う。自分の顔を直視できない子もいる。自画像は映像だけでは良くない。今の心の状況をどのように描こうか、どう思って描いたのかなど言語表現を同時進行させる。この作品の生徒は自分の顔にあまりいい感じを持っていなかったが、いつの日か絵を描いて生活の糧にできないかと、そんな思いで筆を持つ姿を一生懸命描いた。絵だけではそれを知ることとはできない。

黒木：自画像を描かせたことはない。選ぶことの中に表れる自分があると考え、「自我物」として選んだものを黒木に郵送させる。その時に作品と共に、①それを発想した理由 ②郵便局でのやり取りの図解 を添えて展示する。

フロア：●高校1年生は自画像を嫌がる。「私の好きな言葉」や「私の素朴な疑問」を選んだ理由などの言語表現と絵画表現を一緒にさせる。●高校2年生の最後に修了制作として自分は今、どこにあってどこに行くのか？を題材にF10号で制作。切って立体

にしてもよいという設定。●自画像を（鏡を）正面から見ではやらせたくない。違う角度から見してほしい。

大坪：「開かれた個」について考えを聞きたい。

西尾：全校で使う生活ノートの表紙に生徒作品を使う。自分の作品を通して自分自身を表すことができる。2年生では、「過去から未来へ」の題で、主人公は自分になるように設定しなさいとは言えないが、したほうがいいよと促す。自分の心の動きを、文字と映像で表して自分の心を読み取り、自分に気づいていくという授業。

小野：作品評価を生徒同士や、先輩後輩、保護者などで行い、作品に対する色々な視点、評価があることを知り、生徒一人ひとりが認め合うと、素直な表現が可能になる。文化祭で生徒がプレゼンしている授業を放映したら、保護者、他教科の先生から反応があった。こういう場づくりを様々なところでやりたい。

大坪：今日の午前中の二つの授業も、互いに発見したことを認め合うということがポイント。その発見を「Aの字体からBを作らせる」、「Aの字体を分析させる」という二つの方法で促していた。今日は作ったり描いたりがほとんどなく話し合いばかりだったという感想があったが、これは一つの時流。美術の授業は、個別指導が最も重要だった段階からクラスや集団での授業に少し変わりつつある。考えどころだ。

黒木：「自分探し」や「個の関係」というキーワードと「創造」との結びつきから考えると、他教科などから美術は何もないところから生まれるイメージを表現しているという誤解があると感じている。何もないところから作ることが意義深いとか、それを求めがちだが、実はイメージというのは他（外）との関係をきっかけとして発生することが多く、それを上手に生かすことが創造的な活動の一つの重要なものと認識している。

大坪：自己中心的な作家も今やギャラリートークをすることが通常になった。わかりにくいトークでも、それを聞くと鑑賞者の作品理解が深まる。それは言葉によって作者と鑑賞者の関係性が新たに展開するからだ。美術の授業における言葉というのは実はそういう働きをすると思う。人と人との関係性を言葉によって新たに展開していき、そこに介在する作品も違った意味をもってくるというふうに考えている。

フロア：●幼児教育の学生の紙コップと紙皿で構築する授業で、個人制作、グループ制作、そして全グループの共同制作と進めるうちに変化がおきた。共同制作の中では自分の意思と他人のやり方に葛藤がおこるが、段々他者を注視し、自分を開いて他者を受け入れ、自分自身の変革につながっていく。●高校生は自分を開くことを怖がる。それを克服する方法として暗闇の中で活動させるという方法が有効だ。協力が必須となり、恥ずかしさを越えて身体が開かれることで個も開かれる。健常者よりも視覚障害者の方が頼りになるという日常と逆転する場になる。この教室ではどんな表現でもできるという基礎ができた。●同級生から自分のイメージを聞き集め、それを元に自分を考え、表現するという実践を知っている。他者から見た自分のイメージを自分に還元していく題材。

大坪：個を開く上で「身体性」は重要なキーワード。自分を大切に、他者と共に自分を開いて共に行動できる人材の育成が求められている。他者の存在を知らせ理解させることも美術科として大切な使命。

我々は、美術の教科性として個人の個性や人格という、生徒が生きている根幹と深く付き合っている。一度関係が壊れると修復するのは大変で深刻。そういった、心に残る失敗例を話してほしい。

小野：ドラえもんのような自画像しか描けない女子高校生に、「ちょっと違うんじゃない？」と声をかけたら、それ以来、嫌われて、人間関係がひきつれて、フォローしても回復できなかった。

西尾：屏風に一文字ずつ入れようという題材で、「犯」の字を書いた生徒がいた。禁句は予め決めて知らせていたが、犯は予想外で禁句に入っていなかった。説得し切れなかった。

黒木：美術に優れた生徒たちを後押ししたが、芸大などを卒業した後の音信が途絶えるなどの場合がある。美術は魅力もありすばらしいが、結局、その生徒たちにとって美術の進路が相応しいものであったのかと思う例がある。

大坪：通常の美術ⅡⅢの科目の中で育つ力をもって子ども達はどう生きていくのかを考えると、それを一般論で語ることの危うさがある。今の話のように我々の教育は、まさに現実。私たちは、一人一人家庭環境も違い、感性も違い、親もまた違う考え方を持っている子ども達を相手にしているという視点を持った上で、社会へつなげる、そのために自信を持たせ、自己理解を深めさせる指導はどうあるべきか、ということを考えたいということでこの質問をした。最後に、社会につながるということ考えた時に、子ども達にどういう生き方をしてほしいか、どういう願いをもっているかご意見を伺いたい。

小野：今日は他教科の先生の話を始め、とても刺激になった。研究授業で欠席した生徒の代わりに授業を受けた先生の感想を聞き、気づいたこともあった。生徒に対して他教科と一緒に、大人たちがみんなで育てていくことが大切だ。一人の生徒が多面的に評価され、失敗してもまた次の道を考えられれば、挑戦しやすくなり世の中も変わってくる。

西尾：隣の人の顔が見える授業、自分の居場所を確認できる授業を組み立てていきたい。他者の思いを感じ取りながら考えること、共同でつくっていく美術教育。大きな絵を描くことは、社会に出て描く人生そのものではないか。

黒木：つながる、広がる、学びあう、それには発信が必要で、思い込みからの解放がある。自分自身が変り向上することを通して生徒を変えていくことができる。他教科とのコラボや職人さん等との異業種交流も大切な機会。

大坪：「創造的な生活者を育てる造形美術教育」の条件は、まず我々が創造的な生活者であること。そして私たちは一人ではない、美術教育のことを真剣に考えている仲間がたくさんいる。それが不可能を可能にすると考える。（了）

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

特別支援学校

特別支援教育分科会

[ワークショップ]
東京都立府中けやきの森学園
石丸 良成

キーワード

感覚を拓き感性をみがく、ダイナミックな活動が人間の成長の基になる

素材を探索し、自分の世界を表現する

◆はじめに◆

特別支援学校の児童生徒は、活動に入り込みにくいものを持っている。それは、視覚や聴覚の刺激を上手に絞れない注意焦点機能の障害であったり、逆に感覚刺激が過敏で、苦手な音域や泣き声などで、耳を押さえ、嫌な思い出をフラッシュバックしてパニックになることもある。発達過程で、未熟差がみられ、絵を描くことに劣等感を抱えている場合もある。脳と情動機能に問題を抱えているが、手元を見ていなくても、運動感覚で画面の位置をとらえている。過敏であるイコール嫌いなのではなく、好きな音や色の刺激を求めている。身体の運動によって、光や音の刺激を受け入れ自ら展開する力を秘めている。感覚が拓き熱中することで心が解放され、新鮮に自分のスタイルを探し求められる。

◆授業実践の発表◆

ライトドローイング



カラーセロファンを巻いたLEDライトを手を持って、シャッタースピードを遅くしたカメラの前で、15秒～30秒間撮影した。○△☺♡丸や三角、顔の形をスライドで練習してから撮影したり、音楽に合わせてライトを動かしたり、友達のポーズをなぞって撮影したり、いろいろな動きを光の軌跡として表現することができた。最後に体育館で、学年全員でライトを持ち、ゆっくりと、はやり音楽にあわせて、ダイナミックな動きで作品を制作した。(石神井特別支援学校 海老沢穰・高橋真吾)



ワークショップ

ブンブン糸デンワは、紙コップに絵を描き、紙コップと木の棒に絹糸を取り付け、糸と棒に松やにを塗って擦り合わせると上がりである。ぐるぐる回して「ブンブン」音を出し、試して遊んだ。



美術と陶芸の授業実践と音遊び道具

陶芸では、粘土を平板にして木型に貼りつけ、丸い家や鈴の形に成形し本焼いた。土玉や木球を付け陶鈴にした。木や竹に空き缶を取り付けギターの弦を張った音遊び道具を展示し遊びを体験した。ゴムマレット打ちつけた「リズムの絵」や「糠糊の染め布」を展示した。

(府中けやきの森学園 石丸 良成)

◆作品展示◆

「転がし絵とスタンプ絵」



身近な素材や野菜を使ってスタンプした。ビー玉とくるみなどに絵具を付けて容器の中で転がした。偶然の軌跡や運動で意図的な軌跡を描き楽しんだ。線が重なり色鮮やかな造形を楽しんだ。

(府中けやきの森学園 小学部低学年)

パウチッコアート

パウチッコにトレーシングペーパーやカラーダックを切って貼りつけパウチッコで焼いた。透明のコーラージュをした。(府中けやきの森学園 小学部高学年)



パルプアート

色画用紙をシュレッダーして、ミキサーで細かくしてパルプにし色々なパルプを円や四角のカードに盛り付けて構成した。

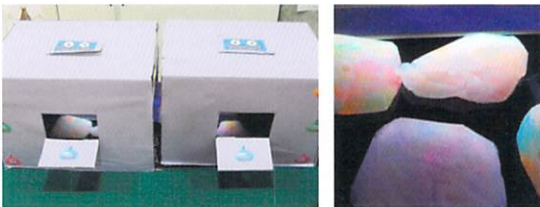
(府中けやきの森学園 中学部)



銅板の鍛金

銅板のしたに雑巾を敷いて金属ペラやナイフやスプーンで刻んで素材を加工した。酸化させたり、油性マジックやアクリル絵の具で着色した。

(府中けやきの森学園 高等部)



ピカピカ光るスライムアート

洗濯糊にホウ砂と光る絵の具を混ぜ、素材の感触を味わいながらかたまりをまとめてつくりました。ブラックライトのボックスに納めて輝かせた。

(江戸川特別支援学校 中学部自立活動の学習グループ)



ガムテープ彫刻

修学旅行で行く彫刻森の事前学習をかねて作りました。紙の芯や新聞紙を芯にしてガムテープを巻いて形を組み合わせた。シートを使って、作りやすくした。(調布特別支援学校 中学部)

◆まとめ◆

光や音の刺激、運動感覚、手や皮膚の刺激は、気持ちを喚起する。光と音の刺激や色と形の変化が、自発的な行為や運動を引き出す。手や皮膚は、露出した脳と言われる程、心をつかさどる脳に最も近く脳を活性化する。行為に熱中すると、心が解放され心のスキンシップになる。視覚と聴覚の刺激が自分の行為と重なり合い、内発的なコミュニケーションの基本をつくる。周囲の人と空間に共感の輪が広がり、外発的な動機を高める。自分なりの形象を創り出し、自分の創意が実現し能力を発揮することで、生きる力の自信につながる。感覚を拓き感性をみがく、ダイナミックな活動が人間の成長の基になる。

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

大学・美術館

大学・美術館分科会

武蔵野美術大学

三澤 一実

キーワード

連携でつくり出す美術の授業

◆研究を通して◆

本大会は大学部会においても記念すべき大会となった。それは、中学校の公開授業の指導者として、事前から授業作りに関わりアドバイスをを行うことが出来たからである。この連携は、今日の美術教育を現場と大学の研究レベルでつなぐものであると共に、これまで不足してきた新たな連携をつくり出すものとして注目できる。

大学教育はかつてのような教員養成機関として機能することから、今日のように教師にとっての更新講習や研修機関として学校現場との連携が期待されるようになってきた。このような状況において大学部会のあり方を問うと、ここ数年間の大学部会の懸案事項はいかに全造連との関係を再構築するかであった。その具体的な形を今大会で研究助言として実現できたことは大きな一歩なのである。この研究助言者という立場は、全造連大会が平日の勤務日に実施されるのに対して、大学の教員は近年講義時間数の管理の下、なかなか休講をして出張できない状況になってきている。この大会出席の障害に対して、事前に大学教員が中学校を訪れたりしながら、またはメールで都合が付くときに中学校の研究授業の指導に関われる体制が、新たな関わり方として機能しやすいのである。

美術館部会としては、複数の美術館が連携して授業づくりに関わることは今までになかったかのように思う。今回の美術館部会では、公開授業への取り組みを通して、具体的な美術館間の連携が生み出せたことが何より大きい。全造連美術館部会の一つの可能性として、鑑賞授業の共同開発は特筆出来よう。また、学芸員、大学教員、また企業が中学生を対象に授業を行うことも全造連始まって以来の出来事では無かるうか。見学していただいた人には、実際に大きなレプリカを使った授業や、タブレットを使った鑑賞の授業、具体的な映像制作など、挑戦的な授業を見ていただけたと思う。

◆協議会から◆

当日の大学・美術館部会では、聖徳大学の北沢昌子先生と山梨大学新野先生、東京都美術館の稲庭さんの発表が行われた。いずれもこれからの教育のあり方を示唆する具体的実践による報告で興味深いものであった。北沢先生は大学生と市教育研究会図工部会との連携実践。山梨大学の新野先生は、自らの大学の授業の見直しを、卒業生からの聞き取りで振り返る取り組みを紹介。稲庭さんは、大学との連携で行っているトビラーの報告を行い、参加者は興味深く聞くことが出来た。

大学と美術館の共同企画として行ったシンポジウムは、午前中の公開授業とからめ、大学、美術館、小中学校との連携を具体的に掘り下げるディスカッションまで到達したように感じる。連携という一つの課題を、時間をかけてじっくりと話し合う機会が少ない今日、有意義なシンポジウムになった。これからも大学部会・美術館部会らしい企画に取り組んでいきたい。

→校種、領域、創造的技能、材料、共通事項など 「時間を操る」

▶ 中学校 3年生 A表現（1）

① 成果と課題

この授業はテーマに設定したように「時間を操る」ということに対し、映像表現を使うというスタンスで臨んだ。授業デザインとしては、まず最初に映像サンプルを鑑賞することで（写真1）、これから行なうワークのイメージを作ると共に、映像から何を読みとっているかを生徒に質問することで確認。その後、デジタルカメラでの撮影（写真2）を行ない、最後に自分たちの作品を他者に評価してもらうという流れであった。対象の中学生は質疑応答のレスポンスが良く、撮影段階に至ってはすぐさま行動に移し、イメージをグループ内で共有しながら進行していくのには眼を見張った。各グループにサポートでついた学生のフォローも大きい。今回は50分という限られた時間であったため、学生の協力を得ることにしたが、中学生だけでもおそらく可能であろう。撮影後PCに取り込み、グループ内で出来映えを確認した。ここで成果をすぐに見られるのは重要である。見た瞬間に笑いや嬌声があがるが、繰り返すうちに、イメージしていたことと作品とのギャップ、思わぬ発見、改善点の指摘などが言葉として出て来た。映像が時間の芸術であることを実感できたのではないだろうか。全体鑑賞は自分たちの班以外で気に入った作品にポストイットを貼る（記名式）という個人評価とした。評価の高い作品のPCにはポストイットが多量に貼られているため一目瞭然である。まとめとしてそのうちの何枚かをピックアップし、なぜ評価したのか

を数名の生徒と対話した。この学習のポイントは反復にあるため、連続で2回行なうと効果が出ると考えているが、あえて時間を置いて冷静な眼で作品を見るということも良いだろう。もちろんその後、新たに作品を作ることが必要である。



写真1 ピクシレーションの説明



写真2 校庭に出て撮影をする生徒たち

公開授業《連携・つながりのポイント》

[授業者]

ルーヴル-DNPミュージアムラボ

原瀬 裕孝

タブレット PC を活用した鑑賞授業

「学校をルーヴル美術館にしてみよう」

▶ 中学校 3年生 B 鑑賞

① 実践の成果

1 クラスを6班に分け、約20分間ARタブレットを用いて校舎内に美術作品を設置するワークを行った。各班のプレゼンテーションからは、生徒たちが作品からさまざまな意味を見つけ出し、試行錯誤の中から最もふさわしい場と関連付けたことが伝わってきた。鑑賞は個人的なワークであると同時に、あらたな気づきを創発する触媒ともなる。今回の授業はその端緒を経験させたにすぎないが、デジタルツールが効果的なコミュニケーション形成の核となった。提供された道具への興味が、提供される内容への興味を喚起させ、美術に興味の無い生徒にも自発的な発話を促したといえよう。



導入ガイダンス



ARを用いた作品の設置



作品展示シミュレーション（各班の結果）

② 今後への課題

今回は、時間的な関係から生活班をベースとした1グループ6人構成でワークを行った。役割分担を交代しながらもう少し小規模なグループで実践すれば、さらに親密なディスカッションが誘発できたであろう。また、体験が面白いだけに、扱った美術作品の文化的な背景にまで興味を持続させることはなかなか難しい。グループ間の情報・体験の共有に十分な時間をかけるとともに、生徒の中に起こった変化や成長を確かめることのできるツール機能を再考することも、効果があるだろう。

公開授業No. 28

日本の美 —金色の光と空間デザイン

▶ 中学校 2年生

[授業者]

三井記念美術館 亀井 愛
東京都美術館 熊谷香寿美

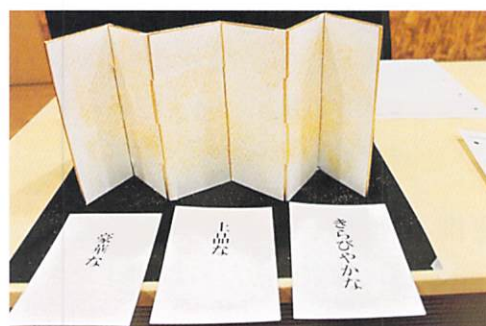
① 授業をふりかえって

今回の授業では、「金」と身近な「光」に着目し、実際に金箔を使った砂子蒔き体験の後、尾形光琳筆《群鶴図屏風》（高精細複製画）を鑑賞する2時限を展開。活動は次の3ステップで行った。
①金の素材を鑑賞②金の素材を蒔く体験③金色の光と空間を意識し本物の屏風を鑑賞。また、生徒にとって非日常である日本美術の世界を視覚的体験的に伝えるため、職人が金箔をつくる様子を動画で紹介、屏風の構造がわかるミニ屏風を使用、蠟燭のように揺らぐ光のLEDランプで3種類の金色や屏風を鑑賞、畳を敷きその上に座って屏風を鑑賞した。さらに、鑑賞では「光を表す言葉」をカード化し活用する等の言語活動を取り入れた。こうした展開により、生徒の屏風鑑賞は素材体験とつながった、「金」や「光」の視点が入る深いものとなった。それは次のような生徒の言葉からも伺える。

- ・金箔の貼り方によってその場の空気の流れるを感じる。（鑑賞時の言葉）
- ・金と言えばキラキラでまぶしいイメージだけでしたが、光の当て方や種類でとても優しいイメージにできるんだなと思いました。*



「光を表す言葉」を金箔（砂子）で表現



上：光を表す言葉カードと完成したミニ屏風
下：畳に座って鑑賞

- ・本物の屏風をみた時に四角い線が見えた。前回教えてくれたことが確かめられたからよかった。自分が想像していた金の色と違ったからびっくりした。*（※2回の授業を通じた感想）

② 成果と課題

成果としては、本大会趣旨である「連携」が館種の異なる2つの美術館と学校で具体的に実現できた点である。また、生徒の様々な言葉を残せたことも成果と言える。課題は担当教員と指導目標を共有したプログラム策定ができなかった点である。さらに深い連携の実現のためには、学校と美術館の両者による協働が必要であると考え

シンポジウム

キーワード

連携でつくり出す美術の授業

〔モデレーター〕	三澤 一実	武蔵野美術大学
〔パネリスト (音順)〕	伊藤 達矢	東京藝術大学
	亀井 愛	三井記念美術館
	熊谷香寿美	東京都美術館
	原瀬 裕孝	ルーヴル - DNP ミュージアムラボ
	平谷美華子	東京富士美術館
	米徳 信一	武蔵野美術大学

◆公開授業の振り返り◆

美術館・企業・大学、それぞれが中学校と連携してつくりあげた公開授業について、各授業者より内容の振り返りの発表をしました。参加者はここで、各機関が連携して行った3つ全ての公開授業の概要を聴講し、共有することができました。



◆連携事例1・東京都美術館◆

東京都美術館と東京藝術大学は連携しながら、子どもたちのミュージアム・デビューを応援する「Museum Start あいうえの」を今年度より始めました。先生と子どもたちがそれぞれ、公的な学習施設である美術館の使い方を知り、学びの多い実りある体験ができるプログラムを、アートコミュニケータ（とびラー）という市民と共に行っています。休館日の展示室で行う「スペシャル・マンデー」は事前準備から先生と相談し、当日の体験が充実したものになるよう連携しています。

◆連携事例2・東京富士美術館◆

都心から離れた多摩地域の私立の美術館という観点で事例発表をしました。主には2008年に増築し、ルネサンスから現代までの常設展示室が完成してより、学校利用を増やす取り組みを発表しました。具体的にはアートカード、対話型鑑賞、五感で観る手作りワークシート、市内小中学校を中心とした鑑賞バスの運行、大学との連携授業等を紹介しました。



◆グループディスカッション◆



午前中の連携を含んだ3つの公開授業とその振り返り、そして2つの連携事例の発表を受け、午後は5～6人の小グループで「連携の意義」「教科としての美術の意義」等についてディスカッションをしました。各グループにはパネリストがファシリテータ（進行役）として入り、畳上でミニ車座になり、自由な雰囲気の中、率直に意見交換をしました。各グループ共に、核心に迫る有意義な時間を共有できたようです。

◆モデレーターとパネリストより感想◆

三澤 一実（モデレーター）



美術館と学校の連携を模索する上で、物理的障害は話題にするつもりはなかった。そもそもその障害を乗り越えないと連携は生み出せないと感じていたからだ。予想どおり参加者から、「近隣に美術館が無い、時間が無い、お金がない、だからできない」という発言が飛び出した。「当たり前じゃないですか。できませんよ。」今回のディスカッションは、そこからスタートできたのが幸いであつた。だからどうする。その話題を参加者自身が真剣に、且つ刺激的に話し合えた事が何よりの収穫だった。

伊藤 達矢

学校教育での「美術」は、「みる」にしても「つくる」にしても、昔から人々が大切にされてきた「考え方」や「価値観」を、作品を介して生徒たちと共有できる教科だと思います。それが地域のミュージアムや大学と連動できれば、その本質はさらに深められるのではないかと感じます。

今回のシンポジウムのテーマであった「連携でつくりだす美術の授業」では、美術館、大学、中学校、企業などから多くの関係者が集まり、それぞれの視点で活発な意見交換が行なわれました。こうした交わりの場こそが、意義のある教育の姿勢を育んでゆくのだと実感できた会でした。



亀井 愛

シンポジウムでは、参加された方の多くが現場での豊かな経験を持ちながらも、それぞれの環境で苦心されており、学校・美術館・大学・企業という様々な立場から「美術」について「連携」について、活発な意見交換が行われました。全員で、またグループにわかれ、考え、共有し深めることを繰り返した2時間半だったと思います。各地に戻られた参加者の方々が今後更に充実した実践を築き上げていかれますよう、私も取り組んでいきたいと思っています。



熊谷香寿美

本シンポジウムでは、学校・企業・大学・美術館からの参加者が「連携する意義は何か」という問いを各自模索しました。立場を異にする方々と議論するため、意義に立ち戻るだけでなく、連携した美術の授業の実践の先にあること、つまり、子供たちに連携授業を通じてどんな体験をしてもらうのか、さらには成長した子供たちとどんな社会を作るのか、といったことを改めて考えることができました。社会と主体的に関わり、自らの価値を表明し、他者と対話しながら新たな価値を作り出していく。そんな次世代を育成することができるのが、美術の力であるということを認識しつつ、今後も先生方を始め他機関と共に連携実践に取り組みたいと思います。

原瀬 裕孝

社会は常に変化し続けています。社会の変化は、それを構成する自立性と多様性をもった個人の考えや行動の相互作用の結果として現れます。そして、美術は個人の価値観が尊重される重要な役割を担う教科です。美術館、大学、企業がそれぞれの手法で「美術の授業」にアプローチしてきました。次の世代の社会を担う生徒たちに、他者との相違や共通点に気づき、多様性を体得してもらうこと。これは、学校の先生方が常に教育として実践しているものと全く軌を一にするものです。その目指すところは「より良い社会を創ること」に他なりません。今回一緒にさせていただいたことで、自分自身この新たな「気づき」を得ました。

平谷 美華子

様々な経歴の参加者と価値観を共有しながら意見交換をした今回のシンポジウム。その小さな車座の中は熱気に包まれ、大きな力が溢れてくるのを感じました。これも小さな「連携」が生んだダイナミズムだったのではと回顧しています。「連携」により私たちは、自他の価値観の尊重の上に成されるモノ・コトを体験できます。そしてそれらは、時にダイナミズムを生み、授業を一層有意義にする可能性に満ちています。多様な価値観と向き合いながら生きる子どもたちを思うと、「連携」を実践できる美術という教科の重要性はいや益して高まるに違いありません。これからも私自身、様々な連携に挑戦し、いよいよ現場に社会に還元して参りたいと思います。



[illegible]

研究の歩み 規約 名簿

全国造形教育研究大会のあゆみ

回数	年 月	会 場	大 会 主 題
1	昭 和 23. 10	一 宮 市	図画工作教育の根本理念の討議と解明
2	24. 10	京 都 市	図画工作教育振興の具体案如何の協議
3	25. 9	広 島 市	図画工作における評価の実際
4	26. 10	福 岡 市	鑑賞教育、全国児童図画工作展
5	27. 10	金 沢 市	生活と美術、全国児童生徒図画工作・作品展
6	28. 11	大 阪 市	指導要領の検討
7	29. 8	仙 台 市	指導要領ならびに指導内容の検討
8	30. 11	東 京 都	現下の図画工作教育を阻むものは何か、改善策
9	31. 8	札 幌 市	造形教育において、つくりだす力を養うにはどうすればよいのか
10	32. 10	松 山 市	現代日本の図画工作教育の反省と今後の方向
11	33. 10	長 野 市	図画工作科の本質を再検討し今後の対策をたてる
12	34. 10	神 戸 市	図画教育の実情を明らかにし、その新しい建設へ
13	35. 8	神 奈 川 県	生きる喜びの基をつくり出す造形教育
14	36. 11	別 府 市	いきいきとした生活をつくりだす造形教育
15	37. 10	富 山 市	人間づくりの造形教育を確立するために
16	38. 8	東 京 都	科学と美術教育、伝統と美術教育、原理と方法
17	39. 11	宇 都 宮 市	造形教育の実践をととして、豊かな個性を育てる
18	40. 8	東 京 都	第 17 回国際美術教育会議東京大会の内容に包含されておこなわれた
19	41. 10	盛 岡 市	たくましい創造力を育てる造形教育の実践
20	42. 10	新 潟 市	人間形成をめざす造形教育の現実的課題と解決策
21	43. 8	高 知 市	造形教育の今日的課題を究明し、ゆたかな感性とたくましい表現力を育てよう
22	44. 8	那 覇 市	造形教育を風土の中でどのようにいかすか
23	45. 10	秋 田 市	ほんとうの美しさをつくりだす授業をもとめて
24	46. 10	静 岡 市	たくましい創造力を育てる造形教育
25	47. 11	東 京 都	未来を指向する美術教育は何か
26	48. 10	京 都 市	わが国の造形教育の今日的課題は何か
27	49. 10	和 歌 山 市	子どもと共にあゆむ造形 ―ゆたかな発想をもとめて―
28	50. 10	山 形 市	ゆたかな心情とたくましい創造力を育てる造形教育
29	51. 6	東 京 都	緊迫した教育課程改訂にどう対処するか
30	52. 7	札 幌 市	みずみずしい中身でしなやかな子どもを育てる造形実践
31	53. 10	埼 玉 県	造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか
32	54. 10	仙 台 市	豊かな創造力を育てる造形活動を求めて
33	55. 7	愛 知 県	自らつくりだす喜びを育てる造形教育
34	56. 6	長 岡 市	生きているあかしの表現
35	57. 11	佐 賀 県	創り出すよこびを求めて ―日々の実践の中で、今日的課題を探る―
36	58. 11	東 京 都	独自性を見なおす ―国際的視野に立った発展する美術教育の今日的課題―

37	59. 10	長野県	心おどらせてとりくむ造形
38	60. 10	奈良県	明日に生きる創造力の開発をめざして
39	61. 8	旭川市	子どもの心をゆり動かす造形教育 ーつくる心の広がりと深まりを求めてー
40	62. 10	千葉県	子どもの心を掘り起こす造形教育
41	63. 11	愛媛県	心ときめき、ひびきあう美術教育
42	平成 1. 8	青森県	子どもの心に創るよろこびをひきおこす造形教育 ー豊かな感性と、うるおいのある表現活動を求めてー
43	2. 11	熊本県	よろこび・いきいき造形教育 ー自己表現に心ふるわせる子どもを求めてー
44	3. 7	東京都	審美教育と英知
45	4. 11	京都府	新たな時代をきり拓く造形教育
46	5. 8	沖縄県	21世紀に向けての造形教育
47	6. 11	神奈川県	いま、さらに 豊かな感性・創造のよろこびを
48	7. 11	長野県	いのちにふれる造形活動 ーつくるよろこび自分らしさの表現を求めてー
49	8. 10	東京都	人間・表現・環境
50	9. 7	東京都	造形美術教育の再創造
51	10. 8	東京都	人間・造形美術・教育 ー造形美術教育の再創造ー
52	11. 8	埼玉県	自分“彩”発見 「自分さがしの旅」をしつづける子どもの造形活動
53	12. 8	静岡県	開く造形教育に 生き生き交流
54	13. 9	北海道	<いま><ここ><わたし>を基軸にして造形の未来を創る
55	14. 8	沖縄県	南風にのせ ! 手・目・心の万人(うまんちゅ)の造形教育
56	15. 11	東京都	「人間・造形・成長」 ー造形美術教育を問い直すー
57	16. 8	福島県	「ほんとうの空のもと ほんものに出会う瞬間」ー自分いろの造形活動を求めてー
58	17. 11	神奈川県	つくり続けるよろこび、それは生きるよろこび ー色と形のメッセージIからWEからー
59	18. 11	長野県	私っていいな!! “いろ・かたち”生きあい学びあい
60	19. 11	熊本県	夢と勇気と感性とー 未来を拓く造形教育の可能性を求めて ー
61	20. 8	大阪府	こころの歓びを広げる教育美術のこれからー変えるもの・変えざるもの・教育原理の再構築へー
62	21. 11	千葉県	きらめく感性 ときめく思い うみだせアート
63	22. 8	福島県	「つくる喜び、みる感動!! 子どもの今と未来をつなぐ造形教育」 ー連携を大切にしたいこれからの造形教育を求めてー
64	23. 7	北海道	“わたし”を創る ー 自立と共生の造形教育をめざして ー
65	24. 8	沖縄	ティーンズ - 太陽の島から発信する造形教育 -
66	25. 11	東京	造形美術教育のダイナミズム - 成長と連携 -

全国造形教育連盟規約

- 1 (名 称) 本連盟は、全国造形教育連盟と称する。
- 2 (目 的) 本連盟は、全国造形教育の振興をはかる。
- 3 (事 業) 本連盟は、上の目的を達成するために、次の事業を行う。
 - イ 各加盟団体及び各学校種別部会間の研究の交流、その連絡を行う。
 - ロ 毎年1回大会を開き、研究ならびに必要な決議を行う。
 - ハ 目的を同じくする他の国際的機関および国内的機関団体等との研究の交換、その他の連絡を行う。
 - ニ その他本連盟の目的達成に必要な事業を推進する。
- 4 (組 織) 本連盟は、各都道府県の造形教育団体をもって組織する。
- 5 (機 関) 本連盟に次の機関をおく。
 - イ 決議機関として代議員会
 - ロ 執行機関として本部役員会
- 6 (代 議 員 会) 代議員会は本部役員ならびに代議員を以て構成し、毎年1回委員長の召集により大会会期中に行う。代議員は各都道府県の代表7名とする。
- 7 (本部役員会) 本部役員会は、委員長1名、副委員長3名、事務局長1名、学校種別部長各1名を以て構成し、必要に応じて委員長が召集する。
- 8 (役員の任務) 委員長は本連盟を代表し会務を執行する。副委員長は委員長を補佐する。部長は学校種別に必要な事業を推進する。監査役員は2名とし、会計の監査にあたる。
- 9 (役員の選出任期) 委員長、副委員長、監査委員は代議員の互選により選出し、任期は2ケ年とする。
- 10 (事 務 局) 委員長のもとに事務局をおく。事務局は事務局長1名と事務局員若干名とし、本連盟の事務及び会計にあたる。
- 11 (経 費) 本連盟の経費は、加入団体の負担金ならびに事業収入、その他寄付金をもってまかなう。
 - イ 加盟団体の負担金は、年額1都道府県8,000円(1都道府県内に2以上の加盟団体をつくるときは1団体4,000円)とする。(1998年8月19日、東京大会において負担金額改正)
 - ロ 大会会費は、その都度決定し参加者の負担とする。部会の経費は必要に応じ大会会費は、その都度決定し参加者の負担とする。部会の経費は必要に応じ、別に徴収することができる。
- 12 (規約の発効) この規約は昭和49年10月30日より発効する。平成18年11月1日改正、同日発効。平成19年11月14日改正、同日発効。

《 申し合わせ事項 》

- 1 各都道府県団体に各校種別(保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、特別支援学校)が揃っている場合は、それぞれから代表する代議員7名を限度として選出する。各校種が揃っていない場合は、所属する校種から偏りのないよう選出する。毎年5月末日までに連盟本部に連絡する。代議員は単なる代議員会構成員であるだけでなく、連盟本部を通じて全国諸団体との日常的な研究、交流、運動等の情報交換を行う。(1992年11月18日、京都大会において代議員5名を7名に変更)
- 2 当分の間、都道府県の実績によっては、当該都道府県団体の希望があれば、県内地域、あるいは学校種別団体の全造連への直接加盟を認める。この場合は加盟団体毎に負担金を納入し、代議員は学校種数の人数を選出する。
- 3 副委員長は、各都道府県から全造連全国大会開催地の当該年度代表者と次年度代表者、及び委員長が推薦した者の3名とする。

平成 25 年度 全国造形教育連盟本部役員

役 職	氏 名	勤 務 校 地 所 在 地	T E L F A X
委員長	永 関 和 雄	町田市立町田第三中学校 ☎194-0032 東京都町田市本町田 1853 e-mail<j-machida3-p@machida-ky.ed.jp>	042-722-6095 042-721-4386
副委員長	菊 田 寛	墨田区立両国中学校 ☎130-0015 東京都墨田区横綱 1-8-1 e-mail<kikuta-hiroshi@sumida.ed.jp>	03-3625-0361 03-3625-0938
副委員長	浅 川 徹	葦崎市立葦崎西中学校 ☎407-0043 山梨県葦崎市神山町鍋山 1-1 e-mail<nirasakinishi-jhs@nirasaki.ed.jp>	0551-22-1431 0551-22-2976
副委員長	天 形 健	福島大学 ☎960-1296 福島県福島市金谷川 1 番地	024-548-8225 024-548-8225
副委員長	鷹 野 晃	北杜市立須玉中学校 ☎408-0104 山梨県北杜市須玉町小倉 200	0551-42-2021 0551-42-2022
会計監査	殿 村 靖 廣	葛飾区立大道中学校 ☎124-0011 東京都葛飾区四つ木 5-22-1	03-3693-3350 03-5698-1764
会計監査	平 田 耕 介	新宿区立愛日小学校 ☎162-0834 東京都新宿区北町 26	03-3266-1604 03-3266-8084
国 際 局	大坪圭輔	武蔵野美術大学 ☎187-8505 東京都小平市小川 1-736 e-mail<ohtsubo@musabi.ac.jp>	042-342-6373 (TEL・FAX 共通)
事務局長	時 任 勝	八王子市立みなみ野君田小学校 ☎192-0916 東京都八王子市みなみ野 4-3-1 e-mail<cabocabo@d2.dion.ne.jp>	042-637-5505 (事務局直通・共通)
事務局	加 藤 幸 子	新宿区立東戸山小学校 ☎162-0052 東京都新宿区戸山 2-34-2	03-3205-9504 03-3205-9487
事務局	菅 原 亮	世田谷区立山野小学校 ☎157-0073 東京都世田谷区砧 6-7-1	03-3417-3322 03-3417-3348
事務局	山 崎 正 明	千歳市立北斗中学校 ☎066-0073 北海道千歳市北斗 5 丁目 1-1	0123-22-4151 0123-22-4152
事務局	上 野 目 浩 一	港区立六本木中学校 ☎106-0032 東京都港区六本木 6 丁目 8 番 16	03-3404-8855 03-3404-8856
事務局	佐 藤 真 理 子	大田区立南六郷中学校 ☎152-0033 東京都大田区南六郷 3-2-1	03-3732-9351 03-3732-9353
事務局	竹 谷 摩 維 子	豊島区立池袋第二小学校 ☎170-0011 東京都豊島区池袋本町 1-43-1	03-3986-7176 03-5951-3901

研究の歩み・
規約・名簿

平成 25 年度 全国造形教育連盟 学校種別部長・事務局長

幼稚園・保育園 部 長	横 英 子	淑徳大学 ☎260-8701 千葉県千葉市中央区大蔵寺町 200	043-265-7331 043-265-8310
小学校 (部 長)	高 橋 香 苗	江戸川区立南小岩小学校 ☎133-0056 東京都江戸川区南小岩 4-16-1	03-3657-1565 03-3658-5833
(事務局長)	濱 方 克 彦	北区立西ヶ原小学校 ☎114-0024 東京都北区西ヶ原 4-19-21	03-3910-5202 03-5567-4525
中学校 (部 長)	殿 村 靖 廣	葛飾区立大道中学校 ☎124-0011 東京都葛飾区四つ木 5-22-1	03-3693-3350 03-5698-1764
(事務局長)	伊 藤 範 彦	墨田区立墨田中学校 ☎131-0033 墨田区向島 4-25-22	03-3625-0351 03-3625-0424
高等学校 (部 長)	佐 藤 清 親	都立総合芸術高等学校 ☎162-0067 東京都新宿区富久町 22-1	03-3354-5288 03-3354-6322
(事務局長)	小 野 征 一 郎	千代田区立九段中等教育学校 ☎102-0073 東京都千代田区九段北 2-2-1	03-3263-7190 03-3288-3499
大 学 (部 長)	三 澤 一 実	武蔵野美術大学教職課程研究室 ☎187-8505 東京都小平市小川町 1-736	042-342-9537 (直通 TEL・FAX 共通)
(事務局長)	北 沢 昌 代	聖徳大学短期大学部 保育科 ☎271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550 e-mail<kitazawa@seitoku.ac.jp>	047-365-1111 047-363-1401
特別支援 (部 長)	山 口 真 佐 子	都立府中けやきの森学園 ☎183-0003 東京都府中市朝日町 3-14-1	042-367-2511 042-369-8476
(事務局長)	石 丸 良 成	都立府中けやきの森学園 ☎183-0003 東京都府中市朝日町 3-14-1	042-367-2511 042-369-8476
美術館 (部 長)	三 澤 一 実	武蔵野美術大学教職課程研究室 ☎187-8505 東京都小平市小川町 1-736	042-342-9537 (直通 TEL・FAX 共通)
(事務局長)			

25 年度 全造連東京大会運営委員名簿

役 職	氏 名	所 属 (2 5 年 4 月 1 日 現 在)	校種
全造連委員長	永 関 和 雄	町田市立町田第三中学校	中
全 造 連 事 務 局 長	時 任 勝	八王子市立みなみ野君田小学校	小
大会会長	菊 田 寛	墨田区立両国中学校	中
大会副会長	大坪 圭輔	武蔵野美術大学	大
大会実行委員長	高橋 香苗	江戸川区立南小岩小学校	小
大会副実行委員長 (各校種より)	平 田 耕 介	新宿区立愛日小学校	小
	殿 村 靖 廣	葛飾区立大道中学校	中
	香 村 智	八王子市立中山中学校	中
	萩 原 和 彦	町田市立山崎中学校	中
	茜谷 佳世子	足立区立竹の塚中学校	中
	市 川 治 郎	都立田無高等学校	高
	佐 藤 清 親	都立総合芸術高校	高
	石 丸 良 成	都立府中けやきの森学園	特
	三 澤 一 実	武蔵野美術大学	大
	田 村 秀 子	文京区立千駄木幼稚園	幼
	稲庭 彩和子	東京都美術館	美
研究委員長	中 村 一 哉	府中市立府中第五中学校	中
研究副委員長	田 中 明 美	品川区立立会小学校	小
事務局長	大 道 博 敏	江戸川区立平井西小学校	小
事務局次長	佐藤 真理子	大田区立南六郷中学校	中
	小野 征一郎	千代田区立九段中等教育学校	高
	本 間 基 史	新宿区立戸塚第二小学校	小
	相 田 隆 司	東京学芸大学	大
研究局長	濱 脇 みどり	西東京市立田無第一中学校	中
研究局次長	田中 明美	品川区立立会小学校	小
	長島 春美	都立田柄高等学校	高
	水 島 尚 喜	聖心女子大学	大
	小 池 研 二	横浜国立大学	大
庶務局長	河 田 あすか	日野市立第三中学校	中
庶務局次長	福岡 貴彦	目黒区立上目黒小学校	小
厚生局長	坂 東 由 香 里	足立区立第十四中学校	中
厚生局次長	池田 仁美	台東区立田原小学校	小
編集局長	上 野 千 絵 子	目黒区立中根小学校	小
編集局次長	奥井 伸	墨田区立桜堤中学校	中
広報局長	加 藤 幸 子	新宿区立東戸山小学校	小
広報局次長	伊 藤 範 彦	墨田区立墨田中学校	中

役 職		氏 名	所 属 (2 5 年 4 月 現 在)	校種
事務局	東京都 関係・ 会計	鶴内 秀一	府中市立武蔵台小学校	小
		浦野 加世子	江東区立豊洲小学校	小
		丸山 紀子	江東区立第六砂町小学校	小
	全国関係 ・ 渉外	諸井 奈津子	大田区立矢口中学校	中
		福島 淳子	町田市立金井中学校	中
		藤 方 洋 子	墨 田 区 立 八 広 幼 稚 園	幼
研究局	指導案 研究部	谷田 直勝	江東区立枝川小学校	小
		近藤 麻里	江東区立東雲小学校	小
	授業・ 協議会 計画部	高村 弘志	中央区立泰明小学校（幼小）	小
		松尾 美恵	中野区立中野中学校	中
		近藤 幸司	渋谷区立代々木中学校	中
		福 地 誠 子	新 宿 区 立 西 戸 山 中 学 校	中
		落 合 良 美	千 代 田 区 立 九 段 中 等 教 育 学 校	高
		中 西 一 洋	都 立 両 国 高 等 学 校	高
		仲 田 恵	江 東 区 立 な で し こ 幼 稚 園	幼
		亀 井 愛	三 井 記 念 美 術 館	美
		平 谷 美 華 子	東 京 富 士 美 術 館	美
庶務局	全体会場 運営部	加藤 真	杉並区立高井戸第四小学校	小
		田村 有希	足立区立弘道小学校	小
	分科会場 運営部	石井 恵美子	文京区立第三中学校	中
		小澤 明子	江 戸 川 区 立 篠 崎 幼 稚 園	幼
厚生部	レセプ ション 運営部	内田 佳代子	目黒区立碑小学校	小
		石田 智春	渋谷区立広尾小学校	小
		深見 響子	世田谷区立上祖師谷中学校	中
	昼食関係 接待担当	佐藤 真理	板橋区立赤塚第三中学校	中
		大村 志保子	墨田区立立花中学校	中
		矢 野 靖 子	葛 飾 区 立 水 元 幼 稚 園	幼
編集局	研究紀要 編集部	田中 武史	墨田区立中和小学校	小
		村上 剛	墨田区立中川小学校	小
		山崎 ゆき	荒川区立第七峡田小学校	小
		漁 美由紀	江戸川区立尾久小学校	小
	報告書 編集部	川田 保子	世田谷区立桜丘中学校	中
		瀬戸口 良太	都立王子総合高等学校	高
		甲斐 健太	都立浅草高等学校	高
		能澤 大輔	都立足立高等学校定時制	高
		箕輪 恵美	中央区立明石幼稚園	幼
広報局	案内状 編集部	麻 佐知子	新宿区立市谷小学校	小
		菅原 亮	世田谷区立山野小学校	小
	Hp/Web 作成部	(志手 伸圭)	足立区立淵江中学校	中
		松尾 英治	大田区立貝塚中学校	中
		若松 由希子	都立桐ヶ丘高等学校	高
		奥 田 陽 子	都立世田谷泉高等学校	高
		中 西 一 洋	都立両国高等学校	高

全造研 幼稚園部会 組織図

担 当	氏 名	所 属 名
東京大会副実行委員長・ 分科会 1 提案者	田村 秀子	文京区立千駄木幼稚園
事務局	藤方 洋子	墨田区立八広幼稚園
研究局	仲田 恵	江東区立なでしこ幼稚園
庶務局	小澤 明子	江戸川区立篠崎幼稚園
厚生部	矢野 靖子	葛飾区立水元幼稚園
編集局	箕輪 恵美	中央区立明石幼稚園
実践発表	篠原 直子	練馬区立光が丘さくら幼稚園
	當銀 玲子	千葉県浦安市立美浜南幼稚園
	大澤 ちづる	東京学芸大学附属幼稚園
	飯島 弘子	神奈川県横須賀市立大楠幼稚園
授業者	矢澤 弘美	文京区立千駄木幼稚園
	鈴木 直子	
	野崎 美幸	
	木下 えり子	
	吉田 広恵	
	野木村 温子	
全造連幼稚園部会 代表	槇 英子	淑徳大学

第52回東京都図画工作研究大会



大会会長 大会副会長			(都図研会長) (会場校校長)	高橋 香苗 山田 誠一	江戸川区立南小岩小学校 江東区立南砂小学校
都図研顧問校長 都図研理事長 都図研副会長 (城東大会担当)	飯澤 公夫 平田 耕介 田中 明美 上野千絵子	八王子市立船田小学校 新宿区立愛日小学校 品川区立立会小学校 目黒区立中根小学校	全道連事務局長	大道 博敏	江戸川区立平井西小学校
			実行委員長	小島 弘美	江東区立南砂小学校
			実行副委員長 (城東5区図工部顧問校長)	君塚 清春	江東区立第三大島小学校長
				水越 康之	江戸川区立上一色南小学校長
				駒野真理子	葛飾区立西亀有小学校長
				飯村 誠一	荒川区立第六瑞光小学校長
				島埜 秀男	墨田区立押上小学校長
				伊藤 秀一	江東区立南陽小学校長
				関 康男	江戸川区立南小岩小学校長
				小山 信明	江戸川区立上小岩小学校長
				森内 昌也	葛飾区立幸田小学校長

城東大会研究推進委員会

城東大会研究全体会

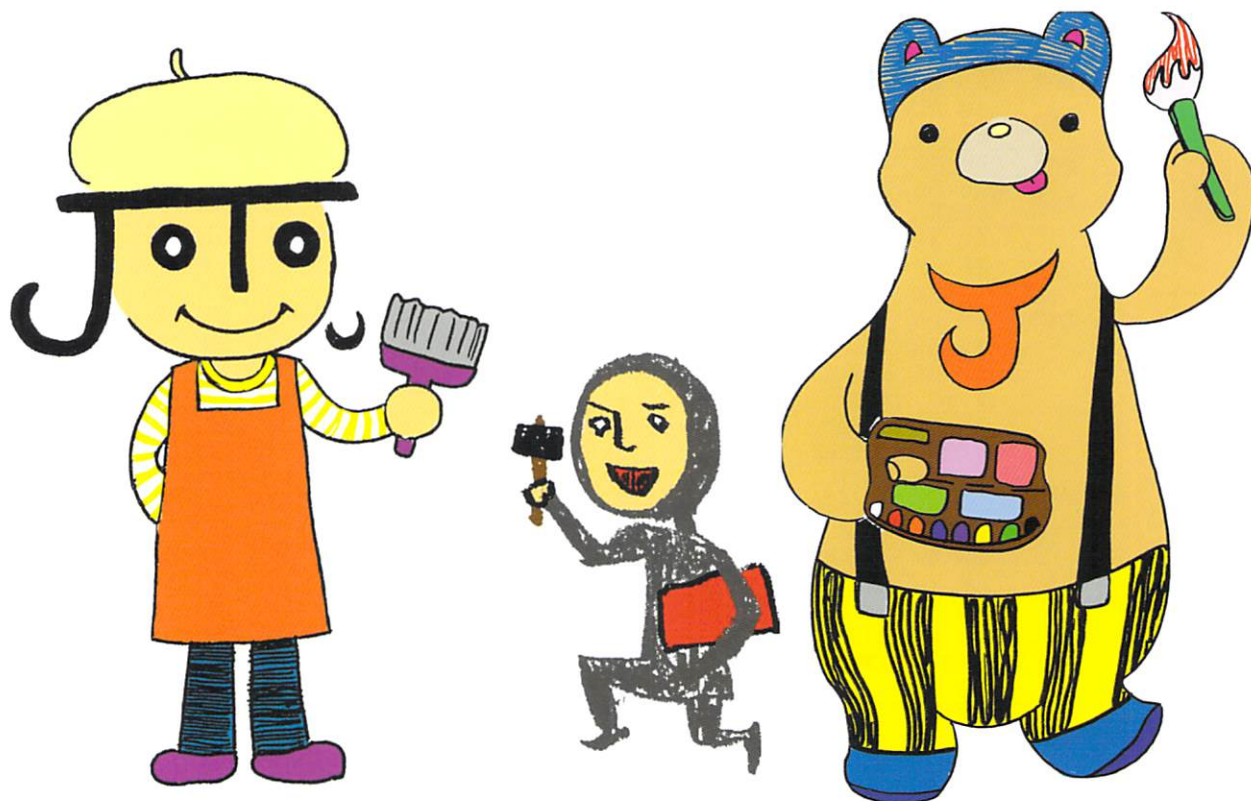
事務局	◎浦野佳代子 江東区豊洲	◎眞野 優子 江戸川区一之江第二					
総務	小川 百合 江東区明治 工藤由紀子 荒川区汐入東	尾科婦美子 墨田区錦糸	東川 晴美 葛飾区住吉	坂元 隆行 江戸川区平井東			
庶務	◎小林 知子 江東区深川	今井 成子 葛飾区飯塚	大道 博敬 江戸川区平井西	近野 芳美 江戸川区南篠崎			
会計局	◎丸山 紀子 江東区第六砂町						
区会計	古館 俊江 江東区臨海 菅谷 千紘 荒川区大門	吉野麻哉子 墨田区二葉	高橋 高江 葛飾区新宿	神原佳代子 江戸川区大杉東			
事業局	◎浦澤 秀樹 葛飾区北野	◎星野加代子 江戸川区南小岩第二					
渉外部	◎松元 利道 江東区越中島 小野里雅由 葛飾区南綾瀬	中村喜代子 江東区東陽	柳原 久乃 江東区第四砂町	武 周子 江戸川区第三葛西			
会場部	齋藤 隆俊 江東区葛橋	稲葉 優子 葛飾区南栗戸	金指 圭吾 荒川区第一葛西	佐山 雄基 江戸川区松本			
	内野 正子 江東区亀高	大島淳一郎 葛飾区奥戸	井上 香織 江戸川区第二葛西	佐久間 亮 江戸川区平井			
	三浦 貴雄 江東区川南	箱崎 秀幸 葛飾区上千葉	四ツ目 理恵 江戸川区豊骨	星野 愛 江戸川区小松川			
	石松 哲威 墨田区緑	山崎真由美 葛飾区東水元	廣瀬 幸枝 江戸川区西小岩	高井 律子 江戸川区篠崎第四			
	長塚 有紀 墨田区曳舟	一文字裕子 葛飾区亀有	山田 千尋 江戸川区手喜田	小島 啓子 江戸川区小松川			
	洞口 幸子 墨田区八広	四本 大祐 葛飾区柴原	刀根 絵里 江戸川区清瀬第二				
設営部	東 昌子 墨田区押上	◎寺島 秀明 荒川区第六瑞光					
	青池 昭代 江東区東砂	山田 洋 葛飾区本田	笹野 浩子 葛飾区こすげ	齋藤 淑子 江戸川区小松川第二			
	星 久美子 江東区元加賀	松本 美香 葛飾区花の木	坂村 幸雄 荒川区第四葛田	石井 和好 江戸川区大杉第二			
	發知 美黄 江東区東川	宇多田美幸 葛飾区川端	井手本美紀 江戸川区中小岩	森 幸子 江戸川区上小岩			
	◎藤原 秀之 墨田区東吾嬬	田平 愛子 葛飾区西亀有	星野 淳子 江戸川区清瀬第一	青地 一 江戸川区篠崎第二			
	工藤 俊祐 墨田区第二寺島	古賀 愛 葛飾区江江	杉山 彰子 江戸川区上一色南	齋藤 誠子 江戸川区東小松川			
編集局	田邊 寛 葛飾区東綾瀬	中林 樹生 葛飾区江江					
	◎山崎 ゆき 荒川区第七葛田	◎大塚 貢 江戸川区東葛西					
	◎檜森 秀子 江東区小名木川	塚越摩有美 墨田区立花吾嬬小森	浦本美枝子 荒川区汐入	佐藤 理英 江戸川区南葛西第二			
	佐藤 藤子 江東区香取	藤来 綾子 葛飾区道上	井野早穂里 荒川区尾久	市川美和子 江戸川区第二葛西			
	薬師神直美 江東区辰巳	竹越 桃子 葛飾区二上	水田 麻衣 江戸川区二之江	玉浦 敦子 江戸川区平井第二			
	谷村 類子 墨田区外手	岡本 典子 葛飾区中野戸	大堀 智子 江戸川区東小岩	漁 美由紀 江戸川区二之江第三			
記録部	満田 彩香 江東区第二大島	◎阿部恵子 葛飾区鎌倉	内海 朗子 荒川区西久六	大井 理江 江戸川区篠崎第五			
	兒島 知世 江東区数矢	吉岡 法子 葛飾区幸田	大野 美織 葛飾区西小管	坂元 宣和 江戸川区本一色			
	四ッ谷久美子 墨田区第三葛田	藤岡 奈々 墨田区小梅	佐藤 実 葛飾区上平井	山崎由三子 江戸川区南葛西			
	込山 希 江東区北砂	伊藤 香織 葛飾区原田	菅野 幸恵 江戸川区二之江第二	西川久美子 江戸川区西小松川			
	森脇 晃 江東区第二砂町	小塚 剛史 荒川区第三葛西	石上 雄矢 江戸川区豊骨東				
	◎田中 武史 墨田区中和	三木 恵子 葛飾区中之台	三浦 彩 江戸川区小岩				
紀要部	村上 剛 墨田区中川	丸山 陽子 江戸川区春江	賀数 真弓 江戸川区豊本				

研究の歩み・規約・名簿

城東大会研究全体会

研究局	江東区校川	望月 慶	江東区大島南央	成田 麻美	江東区第五砂町	木口 恵子	江東区第一亀戸
	江東区東雲	堀井 未知	江東区浅間整川	菊地 彩香	江東区豊洲北	高野 健司	江東区第一大島
	江東区南島	岩崎 陽	江東区水神	小林ちあき	江東区第二亀戸	川村 かおり	江東区第四大島
	江東区第三砂町	江尻佳奈映	江東区砂町	片山 知子	江東区毛利	菊地 光平	江東区八名川
	江東区第三大島	佐々木大輔	江東区第二辰巳	上野果菜子	江東区平久		
	江東区第五大島	平原 麻恵	江東区有明	船山 良子	江東区第七砂町		
研究局	江戸川区第三松江	橋本 尚子	江戸川区江戸川	奥田 良英	江戸川区北小岩	草薙 奈巳	江戸川区西葛西
	江戸川区新田	中嶋 秀美	江戸川区一之江	川田 泰之	江戸川区船堀	山田真梨子	江戸川区第七葛西
	江戸川区平井南	谷口 友梨	江戸川区篠崎	※保科 綾子	江戸川区船堀第二	大森はるか	江戸川区鎌田
	江戸川区西之江	鈴木 牧子	江戸川区下鎌田西	三好 知佳	江戸川区葛西	満田木育代	江戸川区小岩
	江戸川区大杉	眞鍋 和美	江戸川区篠崎第三	宇田 幸正	江戸川区第五葛西	鳥海 良太	江戸川区上小岩第二
	江戸川区瑞江	木澤 奈月	江戸川区下小岩	九十九由紀	江戸川区第六葛西	笠原 優子	江戸川区上一色
研究局	江戸川区新堀	錦織 弘幸	江戸川区清瀬第三	衛藤 陽子	江戸川区下鎌田東		
	江戸川区下鎌田	上手 佐希	江戸川区臨海	高橋 晶子	江戸川区南葛西第三		
	葛飾区白鳥	吉原 沙織	葛飾区東柴又	奥山 美香	葛飾区金町	三五 郁美	葛飾区水元
	葛飾区葛飾	本郷麻菜美	葛飾区半田	市川 佳純	葛飾区末広	中山美由紀	葛飾区柴又
	葛飾区上小松	古川 理恵	葛飾区堀切	※村尾 彩子	葛飾区よぎ	山戸ちひろ	葛飾区宝木塚
	葛飾区小松南	吉田さやか	葛飾区木根川	秋葉カほり	葛飾区松上	峯本さおり	葛飾区清和
研究局	葛飾区稲田	上田 ふみ	葛飾区梅田	熊野 泉		三好真珠美	葛飾区綾南
	葛飾区東金町	山川 知也	葛飾区青戸	※荒谷 明恵	葛飾区高砂ヶやき学園		
	荒川区尾久西	石川奈保子	荒川区第二峡田	※近藤 愛	荒川区第六日暮里	杉田ひろみ	荒川区汐入
	荒川区第三瑞光	大山 りみ	荒川区第三峡田	戸崎 恵子	荒川区ひぐらし	佐藤咲弥香	荒川区瑞光
	荒川区第二瑞光	川上 耕	荒川区第五峡田	※後藤真理子	荒川区赤土	福本雄一郎	荒川区第二峡田
	荒川区瑞光	大石 利佳	荒川区第九峡田	桑島 有子	荒川区第二日暮里		
都府研究局	荒川区尾久宮前	※田村久仁子	荒川区峡田	木下紗世子	荒川区第九峡田		
	墨田区第一寺島	上野 邦義	墨田区第四吾端	京嶋 一喜	墨田区言問		
	墨田区葉平	清水 一成	墨田区梅若	岩崎 麻美	墨田区柳島		
	墨田区隅田	高橋 智	墨田区両国	濱端 美穂	墨田区横川		
	墨田区第三寺島						
	墨田区菊川						
都府研究局	雨宮 玄	あきる野市東秋留	加藤 貴子	世田谷区上北沢	河原 賢一	狛江市和泉	菅谷 千紘
	中島 綾子	台東区金竜	山田 和弘	千代田区お茶の水	宮内 愛	清瀬市清瀬八	渋谷区長谷戸
	増田三恵子	太田区入新井一	和久井智洋	練馬区大泉	杉山 聡	板橋区板橋六	世田谷区駒沢
	掛川 智子	町田市南四					狛江市狛江五

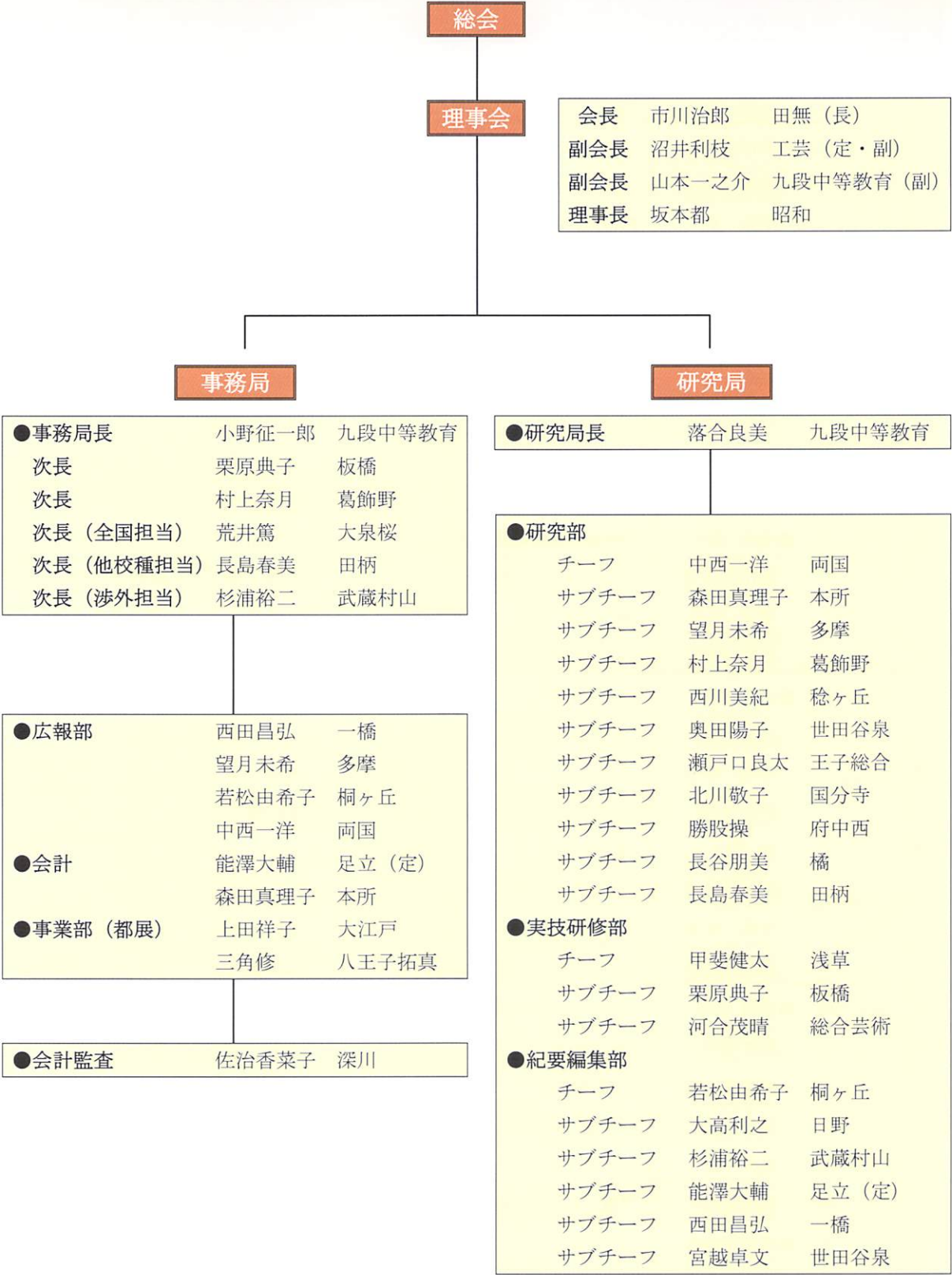
○副研究局長 ※分科会責任者



第31回 東京都中学校美術教育研究大会 組織

役 職	氏 名	所 属	役 職	氏 名	所 属
1 大会会長	■殿村 靖廣	大道中学校	都中美関係運営委員 (前表記者除く)		
2 事務局長	伊藤 範彦	墨田中学校	34	福島 淳子	金井中学校
3 実行委員長	■茜谷佳世子	竹の塚中学校	35	長尾 菊絵	ひばりヶ丘中学校
4	萩原 和彦	山崎中学校	36	中村みどり	武蔵野第六中学校
5	岩永 章	新宿西戸山中学校	37	石井恵美子	文京・第三中学校
6 副実行委員	永久保佳孝	目黒・第七中学校	38	畠山 真理	桐田中学校
7	岩下 敏夫	砧中学校	39	松尾 英治	貝塚中学校
8	白倉 昌裕	笹塚中学校	40	小川 永祐	砧中学校
9	石黒 晋	尾山台中学校	41	大西 均	駒留中学校
10 都中美本部	菊田 寛	両国中学校	42	菊池 美聡	落合第二中学校
11 アドバイザー	香村 智	中山中学校	43	安島 典子	狛江第四中学校
第2ブロック関係運営委員			44	倉科 幸雄	西池袋中学校
12 事務局長	■福地 誠子	新宿西戸山中学校	45	大村志保子	立花中学校
13	奥山たみ恵	目黒・第八中学校	46	内田 善人	南中野中学校
14 次長	榎本 美深	尾山台中学校	47	高崎美也子	深川第四中学校
15	鹿倉 美帆	広尾中学校	48	猪口 正和	井草中学校
16 研究局長	■近藤 幸司	代々木中学校	49	花里 裕子	中野・第五中学校
17	深谷 玲子	牛込第三中学校	50	三浦 悦子	青井中学校
18 次長	早崎 希子	目黒・第九中学校	51	櫻原 純子	目黒中央中学校
19	井上 牧子	砧南中学校	52	桶川希三子	千歳中学校
20	森 秀二	鉢山中学校	53	志手 伸圭	澁江中学校
21 都中美本部	濱脇みどり	田無第一中学校	54	深見 響子	上祖師谷中学校
22	松尾 恵美	中野中学校	55	中村奈穂子	世田谷中学校
23 大会本部	福地 誠子	新宿西戸山中学校	56	高津健太郎	弦巻中学校
24 編集局長	■吉村 響子	目黒・第十中学校	57	河本 珠実	東山中学校
25	川田 保子	桜丘中学校	58	永関 和雄	町田第三中学校
26 次長	田邊真由美	松濤中学校	59	中村 一哉	府中第五中学校
27	神野 智彦	西早稻田中学校	60	佐藤真理子	南六郷中学校
28 都中美本部	奥井 伸	桜堤中学校	61	河田あすか	日野・第三中学校
29 大会本部	羽塚美和子	目黒・第七中学校	62	坂東由香里	足立・第十四中学校
30 庶務局長	■黒葛原範頭	深沢中学校	63	諸井奈津子	矢口中学校
31	横山 真理	笹塚中学校	64	佐藤 真理	赤塚第三中学校
32 次長	立川 英司	新宿中学校			
33	片岡崇遠近	目黒・第一中学校			

東京都高等学校美術工芸教育研究会 組織図



研究の歩み・
規約・名簿

特別支援教育分科会 研究に携わった方々

授業実践の発表

ライトドローイングの授業実践映像 (石神井特別支援学校 海老沢 穰・高橋 真吾)

美術と陶芸の授業実践映像とワークショップと教材展示

(府中けやきの森学園 石丸 良成)

作品展示

「ガムテープ彫刻」

(調布特別支援学校 中学部 関 圭一郎)

「ピカピカ光るスライムアート」

(江戸川特別支援学校 中学部自立活動の学習グループ 坂口 亮)

「転がし絵とスタンプ絵」

(府中けやきの森 小学部低学年 新田美由紀)

「パウチッコアート」

(府中けやきの森 小学部高学年 田中美智子)

「陶鈴」「パルプアート」「音遊びの絵」「ぬか糊の染め布絵」

(府中けやきの森 中学部 石丸 良成)

「銅板の鍛金」

(府中けやきの森 高等部 小峰 咲恵)

作品展示の協力と助言

(武蔵台学園 講師 長谷川 博)

大学部会

全国大学造形美術教育連絡協議会 (協議会)	
◎大学部会部長 新野貴則 山梨大学 大嶋 彰 滋賀大学 相田隆司 東京学芸大学 小澤基弘 埼玉大学 小池研二 横浜国立大学 井坂健一郎 山梨大学	○事務局長 三澤一実 武蔵野美術大学 磯部錦司 梶山女子学園大学 大成哲雄 聖徳大学
全国教育大学協会美術部門 (教大協)	全国大学造形美術教員養成協議会 (全美協)
◎代表 大嶋 彰 滋賀大学 ○副代表 山口喜雄 宇都宮大学 ○副代表 岩村伸一 京都教育大学 ○総務局長 相田隆司 東京学芸大学 ○部門総務部長 大泉義一 横浜国立大学 ・総務部 新野貴則 山梨大学 大成哲雄 聖徳大学 山田一美 東京学芸大学 郡司明子 群馬大学 松尾大介 上越教育大学	◎委員長 三澤一実 武蔵野美術大学 ○副委員長 磯部錦司 梶山女子学園大学 ○副委員長 大成哲雄 聖徳大学 ○事務局長 北沢昌代 聖徳大学短期大学部 ・事務局 杉山貴洋 白梅学園大学 畠山智宏 清和大学短期大学部

全造連美術館部会 大会委員および授業者・指導者	
三澤一実 武蔵野美術大学 稲庭彩和子 東京都美術館 平谷美華子 東京富士美術館 小川直人 せんだいメディアテーク 郷 泰典 東京都現代美術館 亀井 愛 三井記念美術館 熊谷香寿美 東京都美術館 原瀬裕孝 ルーヴル-DNP ミュージアムラボ 伊藤達矢 東京藝術大学	美術館部会部長/大会副実行委員長 大会副実行委員長/中学校指導助言者 大会研究局委員 小学校指導助言者 小学校指導助言者 中学校授業者 中学校授業者 中学校授業者 大学・美術館部会協力者

2013 TOKYO

**第66回 全国造形教育研究大会
東京大会**

**造形美術教育のダイナミズム — 成長と連携 —
報告書**

2014年2月17日発行

発行者	東京都造形教育協議会
代 表	第66回全国造形教育研究大会 大会会長 菊田 寛
事務局	江戸川区立平井西小学校 TEL:03-3612-9498 TEL:03-3611-3201 大会事務局長 大道 博敏
表紙デザイン	江東区立辰巳小学校 薬師神 直美
印刷・製本	伊部印刷株式会社 福井県越前市家久町 29-8-1 TEL: 0778-23-5037